

山岳

第三十三年
第二號

山
岳

第三十三年第二號

山岳第三十三年第二號目次

冬の小長白山

登山に於ける山と人間

——あそびを通じての登山の解釋——

伊奈川と中御所谷

鳥 甲 山

アレキサンダー・ミッチェル・ケラスに就いて

マッターホルンの山名に就いて

會 務 報 告

九、十月理事會——新入會員——退會者——會員計報

早 大 山 岳 部

一頁

井 上 幸 治

二五

吉 澤 一 郎

四

中 村 謙

五

望 月 達 夫

八

吉 澤 一 郎

一四

一五

寫眞

甫上洞より冠帽峰

二頁
三頁

冠帽峰附近の圖

二頁
四頁
五頁

机山峰の第二キャンブ

三頁
三頁

伊奈川遡行圖

四頁
四頁

朱乙の町端れ

〃

伊奈川源頭見取圖

五頁
五頁

伊奈川源頭、上ノ千疊敷俯瞰

五頁
五頁

中御所谷濁澤概念圖

六頁
六頁

伊奈川棧道

〃

伊奈川源頭、水無シ平

六頁
六頁

三澤岳頂上より木曾駒主脈

六頁
六頁

中御所谷

七頁
七頁

山岳第三十二年總目次

地圖

附錄

冬の小長白山脈

早稻田大學體育會山岳部

ふゆ　く　が　み

朝鮮半島の北端、其處は褐色一色に塗りつぶされた高地を形成してゐる。この高臺の東縁、日本海に迫つてゐる山稜はシベリヤのツングース山脈の延長とも見られ、小長白山脈と呼ばれてゐる。その主なる部分即ち茂山より南、北緯四一度以北、羅南鏡城の西方には、冠帽峰カンマツボウ（二五四一米）、雲嶺ウンリョウ（二三四〇米）、机山峰コシザンボウ（二二七二米）、兜峰ブツボウ（二三五五米）、雪嶺セツリョウ（二二四三米）等二千米級の山頂を數へる事が出来る。其處には切立つたスノーリツヂや物凄い斷崖等、一見して我々の血を高鳴らせる山相は求められないが、何處となく大陸的な趣きの異つたスケールの大さと共に峻烈な西北風と嚴寒とがまた我々の心をひきつけてゐた。

昭和十一年暮より十二年正月にかけて、早大山岳部はこの小長白山脈へ遠征隊を送り出した處、幸ひにも各方面からの手厚い御後援に依り無事所期の目的を達することができた。我々は此の報告を書くに當り、今回の登山に絶大な援助を與へられた京城帝大山岳部、朝鮮總督府當局を始め地元各位に對してここに厚く感

謝の意を表する次第である

尙本文は一隊員の行動を中心として、出来るだけ全隊員の行動の全貌を傳へる様にまとめられた、主として紀行的な報告である。従つて詳細は當部部報を續讀されたい。

隊員

理工學部學生	隊長	灘波清一
理工學部學生		小西宗明
理工學部學生		小林雄次郎
理工學部學生		廣瀬麟一
理工學部學生		尾關正二
理工學部學生		鍋島直定
商學部學生		太田裕吉
第一早高理科學生		山田兵輔
第一早高理科學生		關根吉郎
第一早高文科學生		二宮忠
第一早高文科學生		大井忠一
第一早高文科學生		鈴木正俊

外に通譯及雜役人夫として金谷^{キンヤ}品^{チン}



甫上洞より冠帽峰

早大山岳部

地圖

朝鮮總督府土地調查局五萬分の一
鳳波洞 ゴンベドシ 冠帽峰 カシモトシ 城町 ツシヂヨシ 雪嶺 ソルリヤシ 鏡城 キョウシヨシ

一、出 發

十一月も半ばを過ぎる頃になり、隊長灘波以下十二名の隊員が確定し、係が割當られた。時日が切迫して來てゐるので、非常に忙しかつたが、全部員の協力に依り仕事は次々と捗つて行つた。

器具係は天幕の改造、オーバーシューズの考案、アークテイク Tent の張網、換氣孔等々について色々頭を悩ました。食料係は出来るだけ凍らないもので、而も營養價の高いものを探し、全期間中の献立表を作り上げて、各キャンプ毎に梱包することにして、其の割當てに種々協議を重ねた。更に無電係は低溫度に對する電源の保温裝置を考案し、機械のテストを毎日の様に行つた。十二月十八日梱包作業も漸く終了して、赤のペンキで一〇三とか三〇二とか記された三十六個約七百疋の荷物がトラックに積まれて威勢よく校門より送り出された時には、皆ほつと重荷を下した様だつた。然しそれも束の間、後から後からと細かな仕事に悩まれた。

十二月廿日 鍋島、太田の兩名は先發隊として東京を發つて、京城で遞信局に行き豫て申請中の無電使用
冬の小長白山脈

に關し諒解を求めると共に、朱乙より浦上洞^{ボウサンドウ}迄行つて本隊の便宜を計つた。

廿四日 午後三時東京驛より本隊出發

廿五日 連絡船。よく晴れた海上は至つて平穩の中に夕刻釜山に到着した。初めて見る釜山の街。既に夕闇の中に沈んでゐるが、點々と白く輝く灯。黒い迄に澄んだ空には星。數時間の間、天井の低い船室の中に閉込められてゐた我々には、之等の景色が今尙眼前に浮ぶ様に強く焼付けられた。背子を負つた朝鮮人、煉瓦建の驛の前の廣場の様子、之等は到底内地には見る事の出来ない景色であらう。九時三十分釜山發。ブラットホームの低い廣軌の鐵道も我々には一寸珍らしかつた。

廿六日 約一時間遅延して龍山に着く。鐵道局の飯山氏に迎へられ驛前の局友會館に落ちつく。豫て今年の朝鮮は例年になく暖かであるとは聞いてゐたが、末だ漢江の水も張つてゐない。此所で鐵道電話をかりて先發隊と連絡を取り、萬事好都合に行つた山一同漸く安心した。三時五十五分發の列車に我々は城大パーテイに参加の爲め、甫上洞迄同行される飯山氏と共に乗り朱乙へと向つた。

廿七日 六時頃眼を覺ます。北鮮の六時と云へば未だ眞暗闇、點々として残る雪が二重窓を通して白く流れて行く。下車の用意をする中やがて夜も明けて來た。左手遙かに冠帽峰が其の眞白な姿を現はしてゐるのが眼についた。七時四十分列車は最終下車驛朱乙に到着した。鍋島、太田の先發隊員に迎へられて一先驛前の旅舎に入つた。

二、源 水 谷 へ

綺麗に澄みきつた空の向ふには大きく冠帽峰が姿を見せてゐる。

朱乙より甫上洞迄は約六哩の行程で、其の半ば程の所に城町の部落があり、派出所・森林保護區がある。道は朱乙より小平野を横斷してそれより嘯老川ボロシに沿つて奥へ進む。のんびりした牛櫓ウシゴの後について進む。此の平野の端の小さな峠で晝食を攝る。

朝鮮ではよく煙草を吸ふと見えて到る所に「タバコ」の看板が見られる。城町には十五時に着いた。牛を取り代へたりして時間を取られ、城町を出て約一時間で邊りは薄暗くなつて來た。陽が沈むと流石に寒氣が身に迫つて來る。將軍岩の邊りにかゝる頃から満月が我々の行手を照らしてくれた。十九時、我々の第一日の行程を了へて全己南の家に入ることが出來た。

二十八日 早朝起床、先日豫約して置いた二十人の人夫の來着を待つて、荷物の分配にかゝる。言葉が良く通じないが、金々詰に通譯さして九時三十分出發することが出來た。何時に變らぬ重荷を負つて、人馬の往來に堅く踏みかためられた雪道にスキーを滑らして行く。北黃細嶺ブクワシニリヨンへの苦しいヂツグザツクの道を登り切る頃、既に陽も落ち冷やかな月の光が金谷洞コンコッデへの道を照らしてゐた。

二十九日 暖い溫突ともしばらく今日でお別れになると思ふと、この溫突が一寸惜しい氣がする。ベース

キャンプ地選定の爲に三名を先發、本隊は約一時間遅れて出發。民家を出て澤を一つ越え、一〇〇米も登つた頃廣い臺地の端に出た。

俄かに開いた眺望の向ふに兜峰より机山峰一帯にかけて太く廣い尾根が圓い頂上に向つて居り、鋭くはないが、軟らかな線を持つた美しさで我々を迎へてくれた。此の廣い臺地を横切つて急坂を滑り下りると、源水嶺を發する狭い澤に出る。それより其の澤に沿つて約一時間登ると源水谷^{ゲンスイコウ}最奥の部落生龍洞に到着した。

此所で遅れた人夫を待つ。時刻は既に十六時を過ぎようとしてゐる。可成り待つて人夫が到着した。彼等は荷が重いか何とか云つて少々ぐづついたが、結局生龍洞を出たのはもう夕闇の迫る十七時であつた。苦しい前進を續けること約二時間の後、先發隊が作つてくれたベースキャンプ地に到着した。人夫には一月十一日に生龍洞へ來る様に約して直ちに返へす。

そして我々は此處に八人用屋根型天幕と五人用ウィンパーテントを張つた。此處は豫て夏季偵察の時第二候補地としてゐた所で、天幕に接して既に人も居らず、荒れるにまかせた火田民の家があり、其の中で炊事も出来るので丁度恰好な地であつた。

之より行動の便宜上四隊に分けられた。

A 隊 灘 波 清 一

小林 雄 次 郎

D 隊 小 西 宗 明

鈴木 正 俊

鍋島 直定

關根 吉郎

B 隊 尾關 正二

C 隊 太田 裕吉

廣瀬 麟一

山田 兵輔

大井 忠一

二宮 忠

三、小長白山脈

三十日 目覺めて見るともう寢袋の口は眞白に凍つてゐる。首を出すと寒さが急に顔に感じられる。外に出て見ると實に良い天氣。今日は大體休養に豫定してゐたが、此の好晴に恵まれては、とてもちつとしてゐられない。A 隊は偵察に、B 隊は荷物の整理に、C、D 隊は生龍洞に残した荷を取りに行動をすることになった。彼等は十三時三十分夫々の目的に向つて出發。後に残つた隊員は昨日雜然と一かためにしておいた荷物を各キャンブ毎に區分したり、上に持つて行くべき必要品を揃へたり、仕事は中々忙しい。その傍ら溫度を測定し、薪木も作らねばならなかつた。漸く仕事が一段落し食事の用意をする頃、下から C、D 隊の者が歸つて來、しばらくして上からは A 隊が元氣な姿で滑つて來た。

偵察の報告に依ると夏季豫定してゐた源水嶺を経て行くのは、未だ凍り切らない澤の状態やベースキャンブの位置より損な行き方であることと考へ、夏に酷いブツシュが出てゐた机山峰西寄の隆起點から出てゐる

長大な尾根に取付いて、ルートの見定めをつけて歸つて來た。

全員揃つた楽しい夕食の後、明るいランブの下に顔を希望に輝かせながら、隊長からの説明を聞き、行動前の身體を自重しながら寢袋にもぐり込む。

卅一日 晴。早朝の寒氣と快よい緊張を覺えた。適當に按配された荷物を背負つて出發する。昨日のシュブルを辿りながら狭い谷を登つて行つて約一時間後、尾根の末端に到着した。ずつと視界が擴げられて左手に兜峰の雪煙を上げてゐるのが見える。尾根に取付いて約二時間苦しいキックターンを繰返へす内に段々ブッシュになつて來る。輪カンデキに換へる。肩にこたへる荷物にあへぎながらラッセルを續ける。兜峰から吹き下す風は我々を横なぐりにして行く。

やがて瘤を二つ越すと昨日豫定したキャンプサイトに到着した。高度一七〇〇米。風下の細い白樺の間に六人用のウィンバーテントを二張はる。十六時C、D隊は明日出来るだけ多くの荷物をCIIに上げることにしてCIIに下つて行つた。

一月一日 吹雪後晴。五時、未だ眞闇な中に眼を覺ましたが、猛烈な風で天幕に雪の當る音が物凄しい。此のCIIは尾根の風蔭にあるのだが強風が吹くと相當にあたる。此の天候では出られるかどうか判らなかつたが、七時に炊事を始める、乾燥して居る雪から水にするのは随分時間がかかる。十時頃食事を済まして外へ出て見ると、次第に晴れて來る様子だったので出發の用意にかゝる。雪は止んだが風は依然強い。

十二時半出發して上に向ふ。尾根の雪は部分的にはクラストして居るが、今正に暮れ行かんとして名残の夕陽に照らされた白頭山から北胞胎に連る山が紫色に輝いてゐる。CIIへの尾根の分岐點に來たころには、既にとつぷりと暮れ、たゞ暗い大空の闇の中から銀砂を撒いた様な星がキラキラ光つて居た。我々は淡いかげのうちに登りの歩跡を辿りながらCIIに着いたのは二十時に近かつた。天幕にはC隊のものが我々の歸りを待つて居て呉れて、直ちに疲勞と空腹をいやすことが出來た。

一月二日 晴。昨日の机山峰迄の状態と其の先の見通し及び天候の様子等も考へて、一應計畫を立て直す必要があつたし、それに皆疲れて居るので風の無い比較的良好な天氣ではあつたが、今日は休養をとることになつた。

炊事や呼吸の水蒸氣が眞白に天幕の内側に凍りついて居る。此處はCIIとは違つて尾根の上なので、陽も早いが、それでも九時を過ぎないと陽が差して來ない。陽が當ると此の水は何時の間にか消えて行つてしまふ。空氣が非常に乾燥してゐる爲だらう。午後隣り合つた天幕で無電のテストをしたり、電池の保温箱の効果を調べたりする。何れも好成績でアンテナを建て、明日からの交信の準備をする。十六時無電の準備も一段落付いた時D隊が登つて來た。彼等の獻身的努力によつて此處に總ての荷物(上のキャンプ用)を集結することが出來た。夕食の時味噌汁がひつくりかえつて山田は兩足に火傷してしまつた。

一月三日 曇。愈々今日から第二段の行動に移る。五時三十分起床、床種々の用意を整えて十一時三十分CII建

設に出發する。風が相當強く嵩の大きな荷物を持つた者は大分苦しんだ。然し一昨日のラッセルで道も固つて居るので時間は捗つた。高度を増すにつれて、吹いて居た風も靜まつて來、肌に分分の汗をかく程であつた。机山峰の平地と、冠帽峰、西冠帽峰、虹台峰、一帯がバノラマの如く見えて來た。常念岳を想はせる様な山容は何となく懐しい感じがした。一昨日荷を置いた所に十五時二十五分到着する。C・D隊は少憩の後CIIへと下つて行つた。

此處は雪が可成り積つて居てベツグが用ひられないので、附近の白樺の枝を切つてベツグにする。張り上つてから細部の點檢を濟しアンテナを張つた。改良されたアークティックテントががちり張られて居るのを見ると、如何なる風が來ても大丈夫と云つた様な強い感じが湧いて來て、器具係の努力が決して無意味でなかつた事を喜び合つた。

一月四日 曇。天幕に當る雪の音に吹雪かと思つたら然うでなく、積上げたブロックの雪が吹きつけられてゐるのであつた。食事を濟してCIVの建設に向ふ。

氣溫はとても上つてウィンドヤッケもいらぬくらいであつた。天幕の前の大きなピークを登り切ると急に雪嶺から冠帽峰全體、それに續く峰々が緩やかな山稜をもつて我々の前に現はれて來る。足下には民幕谷が密生した森林に覆はれてうねつてゐる。

雪嶺の登りにかゝる頃ヤツホーの聲とともに頂上附近に二つの黒點の動くのが見えた。城大パーティーの

伊藤氏と飯山氏、固い握手を交はして左右に別れた。

雪嶺から先は所々城大のセツセルの跡が残つて居た。石の重り合つた急坂を暫時下ると丈の低い朝鮮白樺の生えた中に入る。丁度これを降りきつた標高二一〇〇米のCOLのキャンブサイトとし直ちに建設に取掛る。何時何所で張つても一番張り良いのは此三人用のウインパーテントだ。張り了つて我々はA隊の成功を祈つて歸途に着く。此の頃から天候は次第に悪化の兆を現はして來て、空は一面に乳白色の雲に蔽はれ段々厚くなつて來る。日本海の方には既に雲海が立ち込めて來た。今日迄續いた暖かさもう寒くなつて良い時だつた。愈々四溫も了るのであらう。

歸りは空身の爲に早く十七時にはC隊が夕食を作つて待つて居てくれたCOLへ歸り着いた。次第に風は吹きつゝて來て天幕をはたく。氣壓計は五八〇耗にも下つて居る。外へ出て見ると猛烈な風にあほられた雪は、暗黒のとばりの中に灰色の波を畫いた様に無氣味な影を引いて飛んで居る。

一月五日 吹雪。遂に本格的な吹雪と化した。猛烈な風は寸時の止み間もなく天幕を叩き続け、谷から吹き上げる風は木に當つてゴーゴー唸つてゐる。終日此の音を聞きながら色々の話をして過した。夕方から氣溫が下つて來て明日の天氣を期待した。

一月六日 晴。起き出て見ると昨日の吹雪は何處へやら、風はあるが好い天氣だ。樹氷に覆はれた樹は其の枝を白銀色に輝やかしてゐる。氣溫は八時に零下二十五度で寒さはつきりと身に感ぜられた。今日はC

隊がCIVに連絡に行くことになり、B隊はCIIIで休養をすることになった。A隊は勇躍頂上に向つたことであらう。以下この日のA隊の日記を抄出しやう。

〔A隊日記〕

愈々今日は頂上へ行く日となつた。昨日は一日中吹雪かれたが、夕方少し雲の切れ目を見る事が出来た。六時五十分起床。風は大分和いだ様だ。天氣は馬鹿に好く雲一つない。簡単に食事を済し十時四十五分CIV出發、氣溫は相當に低く零下二十度を示してゐる。

平地を少し行つてブッシュの多い登りにかかる。此の附近の樹木の枝は強烈な北西風のために何れも皆風下側に撓まされてゐる。雪は締つて歩き良い。白馬峰から望む冠帽峰は仲々好い。前冠帽は右手を巻く。西を見ると虹臺峰から北雪嶺にかけて美しいカール地形が望まれる。十二時五十分頂上着、氣溫は零下二十一度、氣壓五六三耗、頂上は可成り廣く遠方遙に滿洲の地を望むことが出来た。

少憩の後下りにかゝる。溫度は次第に降下して来る。朱乙側は次第にガスが立籠めて來た。どんどん飛ばして十六時〇五分CIV着。連絡に來たC隊と交替してCIIIに向け出發。雲嶺の登りには大いにへばり、十七時四十五分CIII着、B隊の用意して居てくれた夕食を攝る。

一月七日 晴。風の天幕を叩く音に目覺めて見れば樹の枝の影が入口にさして居る。

好い天氣だ。A隊が食事の用意をして呉れて、用意を整へ頂上に向け十一時出發する。雲嶺を過ればCIVが



机山峰の第二キャンプ（背景は兜峰）

早大山岳部



朱乙の町端れ

早大山岳部

樹木の間に小さく隠見する。CIIを出て一時間半ばかりでCIVに着いた。C隊はすでに出發してゐて天幕の中は寒々として居た。少憩の後十三時出發する。朝から強かつた風は次第に勢力を増して來た。

立ちこめた林間を抜け一つ又一つとピークを越して白馬峰の登りにかゝる頃には猛烈を極め寸秒のやみ間もなくたゞきつける風はともすれば身體さへ飛ばしさうだ。前冠帽峰の中程迄來た時に西冠帽峰に登つて來たC隊の歸りと出會ふ。

風と寒氣の苦しい登りの後十六時頂上に着いた。氣溫は零下三十二度を示してゐて、テルモスからこぼれた溫いミルクは蠟の様に直ぐ凍り着いてしまふ。十分程休んで歸路につく。白馬峰にかゝる頃、日はとつぷり暮れ、たゞ星あかりの中に雲嶺から續く尾根が眞黒く其の輪廓を現して居る。十九時我々も亦無事登頂を終つてCIVに歸り着いた。早速お茶を沸し夕食にする。靜かな天幕の中には吹き荒ぶ風の音と、氣持良いラヂオウスの音の他には何も聞えない。恐らく今日の登攀を各人一人一人が考へてゐるのであらう。

山其のものには何等の困難もなく登攀と云ふ字を以つてしては不適當であると思はれる登りであつた。然し東京を出て今日までの間それは總て此の山頂に立んがための努力であつたのだ。我々の努力は今完全に報いられた。

然し氷と岩との間に過す幾日かのことを思へば何んとなく物足りない呆氣なさが胸の中に込み上げて來るのを禁ずることは出来なかつた。

我々は斯くして登頂を了つたのであつたが、この日西冠帽峰へ行つたC隊はどうであつたらう。其日記をも書いて見やう。

〔C隊日記〕

晴。十時四十五分CIV出發。冠帽峰はよく晴れ上り前の尾根からは雪煙が盛んに上つてゐる。林に入り其處を出ると右に折れて又林に入る。幾らかの登りでそれを登り切ると今度は真直ぐに前冠帽峰に尾根は續いてゐる。二つ三つピークを越すと前冠帽の斜面に出る。之を左に捲いて直接西冠帽峰とのコルである赤旗乗越へ出る。岩がごつごつ出てゐてひどく歩き難い。十二時四十分出發して約二時間の後此の乗越についた。風はとても強くここまで來るのにも相當の苦勞をした。西冠帽峰は此の附近でも一番積雪量が多く、眞白である。此の乗越からは約三百米の登りだ。少憩の後最後の登りにかかる。西へ向つてゐるので成るべく北側を登る。雪は思つたより締つてゐて、アイゼンの齒がサクサクと雪に突きさゝる。十三時十八分遂に頂上に立つた。頂上は大きな平原で西には白頭山そして其の連山又北の平野はもう滿洲國であらう。

北雪嶺に續く尾根は眞白だ。皮の手袋を取ると指の感覚が直ぐに無くなつてしまふ。快晴でありながら、眼にはつらゝが下り、吐く息の爲めに口の周りは眞白に凍りついてゐる。十分位頂上に居て直ぐ下る。何となく物足りなさを感じたけれども、それでも大いにうれしかつた。赤旗乗越でゆつくりテルモスを出して小型乾パンの晝食を攝る。此所は風が殆んど當らず快適な場所であつた。二十分の後出發、歸りも亦前冠帽峰

を捲く。風は益々強く身體は一米位づつ風に飛ばされて歩き難い。

CIVには十六時に着いた。天幕の中に入つて御茶を沸して休憩し一時間程居てCIIに向け出發。CIVからは雪嶺が高くそびえ、此の登りは今日一日寒さと風に悩まされて全く苦しかった。

CIIに着いた時には既に暗くなつてゐた。

八日 晴。何となく重荷を下した様な氣持になりぐつすり眠り目が覺めたのは九時であつた。我々の天幕には氣持の良い朝日がさし込んで来る。入口の外には眞白な雪の斜面、落葉松に蔽はれた尾根筋、遙か遠くには朱乙の平野が日本海に連なつてゐる。

今日から愈々引上げが始まるのだ。天幕中の整理が一段落ついた十四時二十分C隊のものがやつて來た。風も無いので寒さを感じず割合に引拂ふのも樂であつた。六人で荷をまとめ、十五時三十分天幕の跡に何となく別れを惜んでCIIに引き上げる。

天幕にはD隊の太田、二宮の二人が温い御茶を作つて我々の歸りを待つてゐて呉れた。六人で少し窮屈であつた天幕に八人入るのであるから、とても狭くなつて二重三重にならなければ寢られない。それでも何の不平もなく何時しか寢てしまつた。

九日 ぎつしりつまつた天幕の中では上になつた者から起き出さないと身を起す事すら出来ない。皆首筋

や腕をさすつたりしてゐる。十三時頃になるとここは陽がかげるのでそれ迄に引き拂つてしまはねばならない。すつかり用意を済まして外に出る。気温は意外に低く零下三十五度を示して居り、中に敷いてゐたマツトや毛布等の濕氣を含んだものは總て鐵板の様に凍つてしまつて一人や二人では折り曲げることすら出来ない。ポリ／＼にかさ張つた天幕はとても疊み難かつた。登つて來るべきA隊の荷物を少し残してリツクサツクに詰め終つたものより順次出發して行く。机山峰の上でA隊に出合つた。振り返つて見れば冠帽峰は今、來る時と同じ姿で見送つてゐる様だ。毎日眺めてゐた之等の山々と一日々々遠く離れて行くのは幾分の寂しさを感じずには居られない。其の夜我々は一週間振りで一つの天幕に集る事が出來、和氣霽々の中に更けて行つた。

十日 晴。二張の天幕中一張と小林、關根を無電のテストの爲めに残し、十一名は大部分の荷を持つて下る。

スキーデボよりスキーをつけて下る。良い雪で良く滑る。十七時此所を出て十一日目にベースキャンプに歸り着いた。此の夜寒い天幕の中にキーを叩いたが豫期の結果は得られなかつた。

十一日 瀧波、鍋島は金々詰を連れて人夫及び馬の準備の爲生龍洞に下り、残りのものはCIIに残した荷をとりに行く。CIIには昨日の二人が御茶を沸して待つてゐた。

早速天幕の撤收にかゝつたが、支柱が凍り附いて拔けなかつたり、マツトが凍り附いたりして時間がかか

つた。十七時我々の根據地に歸つて來た。天幕に泊るのも今日一日、明るいランプの許に楽しい一時を過ぎた。

四、歸路

十二日 愈々今日はCIを引拂ふ日だ。昨日下つたものの交渉の事など考へ乍ら七時三十分起床。朝食は生龍洞に下つてからにしてあるので、直ちにルックサックの整理、器材の荷造りなどに取りかかる。此の朝はとても寒く忙しい中をあちこち走り廻つてゐるのに、ともすれば足先がしびれて來る。十時頃から灘波達が人夫と馬とを連れて來る。まだ傷の癒へない山田を馬に乘せることにし、人夫の荷物など分配し終へたのは十一時頃であつた。躊躇する人夫をまとめ直ちに先發さす。

CIに入つてより旬日の我々の生活は隊員の犠牲的精神と絶えざる努力とに依つて無事終了し得たのだ。スキーを生龍洞に向ける。約卅分の後着く。其處には溫い溫突、溫い食事が用意してあつた。全員揃つてゆつくりくつろいで朝食を攝り、少憩の後此處を立つて金谷洞へ向ふ。峠の登りに一汗かけば、後はゆるい臺地を兜峰、机山峰を後に見ながら滑つて行く。最後の下りを一氣に下り切つて十五時過早くも金谷洞に到着した。

約一時間の後人夫達も皆揃つた。食料係の提案で此處の馬鈴薯と燕麥とを蒸して交ぜたものを食事とす

る。それは此の邊では常食となつてゐるものらしい。木彫りの器に山と盛られて出されたのを見ると如何にも美味さうだ。之にけしの實をすつた粉をふりかけて食べる。

金々詰は民家に來ると急に元氣づいてくる。溫突へ歸つて來たので安心したのだらう。暗いランプの下に集つて取とめも無い話に打興じ、今迄山で過して來た我々には暖過ぎる寢袋の中に寢た。

十三日 快晴。外に出て見ると雲一つ無く溫突から立上る淡い煙は眞直に碧い空に溶け込んで行く。北黄細嶺からの下りはかなり長く感じた。痛快に飛して上直頭に來る。パンとコンビーフに軽く食事を濟し、一路甫上洞へ。

此處からは道が悪くなつて石や土が處々露出して滑り難い。十七時迄には全員甫上洞に揃ふ事が出來た。此處には露天風呂があるので疲れた體を洗ひに行く者もある。

此處からは眞北に冠帽峰が見える。傍には三四人の婦人が洗濯をしてゐてしきりにトントンと砵を摘いてゐる。今日で世話になつた人夫とも別れることになるのだ。往復の日數を合して五日にも満たない僅かの日數ではあつたが、我々に最も關係の深いものを持つてくれた彼等には又云はれぬ懷しさが残るものだ。

夕食の後我々と一所に別れる杯を掬み交し最後の溫突の上に楽しい夢を結ぶ。他の部屋では尙人夫達の乾杯の聲がしてゐたが、やがて一人減り二人減り我々隊員の靜かな寢息に代つて行つた。

十四日 早朝の外氣は身を切る様に冷たい。二臺の牛橐に荷物を積み込み十一時出發する。城町では警察

に御禮に行く。疲れた足を曳いて朱乙に到着したのは十七時を過ぎてゐた。既に夕闇に包まれた街は唯凍りついた道が鈍く街燈の灯を道に映してゐる。おぼろに霞む低い尾根、地から生えた様な煙突の形、それらが黒一色に塗りつぶされる頃我々は朱乙温堡で綺麗な湯につかりながら龍山以來の垢を落した。

十五日 十四時温堡を出て朱乙驛に向ふ。去る十二月二十七日此所に希望に満ちて下りた我々は今其の満足に満たされて去らうとしてゐる。遙か西北に當つて其處には今し方まで我々が寒氣と烈風に戦いながら生括して來た冠帽峰の峰々が紺青の空にくつきりと浮び上つてゐる。あたかも我々の健康を祝福して未來への大きな躍進を約する様に。

五、遠征隊日程

昭和十一年十二月二十日鍋島、太田の兩名は先發隊として出發

二十四日 灘波隊長以下十名東京驛出發、二十五日 下關着、連絡船にて釜山着、二十六日 八時半龍山着
十六時朱乙へ向け龍山を出發。

二十七日 八時朱乙驛着、先發隊に合し荷物の整理をなし十一時朱乙出發―城町―甫上洞。

二十八日 九時半甫上洞出發―上直頭―金谷洞。

二十九日 十時半金谷洞出發―生龍洞―源水谷のCI

三十日 晴後曇

A 隊偵察、B 隊は荷物の整理、C 隊 D 隊は生龍洞往復。

三十一日 晴雲あり、氣溫 -18° 。

全員 C_I 出發、C_{II} 着。C・D 隊は C_I へかへる。

一月一日 吹雪後晴 強風

A B 兩隊は机山峯のコルへ C_{II} 建設のため出發、C D 兩隊は C_{II} より C_{II} へ、D 隊は C_{II} へ歸る。

一月二日 薄曇り 最高 -15° 最低 -15° 氣壓 638mm (正午)

A B C 隊は休養、D 隊は C_{II} より C_{II} へ。

一月三日 曇夕方より雪 強風 C_{II} にて -6° (正午) 氣壓 598mm。

山田を除く全員 C_{II} へ、C D 隊は C_{II} へ歸る。

一月四日 薄日疾風 最高 -5° 最低 -11° 。

A B 兩隊は C_{II} より C_{IV} へ、B 隊は C_{II} にかへる。C 隊は C_{II} より C_{II} へ、D 隊は休養

一月五日 烈風 雪 C_{II} にて -11° 。

休養

一月六日 晴疾風 氣壓 -563 mm

A 隊は八時四十五分 CⅣ を出發—十時五十分冠帽峰へ登頂し十四時 CⅣ 着、直ちに CⅢ へ。B 隊は休養、C 隊は CⅢ より CⅣ へ。

一月七日 快晴強風

A 隊は CⅢ より CⅡ へ。B 隊は CⅢ より冠帽峰へ登頂し十九時十五分 CⅣ 着。C 隊は八時四十五分 CⅣ を出發十一時十八分西冠帽峰へ登頂し十六時十分 CⅢ へ歸る。D 隊は休養。

一月八日 晴疾風

A 隊は休養、C 隊は CⅢ より CⅣ に行き B 隊と共に CⅣ を徹收し CⅢ 着、D 隊は CⅢ より CⅢ へ。

一月九日 晴疾風

A 隊は CⅢ より CⅢ へ、B C D 隊と共に CⅢ を徹收して CⅢ へ。

一月十日 晴疾風

小林、關根を無電再試験のため残し他のものは CⅠ へ

一月十一日 晴疾風 最低—37。

瀧波、鍋島は人夫の交渉のため生龍洞へ。他の者は CⅠ より CⅡ へ行き CⅡ を徹收して CⅠ へかへる。

一月十二日 晴

全員 CⅠ を出發し生龍洞を経て金谷洞へ。

冬の小長白山脈

一月十三日 晴 十時三十分金谷洞出發―甫上洞。

一月十四日 晴 甫上洞―朱乙

一月十五日 晴 朱乙―清津

一月十六日 乗船。一月十八日 敦賀上陸、米原を経て東京驛着、解散。

六、装 備 品

一、天 幕

○ウィンバーテント 四張

何れも今迄の山行に使用してゐたもので六人用三張、内一張はベースキャンブに使用、三人用一張。

○屋根形テント 一張

八人緩つくりと寝られる程の廣さで、相當使ひ古された物であつたが集會には十分の廣さがあり、降雪の少い北朝鮮には適當であつた。

○アーキティックテント 一張

直徑十尺、高さ五尺、新調したもので従来より丈が低くなつて居り、半球に近い形を保つことが出来た。フレイムは竹の張合せたものを用ひ、テントの頭部にアルミニウム合金の軸を附し、竹を填込んで

撓ませる。そして八角形であつて稜に沿つて張網を附し、雪面に垂直に雪の中に埋めた。此の張網は横の張網を助けて、テントの動搖及び變形に、効果があつたと思はれる。内側の布は無防水のでグランドシートを附し、外側はグレンフェル地であつて底は無い。

二、敷物

コルクマツト

フェルトマツト

ヘヤーロツクマツト

此のヘヤーロツクマツトは今回始めて使用したのであるが厚さ三種、馬の毛をゴムでスポンジ狀に固めた物で彈力に富み防寒防濕共に完全であつて、マツトの内では最も理想に近いものと思はれた。

三、寢具

羽毛四百五十匁入寢袋及び眞綿三百匁入寢袋を一人二個づつ眞綿を内側にして使用した。少しも寒さを感じることなく、終始快適に眠ることが出来た。

四、料理用具

ペースキヤンプを除外して全部ガソリン厨爐を使用した。スウェーデン製のラディウスに交へて國産のスネイルと云ふ外見の全く同様のものを試みたが能率も同様であつて好結果を得た。

五、通信用具

短波長無線電信を使用した。全部部員の製作によるものである。結果に於いては失敗であつたが、参考に略記する。

(1) 送受信装置、送信機はアンテナ出力約一ワット、波長四五米—七五米水晶片を使用せず、此れが失敗の一原因ではないかと考へられる。受信機は再生檢波低周波二段増幅、送受を一個の箱に組込み、スキツチを以て切りかへる。使用眞空管UZ-30NC1一個、重量、八二〇匁。

(2) 電源、すべて乾電池（陽極電壓一八〇ボルト心織電壓三ボルト）を使用し、容器として内側に半吋のフェルトを張り、白金カイロ一個を以て保温とした。テント内^{テント}に示した時にも箱内は^{フィラメント}「^{フィラメント}」で低溫の爲の電壓降下は見られなかつた。重量、二貫二一〇匁。

(3) 豫備箱、アンテナ材料、豫備眞空管、工具類、メーター、受話器等を入れる箱を携行した。重量、三二〇匁、

(4) 成績、失敗であつた。原因としては種々考へられるが使用した位置が机山峰眞下であるために電波の吸收されたのと強風によるアンテナの動搖のために波長が不安定となつた爲ではないかと思はれる。

CI間^{CI間}にテストを行つた時には實用にはならなかつたがコールサインを取ることは出來た。

以上

登山に於ける山と人間

——あそびを通じての登山の解釋——

井 上 幸 治

われわれは登山といふものを反省するときに必ず

何故にこのやうに山を愛するか、何故に死をも恐れず山に登るのであらうかといふ根強い疑問に行きあたるのである。誰れも眠らうとして眠られぬ夜、山へ登るのは山が好きだからである、登らないではゐられないから登るのであるといふ答へを繰り返した経験をもつことであらう。われわれにあつてこの問ひと答へは循環し、この環を破つて一步前進しようと思ひ悩んでも、いつも同じ途を行つたり來たりしてゐるにすぎない。私はこゝに考へる葦としての人

間の弱み、強みを見るのである。

大島氏は「登山の無形的な精神的な形而上的な方面、言ひ換へれば *mental side*」と登山技術論を區別して、前者の問題として登山の態度を考へてゐる。

マンメリーやウィンバーなどの山に鬭争を挑むピークハンティングの態度からジャヴェル、モルゲンタール、ノーマン・コリー等に至る靜觀的態度へ推移して行つた事情を登山史のうちに見分けられた大島氏の功績を没し去ることはできない。わが國に山岳文學が開拓されて約五十年の歳月を経た。外國の

勝れた登山家の記録を移しつゝわが登山家も文學的香氣の高い文章のうちに深い體驗を語つて來た。さうしてその態度は大島氏の靜觀的といはれる態度で山を通じて生の體驗を深く見究はめやうとする内省的態度であつたのである。このやうな態度を當初から採り、豐穰な地盤を用意してゐたわが國の山岳文學には、何故にひとは山に登るのであらうといふ問ひの潜在するのは當然のことであつて、大島氏の高原・峠の放浪を反省して居られるのはこの問題に就いての解答を引き出すためであつたと聞いてゐる。

『日本風景論』の筆者が山、山その平面世界より超絶するところ多々とし、登山の氣風を作興すべしと論じてから問もなく、小島鳥水氏は『日本アルプス』において「何故山に登るか」といふ問題を、如何にして山に登るかといふ技術論に先立たせて居り、以後この登山の宿命的問題は登山の態度とか登山の動

機とかいふ名目のもとに意識的に主題化されてゐるのである。もとより山岳文學はこのやうな問題を主體的に扱ふことを約束されて居るものではない。然しながら、纏つて思ふに、あらゆる登山の記録は斷片的ながらもこの問題がある程度まで、克服して居るもので、殊に内省的な立場を主脈とするわが國の山岳文學において、われわれはこのやうな問題を解く鍵を隨所に見ることができるのである。わが國の山岳文學と言ふべきものは、田部氏等によつて形を整へたと見ることができが、一體に西歐の山岳文學に比して貴い内省的な文學的香氣が高いのである。それは色々の理由によると思はれる。外國においてピークハンティングより靜觀へ移る契機が初登攀の失はれたことにあつたやうに、わが國においては處女峰が淋しいためであつたかも知れない。それからヨーロッパの登山家は過去二世紀に亘る歴史をも

つてゐることも考へなければならぬ。山岳流水の美を發見し、風景をありのまゝの自然として發見したペートルカより見れば幾世紀を経たことであらう。ペートルカはアイヴニョンから程遠からぬモン・ヴァントゥーに登つた。當時何らの計畫をもたない登山は行はれることがなかつたゝめ二名の案内者と弟を伴つたのみである。やがて頂上に達して雲を脚下に見、故郷ボローニヤの空を仰ぎ、感きはまつてアウグスティヌス懺悔錄を開いたといふ。山岳はこの時はじめて捉はれざる眼の近代人に自然の美としてあらはになつた。こゝにおいて登山は近代的人間の誕生以來のことゝいふことができるのである。こゝに宗教的色彩も營利の野心もないあそびとしての登山が始められた。以來一つの山嶺も痛ましい挿話に彩られ、高らかな凱歌を聞かぬものはないまでに至つた。このやうな國において登山することは先

人の跡を追ふことである。それが初歩においてもヴァリエーション・ルートの開拓で、いはゞ先人の歴史に支へられた行ひである。従つて何故に山に登るかといふ問ひは歴史のなかに埋れて居り、直接に問ふ必要のないほど生活と登山は同質的なものとなつてゐる。このためであらうか、西歐の登山家には逞ましい現實的な生活感情がわかれにとつては受けきれぬほどである。例へばコハトはPontrouinと問ふのは私の生活信條であると記してゐるにも拘らず、このわれわれの問題に就いてPontrouinと問ふことを忘れてゐるのである。これに反してわが國の登山は發達のために必要な社會的・精神的地盤を得たのが近世のことである。『日本風景論』が明治廿七年に極はめて啓蒙的な筆致を以つて登山を説いてゐるのもこの事情は察せられる。われわれの先輩は日本の社會環境のなかで西洋的香氣の高い登山を

はじめに當つて、内省的な立場から様々な問題を反省する機縁が多かつた。それにわれわれは日本の風土のなかに育ち、山に對して外人のやうに戰を挑むといふ氣持ちにはなれない。これは和辻博士によ

つて明かにされたやうに、西歐の風土は人間に對して從順で易々として征服されるに反し、われわれはモンスーン地帯にあり風土に對し征服とか鬭争とかいふ契機を全く生活に缺いてゐるためである。從つて自然は征服され得るものとする外人に伍してヒマラヤに挑戰するといふ態度よりも自然なる山岳のなかにしめやかな激情を抱いて靜觀する態度の方がわが國の登山道にとつては本來のものである——何故に山に登るかといふ問ひはこのやうな背景をもつものであつて、われわれの先輩の作つた登山の歴史はこの問ひを扱ふことを許すのである。私のこれから申し述べることは拙いものであつても、私はこのや

うな問題を蘊釀して來たわが國の登山を誇りたく思ひ、また幾夜もこの問題を語り合つた友人に一應の報告ができるといふ喜びに溢れてゐるのである。

一

内省的・靜觀的とはおのれを省み、内面的體驗のうちに山を見ることである。從つてこゝにおいてはあらゆるものが體驗を通じて觀察され、自己さへ體驗の色づけを介して把握される。これはいはゆるヒューマニズムの根本精神をなすものであつて、山岳文學においては極はめて豊かな收穫をあげてゐるがこゝに二三承服し難い難點を見出さざるを得ないと思ふ。この點に就いて詳しく説明する必要はないが、ともかくもこのやうな豊富な體驗が一方にあるに拘はらず、登山の目的とか動機、登山の意義などを主題的に取扱ふ場合に常識的分析精神を以つ

て豊かなるものを理論的には却つて貧しき淺薄なものとしてしまふことは大いに戒心しなければならぬ。

私は多くの論を讀んで行くうちに、登山が單に人と人間の心理的な交渉によつて解釋されてゐるといふ事實を發見した。基礎體驗の事實が専ら心理學的に分析されてゐるのである。あるひとによれば登山は純然たる生理的な動機、宗教的・美的感情を以つて自然を憧憬する心、逃避的な感情、好奇心・冒險心・征服慾・登高慾を以つて動機とするものである。このやうに考へれば何故に山に登るかといふ問ひは何故にそのとき山に登りたくなつたかといふ形に變へられ、日常生活のはかない心理的場面を以つて登山を説明しなければならない。この立場からしては山における體驗や山岳文章の最も深奥なるものを解くことはできない。そこで論者はこのやうな様

様な動機は人により、更らに精密には各々の登山によつて異ると附け加へてゐる。事實われわれの登山する心がそのやうなものであるとしても、何故に山に登るかといふ問ひにはもつと根源的な問ひ方があるのである。われわれは先入主に捉はれざる地盤に立つて、登山する心を根源的に説明し得るやうに生のまゝの事實、最も具體的な場面を直視したいと思ふ。われわれは日常生活の體驗を心理學的に説明する習慣をもつて居り、われわれの受けた教育はこのやうにものを判斷することを教へて來た。しかしながら、心理學的分析はわれわれの基礎體驗の全體性を奪つたところに可能となり、心理的眞理は人間の存在の一面を語るにすぎない。靜觀的といはれる態度には心理學的事實より力強い流れがある。それは生であり、人間の全體的存在である。

私は登山の問題は人間の存在と山との全體的交渉

を以つて主題とすべきであると考へる。この全體的

交渉は如何なるものであるかを尋ねべきであらうと

思ふ。靜觀のうちにはこの交渉が全體的に捉へられ

てゐるはずである。私はこのことに關聯して田部氏

が登山の態度を論ぜられた場合、全人的に、山に登る態

度といはれたのを想ひ起す。全人間 (ganze Mensch)

とは人間の本質であり、感情も意志もあり、表象も

し實踐もする存在としての人間である。従つて全人

的といはれる立場は美を欲する心、宗教的神祕を欲

する態度と並列されるものとは考へない。全人的と

はこのやうなものをうちに擁するものでわれわれは

このやうな立場で山に接してゐるのである。そこで

私はこの立場を手がかりとして登山の問題に分け入

りたいと思ふ——所詮この問題にしても多くの人間

の問題のやうに一定の人間觀を基礎とすべきもので

その點經驗の少い若輩の筆をとつたことはうしろめ

たい所業といはなければならない。

二

私は暫く日常生活におけるわれわれの姿を眺め

て、こゝに山と人間の交渉の機縁を見出したいと思

ふ。われわれは職場においてはたらく、友人と雑談

をとり交す、自分の思ふまゝに物事が進んだといつ

ては喜び、思ふまゝにならぬといつては怒る。また

愛し憎み、考へる。かうしてその日その日を送る。

つまり交渉的配慮をなしつゝ實踐し、打ち動かされ

語るのが人間のあり方である。しかしながら、日常

性における人間のあり方は自己を事物や他人に奪は

れてしまつてゐる。例へば他人との差異に關心し、

他人と同じ服裝をしたい、他人より立派な服裝をし

たいと思ふ。それから流行といふ現象を見れば、は

じめの間は流行の服裝を奇異なものとしてゐるが、

そのうち見られるに従つて前からあるものとして奇異な感じを受けなくなる。これは平坦化と呼ぶものである。それからこの奇異な流行の服裝を身につけるときはどうか。人が着てゐるから着る、若しくは自分で着れば人も着るであらうといふ豫測のもとに自分も着るのである——このやうに日常の生においてわれわれは他人に心を奪はれ、他人の支配下にある。しかし他人といつても誰れと名指すことはできない。誰れでも他人であり、われわれ自身もまたこのやうな意味で他人に屬するとすれば、それは一般にいられるひととか世人とかいふものである。このひとといふ状態において人間は本來の姿ではない。文法にいふやうに非人稱的な集合的主體である。この状態においてわれわれは妥協的で噂話をしながら好奇心にとらはれ、すべてのものを曖昧さのなかに葬つてゐる。平均性・公共性のうちに没し去

つて、「湖上に漂ふ枯葉のやうに」日を送つてゐる。

このやうに生存は他人や環境に太陽を遮ぎられわれわれの本來のあり方には一致しない役割を演じてゐる。かく生存が自己のうちに憩はず、他のものに關心をもつといふことは、世界のうちに投げ出されて居り、さうして世界のうちにあるものとしてこの世界と諧調を保つてゐることなのである。ところでこの世界と諧調を保つ(stimmen)といふことはわれわれが日常において口にする氣分(Stimmung)といふ言葉の存在的な意味に外ならない。従つてこゝにいふ氣分とは心理學の定義するやうに明瞭な原因のないときわれわれにおこつて來る感情状態といふやうなものではない。環境世界と具體的に諧調するといふことである。明るい、暗い、灰色の氣分とはそれ／＼生存の日常性を開き示すものであつて、われわれのあり方をあらはにしてゐる。しかしながら氣

分とはこのやうに全體的のものであるためこれを對象的に認識することはできない。いはゞ認識前の基礎體驗において出會ふべきものであつて、心理學において扱ふべきものではない。われわれは日常の配慮が妨げられるときは不機嫌となり、手紙を書くときはそのひとの如何なるあり方をするかを問ふために御機嫌は如何ですかといふ。勉強したい氣分になるといへばラヂオの騒音も自動車の警笛も、また赤坊の泣き聲も聞こえず、環境が勉強といふ配慮のために順當なとき、この環境と諧調し、勉強といふ意志行為が可能となつたことである。こゝにおいて、

しからば山に登りたい氣分とは如何なる氣分であるかと問ふことができよう。しかしながらわれわれにとつて登山は勉強ほどその條件が明かとなつてゐない。勉強は學問を學ぶことであり、それを以つて世に立つのであり、われわれは小學生の時代から學問

の徳に就いて様々のことを教へられて來た。従つて何故に勉強するかを改めて問ふ必要もなくこれを了解してゐるのであるが、登山においては事情が異つてゐる。われわれは何故に山に登る氣分となるか、山に登つた氣分とは如何なるものであらうか、と最後まで問ひたいと思ふのである。

いま氣分に就いてハイデッガーの教へを乞ひたいと思ふ——われわれは日常氣分がよいのでもなく悪いのでもないやうな灰色の無氣分に陥ることを経験する。これはいふまでもなく生存が生存そのものに倦怠する場合である。生存が生存自身に重荷となるのである。生存して行くことが重荷となるのである。これに反して上氣分の場合はさやうな重荷を感じない。それは何故であるか分らない。認識の開示可能性は氣分の根本的開示に對して遙かに及ばないものであるからである。

さて私はいま無氣分と倦怠を語つた。このことに就いて私の座右に備へるパスカルは次のやうに言つてゐる。「人間にとつて完全な休息状態にあり、情熱もなく、仕事もあそびもせず、また勉めることのないほど堪え難いことはない。人間はこのやうなとき自己の無、放棄されてあること、不満、依存性、無力、はかなさを感じるのである。」われわれはこのやうな状態のへめぐつて來るといふ豫測にさへおそれおのゝくのである。この氣分の近よる足跡をおそれ避けたいと思ふのである。既にこゝに私は登山への第一歩を認めることができると思ふのである。

三

われわれの生存のあり方は倦怠(ennuie)や無氣分においては無である。しながら生存自身はこの無を否定することができる。即ちわれわれは事實的に

登山における山と人間

意志と審知を以つてこの氣分をある程度まで統御抑制することができ、またさうしなければならないといふことを自覺してゐるのである。意志と知はこのやうに優越した能力であるが、しかしそれはこの氣分を否定し去るといふ意味ではなく、氣分に對するに反對の氣分(Gegenstimmung)をもつてすることである。

漠たる不安、倦怠、懸念はパスカルの説く人間の存在状態であるが、このやうなものを身を感じるるとき生存の重荷は容赦なくわれわれの上にのしかゝるのである。しかし人間の意志と知は倦怠から不安からもまた死の恐怖からも脱して、この重荷を一切拂はうとする。そこで人間の發明したのは第一に宗教であつた。あらゆる宗教は人間の存在をわれわれ俗人の眼にあらはにする、人間は死への存在であり、その日常の生存は絶えず他者に煩はされて決し

て人間本来のあり方ではない、人間はその本来の姿を凝視し、これに還らなければならない、現世において救はれる路はこの方法であることを説く。これと共に考へるべきは、あそびである——あそびといふ語は、日常的に消極的な、反道徳的な、消費的な意味を以つて理解されてゐるが、私はこゝにあそびの根源的意味をば人間の存在から反省したいと思ふ。

あそびとは倦怠、無氣分、若しくはその豫測から逸れ、生存の重荷を避けることである。フランス語における *divertissement* が *diverter* (逸らす) から由來したことはこの事情を明かにするものである。

Sport (スポーツ) はわが國においては専ら運動・競技といふ意味に慣用されてゐるが、その本来の語意はやはり *divertissement* (あそぶ) である。即ち人間の無氣分のあり方を他に逸らすといふことである。わが國の表現で憂さはらす、氣を散じる、氣をまぎらす

などはこの意味の根源を突いてゐるものである。そこで登山も狩獵も、野球でも遊蕩でもあそびであることに變りはない。わが古典においてあそびといへば音楽を奏することであり、西洋にては狩獵であつたが、昨今わが國では酒色に耽ることが最も直接に理解される。いづれにしてもその範圍の極はめて廣いことが知られる。このやうにして人間は自分のみぢめさを被つて幸福にならうとする。そこでパスカルは倦怠とあそびは人間のみぢめさ、墮落の驚くべき證しであり、同時に偉大さの證しとするのであるが、ひたすら神のなかに逸れることを説いてゐる。あそびが一面人間の偉大さの證明であるといふことはあそびの人間の生存に對する意義を考へさせるわけである。われわれは酒色に耽るあそびを登山や野球などと同一のものとすることはできない。

次いであそびが逸れるといふ意味を第一の構造と

するならば、何から何へといふ方向が考へられる。

例へば宗教ならば日常的生存の頽落から本然の人間の姿へ、肉から靈へといふやうな方向である。このことに關聯してまづ頭に浮ぶことはたのしいといふ言葉である。たのしいとは手を伸す、手伸しから來た言葉であるといふ。あそびにおいて人間は生存の重荷的性格から去つてのび／＼と、のんびりとする。即ち人間の生存がひとまづこゝにおいては一切の日常的あり方から離れるのである。私は若い登山者の記録を引用させていたゞく。「十六夜の月の昇る頃シュラフザックにもぐり込んだ。梢にうなる風の音は聞くだに寒々しい思ひがある。山の彼方遠い都の街々では今頃師走の出入に賑つてゐることであらう。この同じ地球の上にもそんな世界もあるだらうかといふかしい心地になつて来る。」針葉樹 第九號 このやうな別世界とまでいへる世界に身をおくことゝなるが、

このことは様々の聯關によつて人間の良心的な姿に即ち本來的の存在に還ることを可能にする。こゝにおいて遊びとろける遊蕩は單なる逸脱であつてそこには何らの行的性格がない。アイザック・ウォルトンは釣りの徳をば神の安靜さのうちにひたることにありとしてゐる。多くの登山記録はまたこのやうな登山の徳を語る。篠つく雨に打たれながらも骨の髄から俗世間の塵想をあらはれ、身も心も清淨になつた氣がするといふ。絶巔の一夜あけて、モルゲンロートを雲海の彼方に拜したとき案内者と共に思はず手を合はせざるを得なかつたと記す。こゝにわれわれはあそびとは日常の生存に缺けた存在性格、人間本然の存在様相への復歸があり、憧れがあると思ふのである。従つてこれは單なる浪費的勞働ではない。何故にかほど山に憧れるか、何故にこれほど山を愛するか、私はこゝにはじめて登山を語り得ると

信ずるのである。エッケルマンを伴つたゲーテはエッテル山に登り遙か彼方に横たはるハルツ群山を眺めて語つた——狭い家庭にゐると人間は萎縮してしまふ。こゝにゐると眼前にある大自然のやうに偉大で自由な氣持ちになる。人間はいつもさうなくてはならないのだ、と。

四

われわれは登山における山と人間との交渉は上のやうにあそびを通じて理解することができると考へて來た。そこで次におこる問題はこの交渉は具體的に如何なるものであるか、如何やうに體驗されるかといふことである。

大島亮吉氏によれば、マンメリーの言葉とされるものに「山は時としてその傍觀者に自らのムードを壓しつける事があると同時に、また傍觀者は屢々山

が彼れ自身の氣分を調和してくれるのを經驗する」とある。常にわれわれにはこのやうに主客合一の體驗の深みをば考へるのであるが、これはとりもなほさず山のなかにわれわれの存在が出て山と調和してゐるといふことに外ならない。しかしながら山のもつ美しさもすがすがしさも單に主觀的な感じであるのではない。誰れもすがすがしい氣分になるからしてすがすがしさがあるといふのではなく、却つてすがすがしさは山のもつ一つの客觀的性格として主觀を超越して存在してゐる。すがすがしい、美しい、雄大であるといふ感じを受けるときわれわれ自身が既にこの山の性格のなかに出て、そのなかにひたつてゐるのである。このやうな性格のなかにわれわれは自分を見出してゐるのであつて、かやうな様々な契機を介して山との交渉を全體的に體驗することができる。田部氏の著に私は大正の頃から接し、その

麗はしい文章に心氣を洗つたが、そのなかに自然の偉大さは即ち自己の偉大でなくてはならないとあつたのをノートしてゐる。このことは山においてわれわれ自身が偉大といふあり方をしてゐるのを理解することが出来る。たゞこの言葉に就いて田部氏は偉大といふことを訂正されて居られる。同じく次の一齣もまた私の言はうとするあそびを通じての登山を別の言葉で表現するものとして翫味するのである、「山が自身であるといふことは、山が普遍的な人間性の理想の表現でなければならぬといふ結論に到着した。私達は依然として弱小な人間である。しかしこの弱小な人間を刻々高めてはこの理想的な人間性に高め、それに接觸せしむるところに私の生活の意義があると思ふ。」あそびの生存に對する積極的な意味は生存の日常的姿をそのあるところから逸脱させて本來的存在の姿に復歸させるところにあることをな

言つたが、山のあり方をわれわれは生存の日常性に缺けたところを補ふものとして見てゐるのである。普遍的な人間性の理想の姿においてあるものとして見てゐるのである。山のおほらかな性格はわれわれを溫く抱く。われわれは愛をもつてこれにすがりつきたのしむ。その息吹に接して日常的頽落の姿を洗ふのである。

こゝにおいてわれわれはもつと深く山岳の性格を盡す必要がおこつて來た。しかしながら淺學にして經驗の語るべきものゝない私はこの複雑な高潔な山のあらゆる性格を究はめ盡す力をもつてゐないし、また山岳の峻嚴さ、初夏と秋のさはやかさ、岩壁の兀立、さては溪谷の幽邃に至るまで眼もくらむばかりの山容を列舉しても當面の問題には緊急なことゝ思はれず、この點各人の行き方に従ひ、實際の體驗のうちに山の滋味を見出すべきであらう。たゞこゝ

に注意したいことは、われわれのこれまでに築いた地盤の上にはじめて様々の登山の動機を、山に登る態度を觀察することができるのであつて、人間と山との存在、交渉には全體的に登山においてしか求められないものゝあることを認めなければならない。山に美を求めるといふことは、あそびといふ構造を介して山の全體性に達しようとする通路を美に求めることである。私は登山の動機として無地盤にて様々の要素を擧げるならばむしろ木暮氏の言はれるやうに「私達が山へ登るのはつまり山が好きだから登るのである、登らないではゐられないから登るのである、」といふ方が卒直であらうと思ふのである。このやうにしてこそはじめてマイヤーの「Ich lebe so tief in den Bergen, und die Berge so tief in mir, daß ich sterben möchte in den Bergen.」を理解することができるのではあるまいか。

× ×
ともかく日常性より見てわれわれの山に入る喜びは山にはいつて塵勞と塵想の世界を離れ、積極的に人間の存在につながる淨化をめざす良心の喜びに外ならない。さうして汽車の時間表を調べ、地圖を揃へるとき既にわれわれはこの喜びを味つてゐる。高原の清涼、突兀たる岩壁、あれやこれや想ひ浮べてティンダルは『アルプス旅だより』の冒頭に「友よたうとう私はロンドンの煤煙と咆哮から遠く離れてこゝまでやつて來ました」と歡喜にふるふる手をもつて書き記したのであつた。われわれを迎へる山岳は原始の自然である。人間の手を超越し、その成つたまゝの姿をしてゐる。日常の世界にはこのやうなものはなく、われわれはたましひのハイマートとしてこの山に接する。従つてこのふところに抱かれた氣安さは家にゐる氣安さであり、このゆゑにこそわれ

われは様々の體驗をこゝに汲みとることができる。

曉紅殘照に映える山、悵愁深く霧にとざされた山肌、碧空のもとに亂舞する峯、志賀重昂の健筆を借りるならば、山は大地の彩色を絢煥し、雲の美、奇、大は山を得て映發、水の美、奇は山を得て大造、山中の花木は豪健磊落である。それから雄大といへばツルゲニエフの「會話」にあるやうに、地平線に浮き立つ巨人は世界を見おろし、永劫の眠りを貪つてゐる。靜寂な山々のなかには大地から盛り上つたといふ力を藏してゐるのである。この靜けさ、力強さ大いさ——それから原始林の森嚴さ、峯にまつはる靈氣、神秘、いづれも都會のものではない。

誰れも山において暴風雨や雷鳴に遭つた經驗をもつてゐる。時に死に直面することがあらう。この時の恐怖は山の恐怖ではなく死の恐怖である。大島氏の「涸澤小屋のある夜のこと」には「とにかく人間の

が死ぬといふことを考へるのうちに入れてやつてゐることには、少くともぢやうだんごとはあまりはいつてないからね」とあつた。人間は本質的に死への存在であり、死に先驅してゐるのである。死に先驅するといふ自覺はあそびの構造に觸れるべき問題であり、私はこれを省いたが、ともかく死への存在であることは日常には被はれてゐることである。このやうな自覺において、登山はあそびであるといつても私のいふ行的性格が著しいのである。山に入るのは單なる遊びではなく行である。いはゆるスポーツといひ切れないものゝあるのは多くの人々の記すところであつた。楨氏の書かれたものであつたらう。長い苦しみを経て山に登る、この苦しみのために登山者は山に登る、とあつたのをいまも記憶してゐる。この苦しみこそあそびのたのしさに外ならず、この苦しみこそ人間の良心の證左であつて、登山の重要

なる一性格をあらはにするものである。こゝにジャヴェルの征服の喜びは自らの心に聳える山の未知の危険に對する恐怖やそれを登る困難に對する勞苦を征服し、堪え忍んだ喜びであり、勝利といへば山や他の登山者に對するものではなく、自己に對する勝利であると言つたのを想ひ起す。その山たるや丘陵でもよく、高原でも處女峰でもよろしい。しかしジャヴェルの言ふやうに、山は高く急峻なればなるほど原始的になり、永久に到達し得ぬ理想に近づいて行くのである。まことに人間の登山において見出すもの、具體的に求めてゐるものはこの大自然との交渉であり、この意味において人間は地上にあり永劫の憧憬を山にさゝげるものであらう。登山者はしめやかな激情を胸に抱いて遠くにある自己の本來の存在をさがし求める苦行者である。靜觀的態度の云々されるのも、山岳文章の何がなしロマンティシユな

匂ひを放つてゐるのも一にこの聖なる距離の熱情をば根本的な心構へのうちにうけとつてゐるからにほかならないのである。

Weit, hoch, herrlich der Blick
Rings ins Leben hinein!
Von Geking zu Geking,
Schwebt der ewige Geist,
Ewigen Lebens ahndevoll. — Goethe

私はこの外日本の山岳・登山の特殊性、登山技術などの問題に筆をのばす考へであつたがこの蕪稿すら辛じて草したほど時間に恵まれなかつたゝめ今回はこれにて筆をとゞめたいと思ふ。考への至らなかつたことは再考を待つとして、私はたゞかやうな問題を主題化した熱情だけ汲んでいただければ幸である。この小論は長く秘めてゐたが、世に出るに至つたことは一に吉澤氏と應召中のところ昨日父君を喪はれた同郷の柿原君のお蔭であつた。泌々感謝してゐることを申し添えさせていただきます。

(昭和十三年十月二十日)

伊奈川と中御所谷

吉澤 一郎

山が人間のものとなつた以上、紀行文は文學でなければならぬかも知れない。然し私には文學を書くだけの力はない、力がなければ書かなければいゝ。それもよからう、だが私がわざ／＼此の「山岳」誌上を藉りて時代錯誤な「旅行記」をものしたのも其處に何等かの意味を感じるからである。私に云はせれば純然たる感想文ならいざ知らず、苟も未知或はそれに近い地域の紹介に當つては可及的

正確なルートの説明や時間を除外したのでは全く意味を爲さないのである。まだまだ記録に忠實な紀行文の發表も無下に排斥さるべき時代ではない。文學以前を彷徨して飽くなき私は、斯うして常に未知の谷を求めて歩く、谷こそは私に残された否多くの登山者に残された狭い日本に又なない樂土であると思ふのだ。

前 書

伊 奈 川

三ノ澤岳

濁澤——中御所谷

伊奈川と中御所谷

地圖——陸測五萬 上松・赤穂 (昭和九年發行)

前　　書

「伊那大島^ジ」と云へば赤石や聖、鹽見杯へ伊那の側から、小澁沿ひに這入つて行つた事のある人々にはお馴染の驛名であらう。その一つ南に「山吹」といふ小驛がある、その驛から河成段丘の一つを登つて

座敷からは東に、天龍川や前山を距て、左右に仙丈と鹽見が雲の上高く聳えてゐるのがすつきりと見える。西側の山は母屋の方からよく見渡せるが、木曾駒主脈の大ものはずつと北になるのでわからない、然し大島山、念丈、奥烏帽子等に圍まれた松川の谷はホンの指呼の間にある。

桑畑や果樹園の間を五、六町北へ行つた、下伊那郡大島村^{ナゴ}名子といふ所、其處に、私の母方の祖母が生れた、寛政時代からのお墓を守り乍ら代々農を業としてゐる家がある。私の「信州の田舎」と云ふのは即ち此處の事を云ふのである。初めて北アルプスへ行つての歸途にも友と二人で泊つた事があり、あの魚無河内岳の北側、大井川の上流小西俣の源流地で詰らぬ遭難事件を惹き起した後、静養の爲めの二日三日を過したのも夏蠶^ゴ季節の忙しい最中にあつた此のおばあさんの生れた家であつた。此の家の離れの

今年の夏の休暇には、實は念丈から出て片桐と大島の間を流れ小澁川の向ひ側で丁度天龍に合流するこの地圖に毛蟲の這つてゐる片桐松川（此の谷は南駒で死んだ細井吉造氏が一昨年邊り廻つてゐる）を降つて見やうと思つたのであつた。雨を見込んでの一週間とすれば相當餘裕のある山旅が出来る、私達は色々考へた擧句、中央線の須原から這入つて伊奈川を廻り、久しく憧れてゐた三ノ澤岳の嶺を極め、極樂平から南へ濁澤大峰、檜尾岳、木曾殿越、空木杯を経て南駒に登り、次で越百を踰へて念丈岳に至

るといふ實に尤大な計劃を樹てたのであつた。計劃は尤大でも實行出来るのはいつもその半分といふのが私達の慣例であつたが、今度の旅行も御多分に洩れず檜尾岳の登りですつかり願を出して思ひも設けなかつた中御所谷の濁澤を降る事になつて了つた。

であるから濁澤といふものは初めは全然計劃の内になかつたもので偶然、謂はゞ遁げ道に之を採つたといふに過ぎない、考へて見れば隨分無茶な話で文獻にはまづないと云つていゝ此の谷を、檜尾三角點の傍での相談だけで降る事に決めた杯は山登りの原則から云へば全くの邪道である。然し何事もなく案外

あつさりと降れた今となつては實際思はぬ拾ひ物をした譯で、私としても木曾駒の一部に新しい一つのルートを開拓し得た事を内心では嬉しく思つてゐる次第なのである。本文に入るに先立ち此の山旅に行ふと共にした商大山岳部の現役佐々木誠、並びにOB

たる望月達夫の兩君の勞苦と先輩に對する深き同情と誠心とに感謝の意を表したいと思ふ。

伊 奈 川

昭和十三年八月十七日午後十時四十五分、私達一行六人（村尾、小柳、新羅の三氏とは東川御料小屋まで一緒であつた）は山岳部現役の人達の外に、村、萩、山、といふ美しき女流登山家達の見送りをうけて（女の方々に見送られた杯いふ事は山岳部はじまつて以來嘗つてない大事件である）新宿驛を後にした。

季節とは云ふものゝ、ウィークデイの事ではあり登山者の姿は餘り見えなかつた。でも各車輛には一人宛位に松本へ行くのであらう、襷をかけた一杯氣嫌の兵隊さんが乗り込んでゐた。ブラツトフオートに波打つた旗々、そして歡呼の聲、何だか私達迄も

その同じ聲援に送られて山へ行く様な氣がしてならなかつた。

上諏訪までは殆ど何も知らずに寝込んで了ふ、眼が覺めて見ると八ツも南も低く蔽つた雲の中、諏訪の湖面には小波が寒さうに震えてゐた。鹽尻に著いた、矢張り空はドンヨリと曇つてゐる、霽れて居れば此の平野から前穂の一角が望めるのに、近くの低い山々には怪し氣な雲が纏はりついてゐて今にも泣き出し相な空模様だつた。汽車を待つ間に朝食をとつて了ふ。登山者は吾々だけだ、纏て滑り込んで來た名古屋行きに乗り込み、鳥居峠を潛つて藪原に來る頃、到々心配してゐた雨だ。福島ではドシヤ降りの中を京都邊りの御岳行者が「武運長久、皇軍大勝」の祈願の旗を持つて乗つて來る、旗で思ひ出すのは蓬峠から谷川のあの國境線を單騎八幡太郎義家の如く「登山報國」といふ幟を擔いで颯爽と縱走してゐ

た人があつたとか、そろ／＼松茸も出る頃だから無理もない。須原の驛には午前八時三十四分に著いた。小歇みを待たうとしたが中々その氣配は見えず、改札口の前で間違々としてゐると丈の高い色の黒い、ゲートル地下足袋といふ洋服姿の紳士が一人汽車から出て來たのでテツキリ營林署の役人と睨み、伊奈川の様子を訊ねて見た。此の雨では倉本から登るのは大變である、兎に角私の事務所まで行らつしやい、といふのでお言葉に甘へて跟いて行く事にす。驛の傍のトロ道について少し行き鐵道線路を渡つて街とは反對の高みにあるその人の事務所に立寄る、向ふから傘を持つた人夫衆が迎へに來て呉れた、たつた今驛の中で話した許りの者とは思はなかつたのであらう。事務所の入口には「帝室林野局木曾川支局、軌道建設事務所」といふ看板が掛けてあつた。

吾々を案内して下さつたのは同局技手、田邊保氏であつたのである。林野局用の精密な地圖まで出されて色々伊奈川に關する話をして下さつた。のみならず、今朝澤か或は東川ノ御料小屋に居る筈の柏木氏に宛て「東京商大ノ山岳部員登山ノ途中當局休泊小屋使用方申出ラレ候ニ付キ貴官ニ於テ宜敷御取計被下度願上候」といふ紹介狀まで書いて下つた。土砂降りの雨には閉口したが、こふいふ點では洵に運のいゝ私達であつた。

たとへ御岳は俗化すとも木曾路の雨に泣かんかな、といふ文句があるが今日の雨はそんな詩的な降り方ではない。雨装束にすつかり身を固めた私達は所長田邊氏の厚き御配慮に御禮を述べて九時二十分此の事務所を後にした。

鐵道線路に沿つた儘西に歩いて越阪を越へる、北側の杉木立の下道は事務所からもよく見える。この

事務所の位置はさつとあるの字邊りと思ふ。峠を越へて雨に濡れた桑畑の間を左へ暫らく辿り小澤を渡つて戻るやうにして小尾根を廻る、と聽て新しい軌道にぶつかる、此の軌道はさつきの峠の下をトンネルで潛り驛背後の事務所の附近まで行つてゐるのである。この工事中の歩き悪い軌道を暫く辿ると取入口の様な所で元の古い軌道に合ふ。天橋といふ橋の袂を過ぎ隧道を抜けると直ぐ地圖にある發電所の前に來る(十時二十分)、此の邊から伊奈川はもう道の傍を滔々と流れてゐる、雨の爲めに水嵩は増し又氣味悪く濁つてゐる。田光の下橋を過ぎると又隧道がある、私達は暫く此の出口の所で荷を下ろして休む事にした。越百川との合流點邊りの山裾が雨に烟つて時々現はれる、私は此の時フト、幾年前に今は貴族院議員で納まつてゐる學校の先輩の江口定條さんに、浦松氏や奥野氏と一緒に相伴して穂高

を縦走した事があるが、その時清水屋の前で私の古ぼけた帽子を梓川に放り込んで天氣を良くした事を思ひ出し、曰く因縁のあるといふ望月君の鳥打帽を伊奈川に流す事を提案した、望月君を除く他の者は少しも痛痒を感じる事ではないので、早速双手を舉げて賛成した、恠ふなつては幾ら心臓の強い彼氏と雖も嫌とは云へず、相手が悪いとブツクサ云ひ乍ら到々石をくるんで投げ込んで了つた、途端に今まで執拗に尾根に搦みついてゐた雨霧がサツと許りに消え去つて（實に靈驗いやちこなものがあつた）おまけに望月君の頭によく似た使ひ古るしの齒ブラシ見たいな尾根の一部が（詰り餘り樹の生えてない草地のヒラである）瑞々しく現はれて來た。持つべきものは友であり、且つ帽子であるとその時つく／＼思つた次第である。又、タに曰く「時しもや降りしく雨のフト止みて、友の頭コッペに似たる峰見えぬ」……

これは冗談ではなく此の頃から雨は降つたり止んだりといふ具合になつて來た、簑を着た親父がトロツコに乗つて曲り角から突然現はれて來た、恐ろしい勢ひでやつて來るので驚いて除ける、荷が重いので容易には道が抄らない、それでも十一時半頃、下で敦へられた水色の發電所（相ノ澤發電所とかいふ）の建物が尾根の端に高く見える所まで辿り著いた。越百川の方へ行く釣橋を渡らない様にと呉々も注意されてゐたのでトロ道に従つて二ツ三ツジグザグに登つて發電所の前に出で裏の立派な住宅に立寄つて休まうと思つたが玄關まである普通の住宅なのでその方は遠慮し、もう少し上に登る事にした。トロ道は此處からケールカー式になつて約高さにして五十米突位の急勾配で昇つてゐる、地圖でいふと越百川の合流點の西側、八百米突の等高線の上下が西北から東南に向つて多少緩傾斜を示してゐる所に當る、

トロ道は此の上から略々水平に、所により隧道を潛つて今朝澤の落合附近まで行つてゐるのである、但し此の軌道は目下工事中で、通れない事もないが、まだ随分危険な所があるから通らぬ方がいゝとの事であつた。之が竣成の曉は今朝澤まで非常に樂に行かれる事になるだらう。此のケーブルカーを左にして

山道に這入ると直ぐ壊れかゝつた様な人夫の小屋があつた、私達には之でないと怎うも感じが出ない。

丁度親方らしいのが二人寝てゐたので暫らく休ませて貰ふ事にする。他の人夫連も晝時なのでゾロ／＼と歸つて來て火起しを手傳つて呉れる、恁んな小屋はもうどうせ要らなくなるんだから遠慮なく燃やすがいゝと云ひ乍ら破目板をバリ／＼剥がして持つて來て呉れた。一日に一組の登山者が來てもあれぢや一と月たゝぬ内に小屋がなくなる、一寸珍らしい経験であつた。拵らへた紅茶を皆の方へ持つて行つて

やつたら「ガールが居ねえでサービスは悪いが悠つくりやつてつてくんなせえ」と云ふ、ピツケルといふ名稱も知つて居れば、中房や燕邊りの様子も可なり悉しい、矢張りあゝいふハツバ工事に方々歩いてゐる人達なのかも知れない。

正一時に小屋を出る、あの調子ではあの小屋も今年の秋まで保たないかも知れぬなあ忖思ひ乍ら、小屋の後をデグザグに降ると地圖にある釣橋へ出た。いよ／＼伊奈川最初の釣橋といふ譯である。地圖にある瀧の西南、八百米突の圈を有する峰の東南の鞍部は釣橋からホンの僅かの距離しかない様であるが點線路も變な附け方をしてゐるし地形から云つても少し誤問化しがある様に思へる。實際はもう少し経路の距離が長く釣橋を渡ると直ぐデグザグに登りあとは大した傾斜もなく鞍部へ行つてゐるのである。此の鞍部（一時半）の所で徑路（此の邊の人は皆恁ふ

云つてゐる）は二岐し、一方は越百の奥へ、一方は地圖の通り伊奈川の上流に向つてつけられてゐる。

私達は一週間分の食料とそれに供ふ諸道具とを持つてゐるので具合のいゝ所へ來ると必ず腰をおろして了ふ。従つて距離の割に時間がかゝつてゐるから記録の點では餘り標準にならないので其の點豫め御含み置きを願ひ度い。名古屋山岳會の跡部氏よりの通信ではこの秋、事によるとその人は鼻が長くて羽が生え一本齒の足駄で歩いたのではないかとも思はれるが、名古屋を夜行で發ち上松から本岳、寶劍三ノ澤岳を経て伊奈川を降り須原で夜行に乗つて歸つた、との事であるが、世の中には恐ろしく足の速い人もあるものである。

之からはいよ／＼棧道又棧道と云つた調子で伊奈川の源頭まで進むのであるが今年の經驗によるとあの徑路の通過出來るのも修繕を施さぬ限り茲一、二

年を出でないものと思ふ。現在でも必要な所で棧道の落ちてゐるのが可なりあり、さういふ場所は大概トラヴァースに非常に骨が折れたり危険を多分に含む場合が多いので、その爲め荷物の多寡や棧道の狀態で時間は全く豫定出來ぬものと思はなければならぬ、終ひにはザイルを必要とする所が幾らも出て來る事であらう。私達は棧道を通る時は慎重に必ず一人々々渡る事にしてゐたが、私の乗つた棧道の一つがガサリと氣味の悪い音を響かせて折れて了つた事があつた。餘り危険でない所で良かつたが餘程注意しなければならぬ。

相ノ澤の相生の瀧といふのは高さ十米突位のもので徑路の直ぐ上にある、大して推奨するに足る程のものでもないが傍に名所何々と書いた立札が立つてゐた。此の北側の大きな澤は御料林の地圖によると「今倉澤」といふらしい（二時二十分）、望月君の帽

子の御蔭で鬱蒼たる大森林の梢を透して陽の光が洩れ、しつとりと濡れた山道の上に自分の影が薄く曳く、木曾の山には鳥も餘り居ないと見えて遂ぞその鳴聲も聞かなくなつた、伊奈川の谷音さへも私達のゐる所までは届かぬらしく洵に凄じ迄に静まりかへつた森林の中を徑路は尾根の鼻や畦の上を幾曲りして行くのであつた。時折對岸に工事中の軌道が見えたり、又谷奥に三ノ澤岳續きの尖峰、多分三角點のある蕎麥粒山であらう、が隠顯する。

三時十五分、今朝澤の出会いに辿り着いた。東川の御料小屋まで尙頑張らうといふ説も出たが今までの様子から見てそれは絶対に無理だ、今日はトレイニングの意味から云つても此處に泊るのが妥當である、といふ事になつて御料の小屋を借りる事にする。飯場の様なものが幾つもあるが本流に向つて建てゝある御料の小屋が一番立派である。誰も居なく

て鍵もかけてあつたが其處は慣れたもので何處も壊さずそつくり二枚の硝子戸を外して中へ這入る。電燈があつたので捻つて見たらチャンとつく、炊事道具も一切ある、疊こそないが山には、といふより吾々には少し贅澤な小屋である。夕食の出来上る迄私は附近の様子を見て来る事にした。

小屋を出て飯場の庇の下を通つて本流に架した釣橋に出た。今朝澤は直ぐ前に合流してゐる。その澤にある高い丸木橋が二、三十間先の大きな岩から對岸に渡されてゐる、本流沿ひの徑路は此の丸木橋を渡つて行くのである。釣橋を渡つて對岸に登ると新しく取入口の事務所や社宅が建てられてゐる最中である。此の下の方に小さなダムが造られてゐる、もう大體の工事も終つたので此處から下流に向つて軌道の完成に急ぎ乍ら飯場は段々下へ移されて行くのだ相だ。

小屋に戻つて今度は今朝澤の方へ這入つて見る、小さな澤が瀧となつて今朝澤に落ちてゐる、此の道は南駒の頂上に向つてゐるものだ。戻つて飯場小屋の傍から丸木橋を渡つて見る、徑路不明瞭なるも朽ちかけた棧道が眼の上にあつたので藪を分けて登る。上流への徑路なる事に疑ひなし、丸木橋の袂に美味さうな木苺が澤山なつてゐたので摘んで口に入れる、之は熊が好んで食べるものである。小屋に戻ると飯も炊け汁も出来てゐた、山へ来て電燈の下で飯を食ふ杯贅澤の極みだが止むを得ない。飯場から若い男が遊びに來たので焚火を圍んで話し込む。上諏訪生れのK君といふまだ二十才の若者だがその方面に於ける経験の豊富なものには呆れるといふより驚いて了つた。北海道の所謂監獄部屋から二、三年前に逃げて來たのだ相で其の當時の恐ろしかつた事を色々と話して呉れた。横須賀のさる畫家の所で玄關

番をやつてゐたが附近の不良仲間引摺り込まれそれから所々方々を放浪して北海道まで渡り、上諏訪へ歸つても兄貴達が厄介にするので止むを得ずこつやつて飯場を渡り歩いてゐるが仲々足が洗えないで困つてゐるといふ、渡り者の割にしては大人しい、酒も煙草もやらないので仲間でも變り者として通つてゐるらしい。北海道邊りでも秋になると逃亡者が出るので親方連中もその頃は迎ても嚴重に見張つてゐるとの事だ、食物杯は持たなくとも山には色々なものが實るから二日や三日の生命は保てる、従つて逃げる方も此の時季を選ぶのである。それでも内地の飯場稼ぎは此の頃めつきり樂になり單價（日常の事を恧ふいふらしい）も高く口は向ふ持ちで頭ははねられず二圓以上のものは手に這入るとの事であつた。「ヨキ」（此の言葉は上諏訪方面のみならず下伊那の私の田舎でもさういふと云つてゐたから天龍沿

圖版(I) 伊奈川遡行圖

- 徑路
 台 小屋
 X Biwak セシ所
 ~X~ 釣橋又ハ丸木橋
 ~|~ 徒涉点
 ~|~ 河原ニ出タ所
 S 「ザイル」使用

1
50,000



—

ひの地方では一般に通用してゐるらしい。を借して下さい、といふから何かと思つたら鈍の事で、それで親切にも薪を一生懸命割つて呉れたりした。珍らしい人夫もあるものである。板の間に藁蔭を敷き電燈を消して寝袋に潜り込む、月の光が皎々と硝子の窓から射し込んで来る。伊奈川の川瀬の音が耳に近く宛で何處かの温泉宿にでも泊つてゐる様で山奥の小屋にゐるのだとは少しも思はれなかつた。

豫定をたてゝもその通り行かないのが私達の常であるので出る時間だけは成るべく早く出る。小屋を後にしたのは六時半であつた。昨日見て置いた丸木橋を渡つて棧道に出で本流沿ひに北へ進む。棧道が相當落ちてゐる事を知つてゐるので餘り氣は樂でない、いつぶつかるか、どんな風な所で落ちてゐるのか杯と餘計な心配をし乍ら歩くからである。七時四十五分最初の難關に出食はした、それから又十分程

して又棧道が落ちてゐる。此處は急峻な涸澤になつてゐてちよいと氣持ちの悪い所である。それから暫くの間徑路は陰氣な森林の中を大人なしく續いてゐた、八時廿分、徑路から二、三十間離れた下に、床の可なり高い大きな破れ小屋があつた、時間は瞭りしないが又涸澤の所で棧道がない、下を蹴ると伊奈川まで百米突許り一直線だ、棧道のない所は前にも云つた通り必ず餘り氣持ちのいい場所でないので實際閉口する。之を過ぎて間もなく突然突出した尾根の末端の上に出た、徑路は一番下にあつて小澤を渡り向側の棧道に續いてゐた。此處で暫らく休憩とする(九時—九時十分)。何の話から出て來たかは忘れたが望月君は兎に角今年は厄年である、だからあの帽子が第一の身代りとなつたが一度ある事は二度、二度は三度と續くものだから大いに氣を付けた方がいゝ、何か棄てるものはないか杯と冗談を云つてゐ

たが此の突出し尾根から梯で下の棧道に下り向側の尾根を捲いてデクザクの徑路を下る時、私の前に居た彼氏が腐つた木片に乗つて足を滑らせ中心を失つてゴロリと轉んで了つた、アツド思つた途端に荷物の反動で、もう一回でんぐり返しを打ちアハヤといふ時に丈夫な雜木へ本能的に手が行き危い所を助かつたといふ事件が起つた。何でもない所なのだが一寸の油斷で怎んな事になる、もう一遍あるからねといふと本氣になつて、威かして呉れるなと答してゐた。

九時三十分又棧道の落ちた所に來、足場に少し許り手間取つてどうにか向側に渡り、深切に太い針金の手摺りのつけてある棧道を通つて九時四十分ワル谷、(東川本谷の南にあり獨標一八八三から西へ落ちてゐる澤、此の名稱は東川御料小屋の少し手前の河原に居た鰯釣から致へて貰つたものである)約三

十分の休憩の後丸木橋を渡つて、再び降つて來た雨の中を歩いて十時五十五分東川本谷に架る伊奈川で一番立派な釣橋に辿り着いた。釣橋そのものは立派だが橋板が皆取外して手前の左手にある小屋の中に置いてあつた。小屋と云つてもその板の爲めに造られたもので屋根があるだけ、横に細長い許りで人間には利用出来ない。面白いものを見つけたと許りに、猿の群がその周りでキヤツキヤと遊び戯れてゐる様にX字型に組合せてある橋桁や針金にぶらさがつたりして十分許りをこゝへ費し、先へ進む。一頃劇しかつた雨も直ぐ歇んで呉れた。

東川御料の小屋の少し手前でフト河原を見ると鰯釣りがゐたので附近の様子を訊かふと思つて自分だけ谷を涉つて傍へ行つて見たが大して参考になる様な事もなかつた。はじめ「オーイ」と呼んだが聞えぬ振りをしてドン／＼上流へ行く、やつと追付いた



伊奈川源頭・上ノ千疊敷・脩蔵
(遠景は空木岳)



伊奈川棧道 佐々木 誠

ら何處かソワ／＼してゐた、鑑札を持つてゐなかつたのかも知れない。直ぐ別れて自分だけはその儘川通し登つて小屋の直ぐ下の藪を潜り大汗を掻いて小屋へ辿り着いた(十二時半)。

此の小屋も中々立派である。人は居なかつたが鍵は直ぐ外れたので中へ這入つて見た。茶碗から箸、水きりの筧まで臺所道具は清潔なのが一通り具つてゐる、水は谷まで行く必要がない、電燈はなかつたが一晩位厄介になつて見度くなる小屋であつた。此處で愈々今迄六人であつたパーティが二組に分れ、村尾、小柳、新羅の三氏は裏の徑路を北澤の小屋まで行つて泊り、翌日は木曾殿越から空木を往復し主脈を北に縦走して吾々の方と何處かで會ふ豫定になつてゐた。お別れの意味で村さんの持つて來て呉れた優秀なお菓子杯出して悠つくりと休憩をする事になつた。

別れるとなると又生きて會へるかどうか保証出來ないので名残りは惜しい。記念撮影を終へて正一時愈々東と北へ別れた、熊笹の間につけられた徑路から振り向くと三人はデグザグの徑を一六五二・三米突へ向つて登つて行くのが見える、今日は幾らへばつても此の小屋へ戻るのは止さうといふ約束はしたものゝ案外戻つて見ると向ふも戻つて居て「ヤア之は之は」といふ様な事になるんぢやないか、扨と冗談を云ひ乍ら歩く。と又ぞろ棧道無之候の崩壊につき當る。然し大した事もなく直ぐ三十間許り先にある金澤を今にも壊れそうな丸木橋で渡つた。三人になると天氣は急に良くなつた、向ふのパーティでも同じ様な事を云つて居たに違ひない。屋根がビシヤンコに潰れた小屋を左に見て(多分之が中八町)の小屋であつたのであらう)一時四十分一度河原に出た。之からはずつと登りとなり約五十分にして崩

境にぶつかると、勿論棧道はない、此處は高廻りをしたかひどい藪で向側に下りる迄三十分もかかる。

間もなく河原に出てこちら側は岩の壁となり棧道も落ちてゐた、多分出水の爲め流されたのであらう、對岸への橋もなかつた(三時二十分)、然し靴を濡らす位の徒渉で右岸に渡り大部草臥れて來たので二十五分許りも岩の上に寝轉んで了つた。どうせ南澤の獵師小屋まで行けない事は解つてゐるのでそろ／＼今夜の寢床を探さなければならぬ、それにしても此處ではまだ早過ぎるので重い身體を起して尙前進する事とした。こゝから暫らく徑路は可なりの高廻りとなり踏跡も不明瞭な箇所が多くなる、はじめは嫌に高く行くので尾根を越えて反對側に出る徑なのではないかと疑はれたが之は正しい徑路であつた。小さな涸澤を渡る、踏跡は消えても圍りを眺めると大概それらしきものが發見出来るので心配はな

い、四時十五分尾根の端を棧道によつて廻ると陰鬱な涸澤に來て又棧道が落ちてゐる、高さは三、四間しかないが下が不安定で飛び降りる譯にも行かぬ、空身でも一寸降り悪いのだ、こゝではじめて已を得ず佐々木君のリユツクの底にあつたザイルを出す事になつた、伊奈川の領分の内でザイルを使ふとは案外であつた。四時四十分、下に降りザイルをしまつてもう懸て昏れやうとする森林中の徑路を黙々として歩く、對岸に見上げる様な赭茶けた岩壁が出て來た、之が「燕岩」といふのであらう。最早五時である、今夜の泊りは此處とし河原に出て島の高みを地慣しして野營地を造る。河原に出る時私は、疲れてゐた爲めもあるが木の根に足を引つけて重いいリユツク諸共に前につんのめり顎をしたゝか打つて了つた、危険は詰らない所に伏在する。

夏とは云へもう秋も近い、谷の奥では忽ち黄昏が

追つて来る、流木を集めて豪勢な焚火を起しテントは持つてゐないので好きな所へシユラーフザノクを延べて食事をとる、臙てトツブリと日は暮れた、焚火の火のみが赤々と兩岸の森林を照らしてゐる、紅茶にカーネーションミルクを入れやうと持參の釘と鉋で穴を明けブーと吹いたが出て来ない、どうも之は變だぜミルクかねえ、といふからよく／＼見るとウインナ・ソーセージの罐詰であつた。長唄の鶴龜を始めから終りまで呶鳴つたが誰も褒めても呉れない、貶もしない、唄つた聲は森林の暗闇と伊奈川の瀬音にみんな吸ひ込まれて行つた。だが二人は焚火に手を翳し乍ら神妙に聽いてゐた。數知れぬ星が、そして天の河が眞黒な尾根と尾根との間の空に斜めに懸る。夜更けてフト眼を覺ますとあたり近所が馬鹿に明るい様だ、ハテナと思つて袋から顔を出すすと下絃の月が頭の上に懸つてゐたのだ。

月明きこゝ伊奈川の夜更けて
友の寢息のほのかに洩るゝ

満月だつたらどんなに明るい事だろう、吃驚した私の聲に友も顔を出して餘りの明るさに眼を瞠つてゐたが、まだ二時少しを廻つたのみなので再び溫い袋に潜り込んだ了つた。

八月二十日、今日は大體伊奈川源頭の千疊敷へビヴルクする豫定である。岩小舎もあるらしいので多少夜露だけは凌げるかも知れない、兎に角どうなるか解らないが豫定だけは千疊敷といふ事にして置いた。

野宿の跡仕末を奇麗にして七時十五分出發、暫く平な徑を行くと河原に出た、又左手の平地を辿り高い梯子の様な棧道を登つて少し許り行くと森林の中に高い岩壁がチラホラ見えて來た、此處から河原へ出て徒渉である(七時三十五分)。直ぐ又右岸へ涉り

かへすがこれは丁度先に森林の中に見えた岩壁が川岸で突き立つてゐるのでそれを除ける爲めのものであつた。徒渉と云つても膝位のものである。跡部氏が「登山とスキー」の七月號に發表された記事は此の邊少し實際と異ふ様である。今度はずつと高廻りとなり急に谷の奥が豁然と開けて來た、谷の様子も段々に源流らしい格向になる。蕎麥粒山（萩原澤岳、二三三八・七米突）を左眞上に仰いで（八時二十分）から約十五分にして兩岸の大きな岩から岩へ架け渡してある高い丸木橋を渡つた（八時三十五分）、高いから大概の増水にも流されずにゐるのであらう。此の丸木橋の附近からは三ノ澤岳の西南にある岩峰がよく見えた。之から大谷まではずつと平な何處か秩父を憶はせる様な爽快な氣分にする登りであつた。八時五十五分、丸木橋の手前へ荷を置いて下の河原で少し休憩した、夏の陽ではあるが河原の石に脊中

を凭れかけて青い空を眺めてゐると遠く木曾の山にゐる幸福が沁々思はれるのであつた。空は青く雲は白く、森林は濃緑に、本流との合流點邊り積が廣くて陽はカンカンに照りつけてゐるが暑いといふ感じは何處からも湧いて來ない、唯朗らかに四邊は澄み透つて岩は岩で、水は水で、そして草は草で自がおしその何ものにも潤濁せられない本來の色を相映じてゐるのだ。倅りのない世界は何處へ行つても清澄の樂土である。

九時五分丸木橋を渡つて徑路甚だ不明瞭な廣い草藪の中へ這入る。それでも虎杖や蘚の下に脊負子程の橋が窪みにかけてあるのにぶつかるので徑から外れてゐない事だけは解る。九時半本流に架る最後の丸木橋へ出た。もう此の邊へ來ると水量はグンと落ち、河原を歩いてもチャカ／＼行け相に思へたが徑路のある内はそれに従つた方が早いので約三十分ハ

ンを食べたり陽なたボツコをしたりして漸く右岸に渡つて徑路を通る。

奥の三ノ澤といふのか二本目の涸澤に架けられた丸木橋を渡つて（十時半）から約十分にして待望の南澤獵師小屋といふのに著いた。初めの豫定では須原から倉本まで引返し中八丁の乗越を踰えて此處まで来る筈であつたのだから大した番狂はせである。

南澤といふのは小屋の直ぐ上手で本流に合流してゐる、小屋は全く雨露を凌ぐに足るのみで（然し少しひどい降りともなれば雨の方は保證の限りではない）天井が低く決して快適なものとは云へないだらう。然し吾々にとつてはいざとなれば之でも立派なものである。山の中では洵に金殿玉樓にも比すべきであろう。丁度晝時に近くもあるので之からの登りに備へて腹を拵らへて置く事にする。見送りに來て呉れた山さんから貰つた素晴らしいコクのある羊羹

を出す、此の場合甘いものは最もいい活力の要素となるものだ。時々雲が通つて陽を隠すと急に寒くなる、それもその筈、もう此の邊は二千米突に近いのである。

獵師小屋に敬意を表するの餘り一時間半以上もの大休憩をしたが、斯くては果てぢ、今日はどうしても千疊敷まで頑張らなければといふ譯で、零時廿分此の小屋に別れを告げる事になつた。

徑路はまだ右岸にすつとつけられてゐる。そろ／＼源流は北へ向つて、十二時五十分奥の稜線が眼に這入る所へ來た、對岸に濁澤大峰邊りから下ろして來た尾根の突端が一峰ををなしてゐる様になつてゐるが地圖には一向現はされてゐない。

一時五十分遂に徑路は終つたらしい、終つた地點の棧道が落ちてゐたので少し戻つて河原へ下る。此の邊からは殊によく、はじめジャンクシヨン・ビー

クと許り思つてゐた伊奈川の頭(假稱)がザラ／＼の白い頭を剥き出しにしてゐるのが高く仰がれた。此の「伊奈川の頭」といふ假稱は伊奈川の方から這入つて行つた人には實に適切なものである事が肯かれと思ふ。一町許り先に小さな瀧(本流)が見えたので其處まで行つて休む事にした。五、六間の高さの瀧で左側が簡単に登れ相であつたが、佐々木君に行つて貰ふと「何でもありません」と直ぐ戻つて來た。堅パン杯噓り乍ら周圍の様子を見廻してゐた、遙々登つて來たものである、人間の足といふものも考へて見ればさう馬鹿にしたものではない、伊奈川は直ぐ下で右に曲つてその先は左右から迫つた幾つもの五木の尾根に隠されてゐる。

重いリュックを再び脊にして瀧を登る、上は廣い礫になつて居り、少し先に一段を爲して丸い大きな石がおつ被さる様に迫つてゐる。雜木の生えた島を

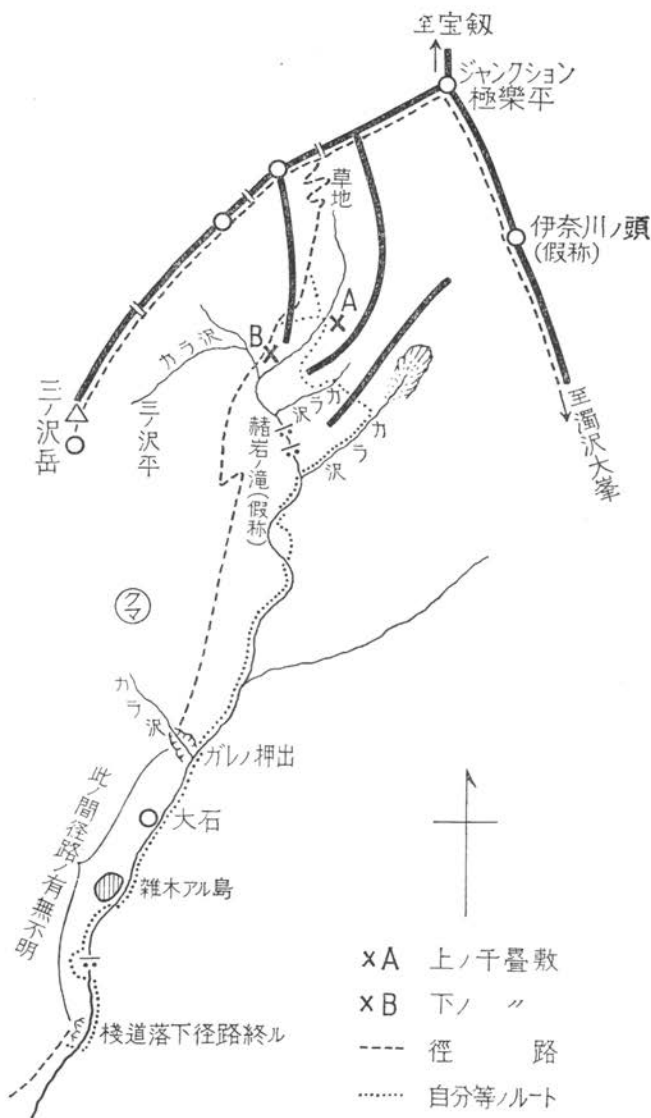
左にして行くと段々川は右へ曲つて又左へ曲る様になる頃、右手の草原が如何にも悠んびりしてゐて徑でもあり相に思へたので登つて見たがそれらしいものは見付からなかつた。再び狭い河原に降りて稍々疲れを覺えた身體を水邊に横へる。

又暫らく右へ河原通しに登つて行くと澤が二つに岐れた(三時五十分)、右は涸澤で左は本流である。

見ると可なり高い瀧が懸つてゐる、階段狀に赭味を帯びた岩壁の上を約二十五、六米突落ちてゐるのである。何處かの學校の年報で見たと思ふが此の瀧の赭岩の上を水を浴び乍ら攀じて千疊敷へ出た人があつたが、私達は汗で身體中がグシャ／＼だしこの上水を頭から被つたのでは野宿をする場合甚だ都合が悪いと思つて瀧を登るのは遠慮して置く。此の瀧は今何とも名稱が附いてゐない様であるから「赭岩の瀧」とでもして置いたらいふと思ふ。

圖版(Ⅱ)

伊奈川源頭見取圖



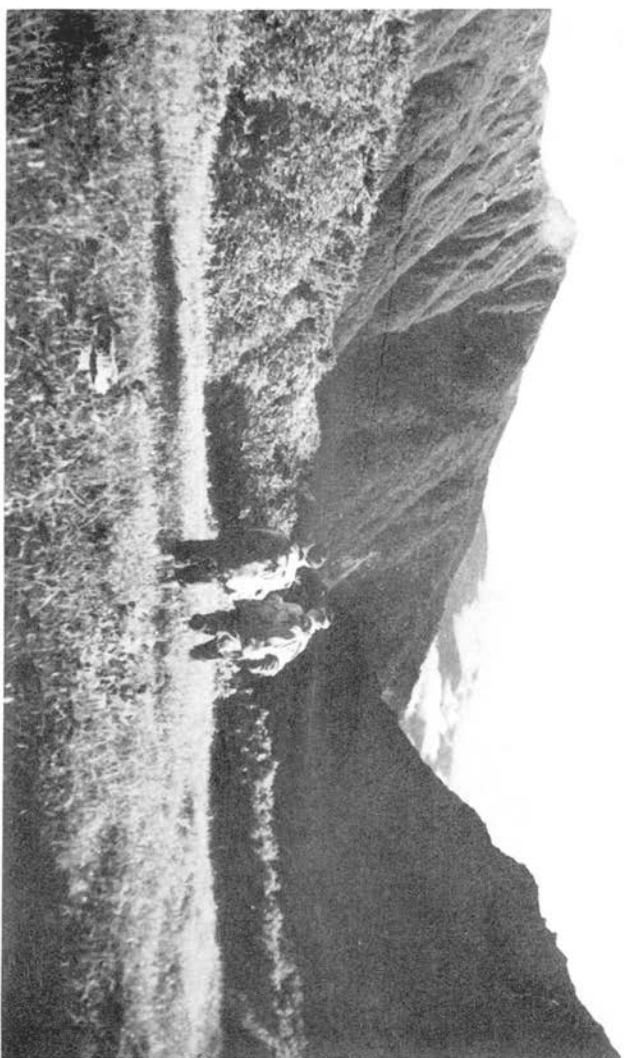
之から右の急な潤澤を一步々登つて行つた、時々横眼で左を見ると、赭岩の瀧が段々下になつて行くに従ひ千疊敷らしい地形が眼に入つて來た。ハ、ア、いよ／＼あすこか、登り過ぎてゐる損だが平行では假松潜りが大變である、といふやうな事を勘定に入れて千疊敷が斜め下になる位の所まで此の潤澤を登つて行つた。いゝ加減の所で假松の中へ潜り込んだ。泳ぐのは覺悟の前であるが中々樂ではない。踏み外して落ちれば下であるからどうしても下り氣味になつて了ふ。どうにか丈の低い假松地帯に出で、こめ木の一面に蔓つてゐる斜面の岩の上に仰向けになる。千疊敷は近いが腹は猛烈に減つて來た、歩く元氣も稍々衰えた、伊奈川の下流はもう雲の下に隠れてゐる、美濃の空にはアーベント・ロートに輝く素晴らしい雲が湧き上つて來た、眼の前の三ノ澤岳の頂上へは薄い霧が後から／＼押し寄せて行く、三角

點の峰と一緒に三ノ澤平を繞ぐる岩峰が中々立派に見える。千疊敷を流れる伊奈川の本當の源頭をずつと上に辿ると黄ろい花の一面に咲いた斜面があつてそこにヂグザグに徑路が登つてゐるのが見えた、了つたと思つたがもう遅い、はじめにあつた瀧の所で徑路は終りではなかつたのである。此の事に就ては又後に述べやう。それから空木やハシゴダルの頭、さては檜尾岳邊り、執拗な夕雲が取捲いてゐて中々全容を現はさない。毎日十時頃までは快晴であつてもそれ以後は忽ち方々に雲が湧き出して來て遠くの山々を觀察するには洵に具合が悪かつた。

此處からは大した假松潜りもなく横に斜面を搦んで行くと上の方からズツと來てゐるカラ澤に出たのでそれを一町許り下り又横に搦むと獸道らしいものがあつてボカリと千疊敷の一部へ踏み入る事が出來た。此の原には水は流れてゐない、「水無シ平」である

が左手の隅に焚火の跡があつた。可なり枯れてゐて燃え付きも保ちも良さに思へたのでその燃えしを一抱へ佐々木君に運んで貰ふ事にした。この「水無シ平」から灌木の間の踏跡を辿ると今度は水のある平に出た。之がいよいよ千疊敷で而も一番上の「上ノ千疊敷」である(五時十五分)。然しはじめはそんな事に氣が付かず岩小舎といふ千疊敷だと思ひ三人手分けして流れ沿ひにそれらしきものを探しに出たが結局見つからないので諦め大急ぎで野宿の仕度をはじめ、いくら山の上でも此の頃では陽脚が逆も速くなつてゐる。野宿なら何處でも同じ様なものだが矢張り近所に何か目標といふか頼りといふか、何かそんなものゝある所を探すから可笑なものである。私達も假松の海の一番組の所へ地を卜してそこを今晚の寢床とする。此の邊は、なり高山植物が豊富にある、中でも私の眼に著いたのは四ツ葉シ

ホガマとチングルマであつた、(私の知つてゐるのが之だけであつたといふ方が正確に近いかも知れない)梅鉢草がこんな高い所にあるのには一寸奇異な感に打たれた。その他色々あつたがチンブンカンブンである。豪勢な焚火と共に伊奈川源頭の夜は忽ち來て了つた、再び凄しい程の星夜であつた、*„Über uns ein funkeln der, blitze der Sternenhimmel, das riesige Weltpa“*と云つた、マッターホルンの北壁に不自由な長き一夜を過したシュミット達の氣持ち、場所は異つても、星の世界に眼をやる自然人の心には何か共通なものがあるのである。北斗七星は柄の所しか見えず四角い所は三ノ澤岳の稜線に隠れてゐた、カシオペアがわかつた、兎に角餘りに夥しい星屑なので壓倒されて何が何やらさつぱり解らない、夏である、何處かに、いつか鯨の長次郎の岩小屋から見た後立山に尻尾をかくしてゐた蜥座が、と思つて見廻



伊奈川源頭・上ノ千疊敷の一部（水無シ平）

すと、あつた、三ノ澤の頂の左にあつた、今夜は蜩の全部が中空にぶらさがつてゐる。之だけの説明を望月、佐々木の兩君にしてやると私の隠れたる天文學者である事にひどく感心してゐた、彼等が何も知らぬ事以て察するに餘りあるべし。野宿第二夜、通算第三の夜は斯くて植物學者であり天文學者である私を残して更けて行く。二人の新入りは、いとも素直に感嘆しその儘スヤ／＼と袋の中に寝入つて了つた。私も同様袋の中へ這入りはしたものの、無精をして衣替へをせず着たきり雀で潜り込んだ爲め、汗が中々乾かない。震える程の寒さは感じなかつたが遂に一晩中熟睡する事は出來ずに終つた。無精をしただけである。

三ノ澤 岳

明くれば八月二十一日、今朝は五時十五分に起床

夥しい夜露がシュラーフザツクの上にかゝつてゐた。面倒臭いので焚火を起さず重荷を減らす意味からコツヘルを使用する。飯を炊く必要がなかつたので味噌汁だけならアルコールで澤山である。然し寒いのは閉口した。下絨の月もどうやら弓の様に細くなり明るくなつた青い空に淡く残つてゐた。ふと空木岳の方へ眼をやると丁度東面の岩肌がモルゲン・ロートに輝いてゐる、伊奈川はシンとして音もなく静まり返つてゐる。段々と朝の陽射しが右側の尾根に當つて來て潤澤大峰や檜尾岳邊りの主稜の影がクツキリと伊奈川に延びて來た。山の夜明けの爽快な事は何處で味つても同じである。實際此の千疊敷は一日位の滞在では勿體ない、少く共三日や四日何處へも登らなくてもいい、悠つくりと朝夕の山の景色を眺め乍ら過したい所である。來年邊り、家庭奉仕といふ意味から家中のものを引き連れてこう

いふ所へ來るのも悪くはないと思つた。

出發に先立つて一應徑路を確めて見やうと一人で河原から高山植物の亂れ咲く前の尾根（地圖の二七二〇米突の峰から眞南に出てゐるもの）に登つて行つた。想像してゐた通り徑路は（附圖参照）此の尾根を乗越し反對側に下りて又河原と合つてゐる、其處が岩小舎のあるといふ私の所謂「下ノ千疊敷」である。此の方が「上ノ千疊敷」よりは平として少し狭い様な氣がした。

元へ戻つて七時十分愈ゝ伊奈川最後の泊場に別れを告げる、徑路へ向つて斜めに登り、昨日見たデグザグを終ると極樂平から下りて來た最初の鞍部に辿り著く（七時半）。

左右に廣い御岳が雲の上になつて眞正面に見える、その右は上松口の前岳、續いて玉笹の鞍部、夏道が前岳の急な斜面を横切つてゐる、三、四年前の

四月の末に人夫を一人連れ四人で金懸岩の下の小屋に一泊、遠見場の雪に埋つた小屋で晝飯の様なものを食べてから急な細い雪稜を下り少し登つてあの夏道を辿らうとした時、雪が腐つてゐる上に斜面が餘り急なので萬一を慮かり尾根通しに吹雪の中を、氷と假松の壁の所を苦勞して攀じ登つた事を憶ひ起した。こんな時に臆面もなく山の上を歩き廻つてゐるのは俺達位のものであらうと思つてゐた所、頂上邊りで旺んに吹捲くつてゐる吹雪の中からこちら同様に嚴めしい武裝の二人連れの登山者の下りて來るのに出遇ひ、向ふでも呆れてゐたがこちらも相當な奴だなと敬意を表しながら「ひどい暴れですなあ、御大事に」といふ言葉を交したゞけで別れて了つた、あの山行、あの時は本岳を越えて伊那前岳から一気に赤穂まで下つて了つたが伊那前岳で濃霧に包まれ下るべき尾根が解らず立往生した事や、一丁ヶ池から

濁澤大峰 ↓

檜尾岳 ↓

空木岳 ↓

ハシゴダルノ頭 ↓

南駒ヶ岳 ↓



三ノ澤岳頂上より木曾駒主脈

吉澤一郎

少し束の所で今度は雪の爲めに夏道を通り過ぎてしまつて困つた事、途中で日が暮れて黒川の發電所までの尾根捲きの長かつた事、終ひには人夫まで傾を出した事杯、それからそれへと憶ひ出は盡きない。

眼下の谷は滑川である、黒田(正夫)氏一行の登つた澤はどれだろう、と話し合つてゐる時、金懸岩で泊つた時の人夫の話を思ひ出した。何んでも栗、島、澄子とかいふ女が滑川を登つて本岳へ行つた事があるといふのだ、東京の女と云へば栗島澄子の名前だけしか知らないのだろう、今は博士夫人となつてゐるハチ子さんも澄子女史なら間違へられても腹は立つまひ。

七時四十分、空身になつて久しき念願の主たる三ノ澤岳に向ふ、雪のある時分上松口の森林の間から垣間見た三ノ澤岳は實に堂々たるものであつた。木

曾山脈の中では恐らくこの三ノ澤岳が一番どつしりとした山容を持つてゐるのではないかと思ふ。

瘤を二つ許り踰えたと最後の登りにかゝる、右方には御岳から右に乗鞍、穂高、槍杯のお馴染みの姿が順々と雲の上に浮んで来る、今まで見なかつた雪がやつと乗鞍の肩の小屋と覺しき附近の窪地に一際白く光つてゐた。左方には木曾の主脈の向ふに是亦雲海の上に南の尤物がズラリと居並ぶ、富士が随分大きく見える。三ノ澤の最後の登りと思つた峰はまだ一つ手前であつた、之はずつと滑川寄りを登つた方が假松が少くて樂である、餘り人が來ないせいから徑は瞭りしてゐない。八時三十分頂上に着いた。空木を中心にして駒南方の雄峰が足下の伊奈川を距てゝ黒々と聳立してゐる、木曾殿越といふやうな文字からの先入主があるのか、あの邊りの山容は實に黒糸織の鎧といった感じである。三ノ澤岳の最高點は

三角標石のある所ではなく少し北寄りの岩石の上である、私達は代り番にその尖つた岩の上に立つて紀念の寫眞を撮り合つた。此の邊には美しい高山植物は餘りなかつた。今日は木曾殿越の水場か或は旨く行つたら空木の小屋泊りの豫定なので餘り悠々ともしてゐられない。八時五十分頂上を辭し九時三十五分リュツク・サツクの置いてある場所に戻つた、此の方面から見た寶劍、中岳、木岳の姿も中々いゝ眺めである。

山さんからの羊羹、パン、サーモン、それに水やらお茶やらで相當な豪遊をして十時五分いよ／＼ジャンクシヨンの極樂平を目指す事になつた。例によつて空木の方には雲が湧き出して來た。

ライト・アツセント、僅か三十分で極樂平に着く、この平は武田さんの話によると、寶劍の方から危い岩の間を降り來てやつと登りついて見ると、今

までとは宛で反對な氣樂な平に出るといふ譯で極樂平といふ名前が生れ、さう古い名稱ではないとの事である。此の附近の名稱として尙伊那方面では「島田娘」といふのを與へてゐる様だが餘り感心した山名とは思はれない。寶劍を往復して來る豫定もあつたが時間の關係から之を割愛して南へ主稜を辿る事にした(十時四十五分)。

之から伊奈川ノ頭(假稱)——白岳といふ名稱はいゝとしても驚垂岳はどうかと思ふ、それは檜尾岳(二七二七・七米突)の別名にサギダルの頭といふのがあり、それがこの峰の東北の殘雪の形から來てゐるといふ事實と考へ合せて不當である。尤もある本では東側のワル谷の内が一番北から來る谷をサギ谷と書いてあつたから、慙ふなると孰れが正しいのか全く解らなくなつて了ふ——を過ぎ(十一時五分)二七〇〇米突の等高線の終る邊りまではザラ／＼に

風化した花崗岩の砂礫の上を伊奈川の源流地を瞰下ろし乍ら行つた。その時私達の今朝出て來た千疊敷附近を眺めると不思議な徑路が瞭り見えた。アレツと思つて眸を据えると誤ふ方なき下からの徑路である。附圖の一部はこゝからの見取圖であるから御含み置きを願ひ度い。伊奈川の頭から南へ六、七町の間にはミヤマウスユキ草がまだ澤山咲いてゐたが、駒草にはもう花がなかつた。——その時は何の氣なしに駒草があるな、と思ひ乍ら通り過ぎただけであつたが此の間「霧の旅」の會に招かれて一席伊奈川と中御所谷の話をした時、丁度武田さんが來られてゐてこの話が出たら博士は、そりや珍らしい、あの邊に駒草がありましたかね、もうすつかり跡を絶つてゐるものと一般には考へられてゐたんですよ、木曾駒に駒草があるといふ事は實に都合のいい話で、木曾の御岳で「お駒草」と稱しおの字までつけて行

者杯に法外な値段で賣付けてゐたのは殆ど駒ヶ岳から採つて行つたものらしいのです、駒草の駒の意味は蕾の形が丁度馬の顔にそっくりだからそれから來てゐるんですが知つてゐますか、話はそれから三ノ池の水だとか色々な方面に延びて行つたが兎に角、私の駒草の發見は珍らしいと話されてゐた。——其の後山岳會の理事會で再び武田さんに會つた時、博士は極樂平の附近に駒草に一寸似たものがあるから、と注意された。素人の私であるから或はそれと間違へたかも知れない。

——十一時四十五分濁澤大峰の北の鞍部に着く。そろ／＼水分の缺乏を訴へて來た、例によつて佐々木君に東側の谷へ少し下りて水を見て來て貰ふ事にした、十分許り下りて歸つて來たがないといふ。西側の谷も水のある所までは大變だ、止むを得ず貴重なパイ罐を開ける。雲が低く次第に四邊の眺望も隠さ

れて行つた、いよ／＼天氣も下り坂となつたのである、濁澤大峰へは鞍部の少し上からワル谷側の草地を搦む所があるが野營するには持つて來いの平地が見えた。二十五分で大峰に着く、濁澤大峰は幾

峰にも分れてゐて單純な一峰をなしてゐる譯ではない(十二時三十五分——一時十分)。此の頃になつて漸く昨夜の睡眠不足が祟つて來て大部疲勞を覺えるやうになつた。一ヶ所キレット狀の鞍部を過ぎて主脈上の最低地たる二五四〇米突の檜尾岳北鞍部に着く(一時三十五分)。之から約二百米突の登りである、檜尾岳の頂上は勿論見えないが霧が襲つて來て直ぐ上の頭も隠れてゐる。此の登りには實際參つた、水はもう殆どない、咽喉は渴く、足は動かぬ、短い偃松の上に天を仰いでグツタリと延びて了ふ。佐々木君が隠し持つたる生胡瓜を一本づゝ分配して呉れたが二人はそんなものがあつたのかと許り、食

るやうにヘタまで食べて了ふ所であつた。之に多少の元氣を取戻して漸くの思ひで檜尾岳の三角點に登り着いた。(三時十分、下の鞍部から一時間二十分かゝつた事になる)

霧の切れ目から木曾殿越、空木岳邊りの様子が覗へる。連も此の元氣では對岸の空木岳はおろか木曾殿越の水場までも今日の内に行きつく豫算は立てられない、途中で泊るのもいゝが水がなくては面白くない、どうしやう、三角點の東に五十米突も降ると廣い平がある、あそこへ寢やうか、それともと考へてゐる時どういふ風の吹き廻しか望月君が、クマさん濁澤はどうです、降りて見ませんか、と云ひ出した。そうだな三十分もすりや水のある所へは出られるだろう、兎に角谷の中へ二日寢る覺悟なら食料もザイルもあるのだからどうにかなるかも知れない、兎に角上の方だけでいゝから様子を見て來て呉れ、

と又佐々木君に偵察を命じる。報告の結果大した事もないらしいといふので結局此の未知の溪谷を下る事に一決した、瀧の二つや三つは覺悟の前である。さう決つたなら水はもういらぬ、と許り最後の數杯分を三人して分けて飲む、と云つても平等ではなく慙ういふ場合分量の一番多いのは私である。先輩といふ名目は此の場合勳一等よりも遙かに御利益がある。東京に居てこれづばかりの水を水道から有難さうに呑んだ日には實際少し、來てゐるとより思はれないだらう、實に貴い水滴であつた。

濁澤——中御所谷

いよ／＼降るとなると少し心配になる事が浮んで來た、村尾氏一行とは主脈上の何處かで會ふ事になつてゐる、會はなくとも心配しなくてはならない程のチャチな山男達ぢやない、此の方は先づいゝとし

て私達が濁澤を下るといふ事は誰も全然知らないのだ、萬一何かの都合で遭難でもして丁へば探しに來る方が大變だらうと搜索隊の爲めを思つて、「山日記」の白紙を一枚剥がしそれに下降の年月日時間と姓名を書きつらね三角點の標石の上へ飛ばされぬ様に小石を重しにして置いて行く事にした。此の紙片を最初に見たのが本會員深田久彌氏であつたとは洵に面白い廻り合せである。深田氏とは學生時代東北大朝日岳の北側で偶然に遇ひ一杯の紅茶を御馳走になつた事のある間柄である。同氏等は越百の方から來て翌日こゝを通り紙片を見て懐しく思つた、と手紙を寄して呉れた。彼氏も忙しい間をよく山へ這入つてゐる様だ。あの「高原」では大部吾々の間で評判を悪くしてゐるが支那へ行つたら大いに山の體驗を基として山岳戰の實況でも（商賣氣を出さず）筆の上に殘して來て貰ひ度いものと思ふ。

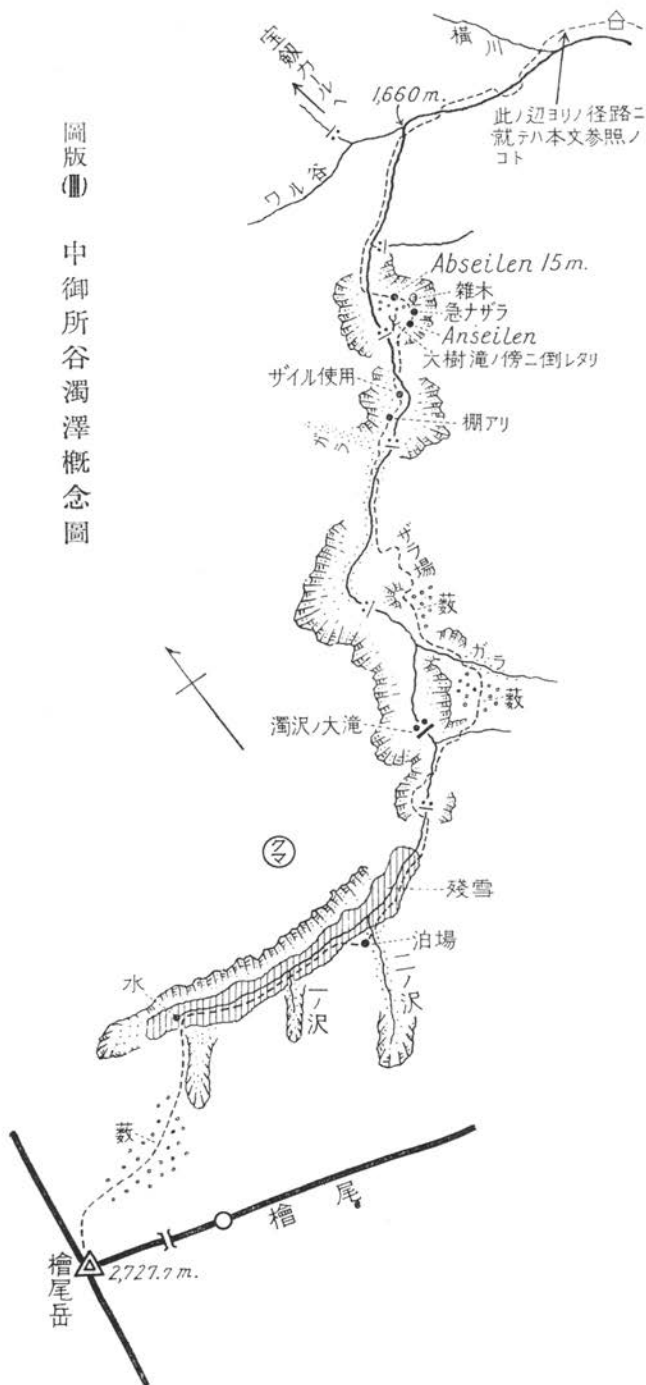
閑話休題 斯くして四時キツチリに空木の峰頂に一瞥を與へて三角點を後にした。主稜の右側を少し戻り草地の窪を右へ下る、草地から藪である、然し大した事はない、下りであるからだ、熊が踏み躪つた様な所もある、藪のない所もあつた、そこには羚羊の趾跡が見られる、私達は羚羊にもなり熊にもなりして藪又藪を潜つて行く、前方は雲が低く下りて見透しは利かない、いくら下つても中々澤らしくなつて來ない、右から來る筈の窪に合ひ相なものだが中々ぶつからない、五時、それでもやつと藪から解放されて急峻なガレの一端に出た。下を蹴ると恐ろしく荒れた谷となつてゐる、此のガレはまだ急過ぎるのでガレと藪との境目を下つて行く、五時十五分左から同じ様なガレが落ちて來てゐる所に出た。俄然残雪である、而も一丈以上の厚味を持つたコチ／＼の残雪で殆ど氷に近くなつてゐる。その上へ大

小様な岩や石が落ち重なつてゐるのだ。この岩の上に腰を下ろして佐々木君にとつて來て貰つた水筒の水を食う様にゴクリ／＼と吞む、洵に待望の水であつた、水の出てゐる方のガレは可なり高く、その上は又藪で多分濁澤大峰と檜尾岳の最低鞍部二五四〇米突と思つて差支へないだろう。

立上つて眞黒な雪溪上を下へ眼を移すと方々に割れ目や崩壊や雪橋をなしてゐる部分などが見える。雪崩の凄さ、そして花崗岩砂礫の毎年の崩落が此處に氷と化した雪を残し谷の水を濁らしてゐるのである。恐らくあの厚味ではあの残雪の一部分は必ず越年するに違ひない。荒涼といふか凄慘といふか兎に角、こんな風に、どうにでもなれつ、と云つた様な自然の景觀を私は嘗つて見た事がない。

成るべく雪溪の端を通り止むを得ぬ時は一人々々注意して薄い雪橋を渡り扨して下つて行くと右から

図版(Ⅲ) 中御所谷濁澤概念圖



小澤が落ち込んで来てゐた、又暫く雪の上を下つて行くと同じく右から二本目の澤が合流してゐる、その合流點の手前（右岸）に迎も誂らへ向きの平地を見付け出した（六時）。普段は羚羊の寢床にでもなるんではないかと思ふが此の荒谷に實に願つてもない様な泊場であつた。此の澤は地圖に檜尾とある尾の字の左にある崩壊地から出てゐるものであらう。雪崩に押し出されたらしい大小の枯木を集めて今夜も豪勢な焚火である。野宿も三日目となるとそろ／＼

屋根が戀しくなる、それに天氣ももう保ちさうにも見えなかつた、今夜邊りは一降りやられる覺悟をせねばと、降られても困らぬ様に總てのものを整頓する。望月君は盛んに前途の事を心配してゐたが——彼はなか／＼苦勞屋である——其の場へぶつからなければ解らない事を心配しても仕方がないし、又此の位な谷なら何とか窮通の道はあるものだ、寢たり

／＼と許りにシュラフザツクに潜り込む、時々袋から顔を出すと星が見えたり隠れたり、夜更に一度バラ／＼と雨が來たり、兎に角もう山から出るべき日は近づいてゐる證據であつた。明日は何かして里へ出なければならぬ。

八月二十二日、四時半起床、今朝も殘月は狭い谷の空に懸つてゐた、朝焼、綿雲、然し先づ今日一杯位は保ち相に見える。後片付けをして七時出發、クレヴァスを飛んだり雪橋を渡つたりして雪から解放され河原へ下りたと思ふと直ぐ瀧が現はれた（七時十五分）、之は左側を簡單に降りて了つたが直ぐ二、三十米突の瀧にぶつかつた。之は相當問題である。左右を見上げ見廻してもさう簡單に瀧壺へ下れる場所はない、落着くには少し早過ぎるが荷を下ろした。兎に角左側は餘程高捲きする以外方法はない、然し右側には偵察の餘地ある尾根が來てゐる、その

上までは簡單である。こゝで例により佐々木君に偵察を依頼する、彼は空身になつて右手の水に濡れた岩場を登りその左上の藪に這入つて暫らくして戻つて來た。旨く逃げられ相です、ね、あの藪の向ふに又一本澤があつて左へ落ちてゐます、何とかなるかも知れません、といふ報告。ぢや行かふ、先の事は先の事だ、荷を脊にして小澤の水を浴びてゐる岩場を攀じ登り藪に這入つた、この小尾根は瀧の眞上でスツパリと切り落されてゐるものである。藪から向ふへ下つて水流のあるガラへ出る。私は二人を藪の中へ置き荷をガラの上に置いて下の様子を見に下りた。少し行くと狭くなつてその下がガタンと落ちてゐる、左右は壁だ、之はいかと思ひ乍らそばまで行くと落ちては居るが岩の上を簡單に下れる、その先に又段がある様だが大した事もなさうなので上へ引返し荷を擔いで三人一緒に下つて行つた。偵察

の時の第二の段は通らず右手の斜面をヘツツて行く、フト上流を見ると左右の高い岩壁に囲まれた奥の方に問題の瀧が音もなく落ちてゐた、(實際音は聞えなかつた)私は之を「濁澤の大瀧」と呼ぶ事にする。斜面をヘツツた序にその突端へ出ると壁である、本流は瀧だ、右を瞰るとザラ場で河原へ下れ相に見えた。實際谷といふものは何處かに通れる所が必ずあるものだと思つて感心する。

この河原は割合に廣くて二町位續いてゐた、此の前降つた團衛谷には絶対にこんな河原はなかつたね、と話し合ひ乍ら中頃の所で一本立てる、(八時二十五分)。先を見ると又怎うやら瀧らしい。今度は望月君が偵察に行く。あの瀧が下れなければあの陽の當つて白く輝いてゐるガレを登つて高捲きだ、と考へてゐると戻つて來てまづ無難だといふ。仍て又出掛ける。瀧の左手に棚がある、それを少し行き一

つ下の段に下り立つ。水面までは僅かだが一寸簡単に降りられない、仕方なしにザイルを頼る事にした、三人とも對岸に著いてザイルを片付け終つたのは九時十五分であつた。

又瀧である。今度は相當手強相である。いよ／＼谷まつて來たかなとは思つたが尙よく觀察して見る。瀧の右手の岩壁に沿つて可なり大きな流木が倒れてゐてそれを傳へれば河原へ上りられ相だつたが丁度瀧壺の上で幹の先が終つてゐる。

佐々木、望月の兩君が右の壁上へ偵察に行く、餘り香しい顔はして歸つて來なかつたが兎に角登つて見る事にした、今度ははじめからアンザイレンである。河原から見える所、ほんの僅かであるが、そこまでは苦勞はないが、その上に瀧壺へ一直線に落ちてゐる狭い薙がある。手懸りも殆どなく一寸閉口したがザイル捌きのジツヘルな二人の間に這入つてゐ

るのだから不安はない、之が一間許りのトラヴァーズで其の先に急峻な狭い尾根で毛は生えてゐるが坐る場所がない、下を覗くと河原は見える、然し其處まで大體何米突あるのか見當がつかない、こういう時に寫眞の距離計でもあると便利だと思つたが二十米突以上計れるのは餘りないとの事だから矢張り経験で行かねば駄目である。細いガリーが河原まで行つてゐる。あすこまで下りれば先は心配のない河原らしい、惡谷との合流點も近い様だし、谷の形、林相から云つても大體の見當ではあるが惡場がある様にも思へなかつた。兎に角、三人とも降りて了ふのは萬一の場合手數なので佐々木君にザイルをダブルにして下降して貰ふ事にした。大して太くない二、三本の雜木をピンにして彼は降りて行つた。ガラ／＼と石が落ちる、その内に河原へ届いたと見えてザイルを外して上へ合圖した、十五米突丁度一杯で

ある、序だからと思つて私は彼に河原傳ひにも少し下つて見て来る様に頼んだ、暫らくして戻つて來たが大丈夫だといふ、そこで私は次に荷を背負つたまゝアブザイレンする、成程十五米突一杯だ、之よりザイルが短かかつたら一寸仕末の悪い所である。運が良かった、次に佐々木君の荷を下ろす、それが途中で引つかゝつて了つたので取りに行かふとした途端に荷が落ちて來て彼は右手の親指をむいてひどく血を出した。が望月君も無事降りた。ザイルは叮嚀に捲かれて佐々木君のリユツクの上に載せられる。

(十時十五分)

右岸の小澤が瀧になつてゐるのを見てから十時三十五分廣い河原に延び／＼と休む、もう怎うやら瀧からは放免になつたらしい。十一時まで休んでその儘河原を行くと左から大きな澤が合流してゐる(十一時十分)。奥を見ると直ぐ又二股になつてゐるらし

い。右が寶劍のカールへ行く澤で左がワル谷といふ奴だらう。兎に角濁澤の下降は之で無事終了したのである。檜尾岳三角點から二ノ澤泊場まで二時間、そこからワル谷出合まで四時間、合計六時間あれば濁澤は悠つくり下降出来るのである。然し普通の人であつたらまづザイルなしでは無理である。

之から愈々東向きになつて歩く譯である。等高線數字の記入してある尾根の東側の谷(横川)まではどつち道河身を歩く心算でゐた方がいゝ、二、三尺に切つた太い材木が川の兩岸の所々に積重ねてあつたり、ケルンがあつたりして段々人里に近い事を思せて來た。横川に至る手前左岸の長細い枝の先に白いものがぶら下つてゐたので何かと思つて近寄つて見たら赤穂山岳會と書いたトタン板であつた(十一時四十分)。その近所から徑でもはじまるのかと探したが何もなかつた。此の邊へ來ると石が大きくなつ



中御所谷（尖峰は伊奈川ノ頭）

吉澤一郎

て河原歩きも中々樂ではない。

暫らく下つて行くと川の大岩の上に葎やら布團やらが幾つも干してあるのが眼に著いた、ハテナ山窩でも来て住んでゐるのかなと思ひ乍ら急いで下つて行くと俄然立派な小屋である(十二時二十分)。荷を小屋の前に置いて中へ這入るとむくつけき親父さんと若衆が二人で、何かモソ／＼やつてゐた。「今日はいい天氣ですね」と挨拶し乍ら坐り込む、向ふでは呆氣にとられて「あなた方は何處から來なすつたね、寶劔の方からかね」といふから「いや、濁澤だ」と答へると「偉い衆ぢや、あすこは土地の獵師だつてへえらねえ所だ、よくまあ降りて來なすつたね」と一應感心して呉れた。茶を入れたり黒砂糖を手のひらへ載せて呉れたりし乍ら小屋掛して山へ這入つてゐる譯を話して呉れた。

此の小屋の位置は大體一九〇三米突の西南の窪の

本流に面した平に當ると思ふ、彼等は今年の五月頃から王子製紙のバルブ原料となる材木を切り出しに十二、三人で來てゐるのだと云つてゐた。雨露以上のもので相當凌げると思ふが、笹ダニと蚤が共棲してゐるらしいから氣をつけないとひどい目に遇ふ。地圖の取入口まであと三十町だといふのですっかり安心する。

一時小屋を後にして、今度は人の拵らへた完全な道を鼻唄交りで下つて行く、到々出て來たといふ安心がすつかり氣を軽くして呉れたのだ。十分程して又同じやうな小屋があつた、それから又十分程でワル谷(地圖の檜尾の檜の字の北にある谷)の直ぐ下流に架る釣橋に來た。之は五月の水害の時崩崖の爲め破壊されたので今は修繕中で人夫が澤山集つてゐた、橋下の岩蔭で晝食をとり二時十五分に出掛ける。丸木橋を渡つて元の釣橋の上に這ひ上りあとは

坦々たる山道を（時々棧道があつたが皆確りしてゐた）何處までも下つて行く、河原傳ひや瀧下りから恁ふいふ所へ出て來ると全く道の有難味といふものを泌々と感じるものである。二時三十分道の分岐點へ來た、下りにはいゝが登る時には奥へ向つて左をとるべき所である。時に上流を見上げると寶劔や伊奈川の頭の邊りが高く高く午後の陽に霞んでゐる、新緑の頃或は初秋の候には此の邊の山旅も決して悪くはないと思ふ。二時四十五分又分岐點へ來たが之は直角に交つてゐるから間違ふ事はあるまひ、之からそろ／＼道はデグザグになつて見る見る下る。今までは大體一四〇〇米突の等高線に沿つて來て北御所谷（一九〇三米突の東の大きな澤）の出合の南にある尾根上の平邊りから本當の下りがはじまるやうになつてゐる。こうして取入口の橋に著いたのが三時丁度であつた。

もう之からは車も通る大道である、伊那の里が見える、丘が見える、田も見える、今度の山旅も遂に無事だつたのだ、「駒ヶ岳登山道」の大きな看板から下は之で三度目のお馴染である（三時四十分）。光前寺への分岐點からのあの坦々たる馬車道では時節柄靴の減る事が一番心配になつた。五時に赤穂へ著き、精養軒とかいふ名前だけは素晴らしい洋食屋へ這入りカツライズとビールで祝杯をあげ六時半かの下り電車で「伊那大島」へと向つたのであつた。

（一三、九、二四）

鳥 甲 山

中 村 謙

苗場山から平太郎尾根を降つて上ノ原の部落に近付くとき、或は岩菅山から裏岩菅山・烏帽子岳を縦走して笠法師山の下りにさしかゝるとき、誰れしも眼前にそゝり立つ鳥甲山トリカブトの豪快な風姿を望見して痛く心を牽かれぬものはないであらう。

鳥甲山は南北の二峰より成り、北峰は海拔二〇三七、六米にして、南峰は一九四四米。いづれもその東面は見ると凄じい岩崖となつて、覆ひかぶさるやうに中津川に臨み、盛夏尙殘雪を藏してゐるところさへある。北の峰は赤褐色、南の峰は白色を呈して

ゐるので、秋山郷の人々は赤嶺及び白嶺の名で之を呼んでゐる。

古老の言に依れば、昔は村の人々で、この山に登る人もあつたが、現今では全く絶無に庶く、従つて山中の事情にも疎いためか、日夜之を仰いでは、恐しい山、近寄り難い山として徒らに神聖視する傾向がある。

一般岳人の登攀史を播いても、これ亦殆どその記録なく、僅かに左の數氏に依つて登られてゐるに過ぎない。

昭和九年七月廿四日、慈大の山口敏彦・西末廣・岩本芳男・中村欣次郎の四氏が、白嵩の岩壁を目指し白澤にベースキャンプを張つて待機中漸く好天氣をキャッチして之が登攀に成功し、山中にビヴァークの上、翌朝下山（ヨツホ第三號記載）。

同年八月廿一日、青山學院の立花勝郎・藤井四郎・佐野良夫の三氏が小赤澤の人夫安部房芳を伴つて赤澤を遡り、狩倉の附近より白澤との合尾根を攀ち、根曲竹と惡戰苦闘の末、小赤澤より十二時間を要して赤嵩（最高點）に登頂。歸路は再び合尾根にとつたが、途中で日暮れて白澤に露營。翌朝再び尾根を越して赤澤より和山温泉に到る。

同年九月上旬、雲尾東岳氏（曳場山頂遊仙閣主人）が單獨で、白澤に入り、萬年雪の附近から右手の赤澤との合尾根に取付き、昔の銳目を辿つて登られたが、藪漕ぎに意外の時間を費し、未だ主稜に辿りつ

かぬうちに日暮れ、止むを得ず往路を引き戻られた。

昭和十二年八月十五日、私が和山温泉の關谷清君を伴つて白澤を澤なりに遡つて赤嵩と白嵩との鞍部に達し、それより根曲竹の密藪を泳いで赤嵩の山頂を極め、歸路方向を誤つて、兼ねてからの宿望であつた釜川を下降、途中金山澤出合附近で露營の上、翌日北野に出で、それから百ノ木・日出山・前倉・大赤澤・上ノ原を経て和山に歸着。

これが現在私の手許に判明してゐる記録の凡てである。之を以つてしても鳥甲山は如何に淋しく取り残されてゐる山であるか判る。

白砂川を遡る

鳥甲山から東面に流出する川を總稱して白砂川シラスと呼び、その支流は北から順次に、瀧澤・赤澤・白澤といふ。瀧澤は入口狭く、數個の連續せる小瀧をか

け、赤澤は鳥甲山三角點の直下に赤褐色の岩壁を持つてゐる。この兩者に較べて白澤は最も廻り易く、陸地測量部の人々は、その中途、萬年雪のある附近より右手の撫付きの尾根に取付き、之をどこまでも登つて主稜に出たのだそうで、爾來和山の人々はこれが鳥甲山への捷徑だと考へてゐる。然し立花氏や雲尾氏の言に依つても明らかな通り、この尾根には根曲竹が密生してゐて登高は容易でない。それに引きかへ、私たちのつめた白澤は、雨あがりでない限り、水が尠く割合に登り易いから、寧ろこのルートをとつた方が得策だと思ふ。

和山温泉から中津川の川原に降り、對岸に白岩シライバを仰ぎつゝ右岸の崖符號の盡きる附近までゆき、こゝで對岸に徒渉。少許藪をこいで上の段にのぼると、一寸した耕作地があり、そこに野良みちが通じて居る。これを登ること十數分にして所謂「電車みち」

(切明の水力工事のときトロ線を通した路で、俚人は斯く呼んでゐる) に出るから、右折して北進すると、やがて白砂川のほとりに達する。こゝから先きは、どこまでも澤なりに廻行をつゞける。出口の附近は赤茶けた石が、ゴロ／＼してゐるが、赤澤を見送ると急に川底が白くなる。

入口から四十分ほどで白崙の直下、萬年雪のところに通じつく。願れば苗場山は中津川の溪谷をこえて彼方東微北にあるの特長ある山貌を擡げてゐる。

こゝで澤は二分し、本澤は稍右手に曲る。初めは多少の水があるが、十分ほども廻ると、伏流となるものか、既に水なく、やがて磊々たる石の歩きにくい涸澤となり、傾斜も頗に加はる。

萬年雪のところから三十分あまりも登るころ、左手から、かなり大きな涸澤が一本合流する。仰げば白色と赤褐色の岩壁が左右に聳え、雪融けか豪雨の

あとには素晴らしい大瀧を懸けることが容易に想像される。この邊より本澤は更に心持ち右へ曲り、傾斜は益々加はる。

二、三十分で澤が盡きると一丈にもあまるイタドリとフキの藪に入る。右は熊笹、左は岩壁。懸命にその中間の草藪を漕いで登るうちに、四十分あまりで禿地が現はれる。これから赤嵐山と白嵐山との鞍部までは猛烈な根曲竹の密藪で距離は短いが少くとも十五分や廿分はかかる。

鞍部の附近は熊笹を下生えとしたモミ・ツガ・白樺などに覆はれてゐて、痩せ尾根ながら極めて歩き易い。然しそれもホンの束の間で、再び丈餘に達する根曲竹の密藪に入り、藪漕ぎの悪戦苦闘が四、五十分も繼續する。そうして漸く楽になつたところ、鳥甲山の頂に辿りつく。

頂上は美しい小笹に掩はれ、中央には二等三角標

石が安置してある。晴れてさへ居れば、素晴らしい展望が得らるゝことであらう。赤嵐山にせよ白嵐山にせよ、東面は見るも恐ろしい岩崖だが、西面は瑞瑞しい黒木に覆はれてゐて全く別の山のやうに感じられる。

釜川を降る

五萬測圖「苗場山」を播いて鳥甲山を點檢するとき、誰れしも釜川（大正元年版の測圖には志久見川とある）に着目するであらう。釜川は、その名に示す如く、大小幾多の釜を有し、鳥甲山を取巻く溪谷のうちで最も長く、最も深い澤である。

赤嵐山の三角點から東北に向つて一丈にもあまる物凄根曲竹の密藪を足下に踏みにちつて降ること小一時間にして、釜川の源流に辿りつく。

釜川の源流は特に之をエビリユウと稱し、處々に

小さな滑瀧が懸つてゐる他は、緩傾斜の平凡な澤が蜿々とどこまでも續くに過ぎない。かくすること約一時間あまり、澤は突然百米もあらうかと思はれる岩壁に達し、素晴らしい滑瀧の連續となつて落下する。こゝは右側の草付きを降つたが、かれこれ、半時間あまりもかゝつた。

つゞいて相當な瀧が連續して現はれる。いづれも瀧沿ひに降れるが、最後にぶつかつた二段の瀧だけは萬一を慮つて右手を高捲した。

これより大小の瀧を越へ、いくつかの釜を送迎して一時間ほども降ると、左手から本流と殆ど同じ位の水量をもつた澤が合流する。△一六四二・三米峰の東側を流れる無名の澤だ。澤は合流點の直ぐ下で、目測五、六十米の見るも恐ろしい斷崖に逢着して、見事な飛瀑をかけてゐる。勘五郎瀧といふ。これこそはロープなしでは絶対に降りられない。

右上の段にのぼる。そこには屋敷の人々の狩小屋があつた。そうしてかすかながら踏跡が右岸を高く捲いて上つてゐる。時々明滅する鈍目をはずさないやうにして道を急ぐ。美しい撫付きの段を越し、小澤を四つばかり涉つて、對岸に細いが長い瀧を望見するころ本澤へ降る（狩小屋から一時間十分）。

間もなく右から小澤が瀧となつて落ちてゐるところを過ぎ、本流がかなりの瀧を懸けてゐるので左岸に逃げて一寸した小曾根を乗越し、それから三十分ほどで金山澤の出合に達する。私たちはその五分ばかり手前で日が暮れた爲め露營を餘儀なくされた。

金山澤はこれ亦鳥甲山の頂上直下から流れ出る釜澤の一流流で、合流點から少し上流に瀑布があり、その附近には鱒區がかけられてゐるので、山麓の北野から細いながら歴とした小徑が通じてゐる。私もそれに氣付かなかつたので、鯀つりの踏跡に従

つて澤なりにどこまでも降つて行つた。

獨標一七〇米から西南に派出する記號尾根の末端へ右岸から瀉ぐ澤を五本木ノ澤といふ。地圖にある通り、高倉山の東腹を捲いて屋敷に到る片點線に達する細徑が通つてゐるそうであるが、我々慣れぬ者が搜したのでは容易に發見出来なかつた。

左に五才川を見送り、メシモリ澤との合流點を過ぎると、川は十米近い斷崖に逢着して飛瀑を懸け、有名な赤釜を構成する。私たちは之を避けるために左岸の藪に入つたが、篠が密生してゐて中々通りにくかつた。約四十分の後ホウシ澤の一寸手前へ降りそれから川原を傳ふこと大凡十五分。再びトツ釜と稱する釜に直面して之を逃避し、左岸に登つてみると、豈や計らん、金山澤からの徑がそこに通つてゐるではないか！早速これを進むことにした。

ソトセノクラ・オチセノクラ・栃平・ノセ（澤）

を送迎しつゝ崖みちを通り抜けて、だら／＼上りに登ると、緩傾斜の斜面に桑畑が現はれ、次で粟・豆・蕎麥の畑と小さな茅屋とが現はれる。獨標九八四米から東微北にひく小曾根を乗越す地點である。なんでも、この邊の下の本流には釜川第一の瀑布たる大釜があるそうである。

路は小曾根の山鼻をめぐると蛇澤の源頭をまいて獨標九八四米から北に延びた尾根上に達する。こゝには鬱蒼たる杉の森があり、右尾根通しに北野に通ずる小徑が岐れてゐる。

左の路は地圖の通り、更に北微西に走つて耕作地を過ぎ、極野ニテと中野の中間に下り、日本三天神の一と稱せらるゝ、北野神社（正暦五年勸請、元祿八年造營）の社前を通つて北野の部落に達する。これから汽車に乗るには長瀬・宮野原を経て飯山鐵道の森宮野原驛に出るのが順路である。

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて（一）

望 月 達 夫

- 一 まへ が き
- 二 生 ひ 立 ち
- 三 第一回ヒマラヤ遠征（一九〇七年）
- 四 第二回ヒマラヤ遠征（一九〇九年）
- 五 第三回ヒマラヤ遠征（一九一一年）

一

若し人がヒマラヤの峻峰雪嶺に興味を有し、過去に於て其處に刻みつけられた多くの先蹤者達の足跡

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

を、注意深く顧るならば、一九〇七年八月、彗星の如くヒマラヤの山地に現れ來り、一九二一年に至る十數年の短き期間に七回に垂とするエキスペディションを敢行したケラス Alexander Mitchell Kellas の存在を多大の興味を以て凝視するであらう。然もケラスに關して書かれてゐる文字は極めて少く、^{（註一）}又彼のものした文章も、その廣大な足跡に比すれば甚だ少い時、彼の人となり、そのヒマラヤへの數々の營みについて、とりわけ知り度い氣持にかられるのである。

ケラスの山に於ける閱歴も、他の英國登山者達のその如く、先づ故郷の山々に於て育まれ、次いでスイス・アルプスに延び、轉じてヒマラヤの山岳地へと向けられたのであつた。スイス・アルプスに於ける彼の足跡は然しながら、殆ど明確には知られてゐない。吾々はそれについて只、後日彼が記せるヒマラヤの紀行文の中で、ヒマラヤの山々と比較してゐる場合に於てのみ、僅かに想像し得るのである。^(註二)おそらくは、當時既に西歐のブレイグランドと化してゐたアルプスの山地は、彼の如く地味な登山者の氣持に、何かちぐはぐなものを與へたのであらうかアルプスに於ける彼の登山もかなり多いと思はるゝにも拘らず、それに就いて彼は何等書きのこしてをらないのである。そして一度ヒマラヤの荒削りな、人臭を全く感ずることの出來ぬ雪嶺に直面するや、其處に彼の本統のハイマートを見出したものゝ如く、

『生まれながら彼に備はつてゐた靜隱な執拗さを以て』次から次へと、シツキム *Sutcliffe* の或はガルワール *Gurwal* の處女峯に立向つたのであつた。

ヒマラヤに於ける彼の足跡は主としてシツキム、次いでガルワールに限られてゐたが、殊にシツキムに於ける彼の足跡は、殆どその全區域の山群に及んでゐる。そして是等のシツキム及びガルワールに關しての彼の記述は、後日ヒマラヤに立ち向ふ若い時代の人々を裨益する處甚だ大であつたと想像される。

それにも増して彼のもたらした收穫は、シエルパの人々 *Shorpa Nepalese* をクローリーに使ひ、且彼等の強靱な肉體と意志とが困難なる登攀に好適せることを發見し、その幾人かを立派な登山者に仕立て上げたことである。今日ヒマラヤへ足を踏み入れる者が齊しくシエルパのクローリーを使用し、又彼等なく

しては多くの場合ヒマラヤ登山が不可能に近いとさえ云はれてゐる時、ケラスの功績は更に高く評價せられねばならないであらう。因に彼の追悼文に記された次の數言は、今日に於てもそのまゝあてはめて敢て不都合はないと信ずるのである。

『ヒマラヤの或る地方に關して、ケラス博士の如くかくも完璧な實際上の知識を有した者は殆どなく、

又彼が印度の山地に於て、只グルカ (Ghurkas) (譯註

・此の場合シエルバとみて良い) の人々だけと共に成遂げた、あの様に多大な仕事を成し得た者は曾て存在しなかつた。』(註三)

又ケラスは彼の専門なる生理學の方面に於て、殊に高地に於ける酸素の使用、又高度の肉體に及ぼす影響等につき寄與する處多くあつたが、之に關しては後述するであらう。

× × ×

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

ケラスの山に對する態度が何んなものであつたか、之を明確にゑがき出すことは、かなり困難であるが、しかもそれは、彼の述べてゐる遠征の紀行文中に於て、おぼろげ乍ら知ることが得よう。只彼の四回目のシツキム行の紀行文の冒頭に、幾分まとめて書かれてゐる故、左に譯出してみよう。

『 'He who first met the Highlands swelling blue, Will love each peak that shows a kindred hue.'

この美しくも妙なる對句^{クワイフ・レット}に於て、詩人バイロンは、おそらく吾々の誰もが心を動かすであらう言の葉もて、より低い山々 (the lesser mountains) (註四) のもてる魅惑を表はして呉れてゐる。然も、この詩人のもてる視野は、長きに亘つて必ずしも充分に廣いものではない。假りに人がより低い山々の魅惑を経験

したとするならば、ついで、それらの人々にとつては雪と岩との偉大なる降々の、即ち巨大な山岳の魅惑こそ、おそらくはもつと力強いものとなつてくるであらう。そして假りに、探險と云ふが如きものが例へばヒマラヤとかロツキイとかの舞臺になし得るゝならば、之等の山國の呼び聲は、全く打ち勝ちがたい誘惑となるのである。

若し吾人が、この光輝あるたのしみの真相を、僅か數言を以て言ひ表はせと求めらるゝならば、吾人は、正しく友情と云ふ如きものに屬してゐる様な、謙虛な心持をもつて敢て次の様に説明するであらう。登山とは、最も廣義に解するならば、この世界に於て一番哲學的フィロソフィカルなスポーツであると。只此處では、その眞實性の重要な點に觸れるのは避けようと思ふが——（因に諸氏はアルバイン・クラブの若干の耆宿達のものせる文章中に於て、かゝる言辭を支

持する卓越せる又雄辯な論據を見出さるゝであらう）——たゞ單に次の點だけを注意してをかう。

即ち、登山が哲學的な追求である限り、それは算へきれない程の魅力ある問題を提出するものである。（註五）

右の文章に續けて彼の第四回目のシツキム紀行ははじまつてゐる。以上は甚だ簡單ではあるけれども又彼の登山觀を知るの一助ともなるであらう。

× × ×

扱て私は先づ彼の生ひ立ちについて簡單に述べ、次いで、ヒマラヤへの數々のエクスペディションにつきいさゝか詳述しようと思ふ。

（註一）ケラスのことを述べたものとしては次の文章がある。

“Alexander Mitchell Kellas” by J. N. Collie (In Memoriam) — (A. J. Vol. XXXIV, No. 223 pp. 145 — 147)

"Dr. Alexander M. Kellas" by W. G. (In Memoriam)
—(Scottish Mountaineering Club J. Vol. XVI, No. 92
pp. 74—76)

(註二) 後Hケラスの書いた手紙や文章中で知れること

は、彼がフルカ Furka オーベルアルプ Oberalp ジュリアー Juliaer 等の峠を越へ、又モン・ブラン (グランド・ミューン Grands Mulet より)、ブライトホルン (Leichenbretter 小舎より)、フィンステルアールホルン (Hugi Sattel より) 等に登つたと思はれることである。

(註三) S. M. C. J. Vol. XVI, p. 74

(註四) ケラスは此の the lesser mountains と云ふ文字につき次の如き註釋を附してをゐる。

『私はより低い山と云ふのに the lesser mountains を用ひたが、その理由はラスキンの用ひた inferior mountains では誤解をまねきやすいと考へたからである。つまり低い山々も、審美的見地よりすれば何等劣等性 (inferiority) はないからである。 (cf. Climbing on the Himalaya and other Mountain Ranges; p. 215)』

(註五) A. J. Vol. XXVII, pp. 125—126.

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

II

スコットランド東海岸の港市、アバーデイン Aberdeen に於てケラスは生れた。然し乍ら彼の生年は詳かでない。^(註一)種々なる點から判斷するにおそらくは一八七〇年代に誕生したものであらう。

彼は先づ Aberdeen Grammar School にて教育を授けられ、次いでエディンバラ Edinburgh の The Heriot-Watt College and University に於て研究を積んだ。専攻は勿論化學、生理學であつたらう。更に London University に於ては Bachelor of Sc. 及び Doctor of Sc. となり、海を渡つてハイデルベルヒ Heidelberg の大學に學んで、Philosophic Doctor の稱號を得た。之等學徒としての彼は、彼が山に對すると等しく、非常に熱心な態度で研鑽を積んだことは想像に難くない。

更に彼は University College に於てラムゼイ卿 Sir W. Ramsay の助手として働き、後又 Middlesex Hospital 醫學専門學校の化學の教師ともなつた。彼がヒマラヤへ足を踏み入れたのは、この時代のことであらう。歐洲大戰の當時はロンドンに於て科學者として卓越せる手腕を振ひ、その仕事の餘りにも烈しかつた爲、一九一九年から翌年へかけての冬は、遂に病を得て故郷アバーデインに歸省した程であつた。然も病癒ゆるやシツキムに入つて一九二一年迄滯印し、更に同年第一回エヴエレスト遠征隊の一員に選ばれて、勇躍チベットの地に足を入れたが、度重なる過勞の結果であらうか、遂にエ峯の山麓に於て永眠したのであつた。

アバーデインのグラムマー・スクールの學生時代から彼の登山生活は始められた。彼は先づアバーデインの西方の山岳地帯に目をむけ、デイ・サイド

Deeside 源流の山々を跋涉し、或は又ロツホ・アヴオン Loch Avon の源流地帯なる Thelader-stone に於ては、屢々數日間も露營をし續けたのであつた。かくしてケアンゴーム Cairngorm 山群に於て彼の足跡の至らぬ場所は殆どなくなつたのである。

若い彼の能力に相應した故郷の山々から充分な滋養分を吸収した彼の登高精神は、更に止まることなき生長をとげ、スコットランドの各所の山地へ、彼は長大な然も根氣強い登山を繰返へし、轉じてスイス・アルプスに足を延ばしたのである。そしてアルプスに於て、雪・氷・岩に對する技術を獲得したのであつた。

× × ×

ケラスがスコティッシュ・マウンテニアリング・クラブ (S.M.C.) に入會したのは一八九八年であり、又彼の弟の Henry Kellas——辯護士であつた——

も同會の會員であつた。ケラスがアルバイン・クラブに入會したのはそれよりも更に後年のことであらう。^(註二)

(註) 此の章は主として前章(註一)に掲げた文獻によつて記した。

(註一) アルバイン・ジャーナルの追悼欄には普通故人の生年と歿年とが明記されてゐるが、ケラスの場合——前章(註一)の文獻——にはそれが記されて居らず又 S・M・C・J の同欄にも記されてゐない。

(註二) Alpine Club Register の既刊號(現在第三卷迄——一八九〇年迄に入會した人の分——發行さる)にはケラスの經歷は掲載されてない。故にケラスの入會したのは一八九一年以後のことである。

三

スコットランドの山岳地帯及びスイス・アルプスに於て幾何かの基礎的登攀をなしたケラスは、一九

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

〇七年始めてヒマラヤの地に彼の足を入れたのである。彼が何時頃からヒマラヤを望み始めたかは詳かにすることが出来ないけれども、十九世紀の末葉以來既に數々の遠征がヒマラヤに於て試みられた事實を思ひ合すならば、山に對する強烈な愛着と人並みはずれたエネルギーとをもつた彼が、早くより世界の屋根に大志を抱いてゐたことは想像に難くない。殊に彼と生國を同じくする人々の遠征、例へばコンウェイのカラコラム探險(一八九二年)、マムマリ一のナンガパルバート(一八九五年)、フレッツシュフイールドのカンチエンデユンガ一周(一八九九年)、ロングスタフのガルワール遠征(一九〇五年)等は彼を強く刺戟したものだと思はれる。

彼の一九〇七年の旅(彼は此の年の遠征を特に *tour* と書いてゐるが)に關しては、其後の遠征と同様ほんの僅かの記録しか残つて居らない。一九一八

七

年十一月十一日附、アルバイン・ジャーナルの編輯者たるフアラー氏 Captain Farrar 宛の手紙及それに附随せるメモに從つて敘述を進めてゆかう。

『一九〇七年の旅は準備的な遠征としては充分興味深かつたのでありますが、私はそれを登山遠征の一つとして決して算へ上げたくありません。なされた登攀は量に於て洵に微々たるものでありますから』と彼は謙遜にも記るしては居るが、而も當時の遠征として、又主要パーティが彼一人たることから考へて決して閑却し能はざるものであらう。

一九〇七年、如何なる通路によりてかは全く不明であるが、夏スリナガル Srinagar に現はれ、八月三日のこと、豪雨の後三人の者と二頭のボニイを従へ午後四時に出發して、ビル・パンジャール Pir Panjal の峠を越へグジエラート Gilgit に至らんとす。旅をはじめた。

八月五日 シュビヤン Shupyan 近くに至つたけれども、ジエルム Jelum の支流たるレンビアラ Rumbhara 川を渡ることが出來ず、滞在を餘儀なくせらる。時既にモンスーンの盛時に當り、河川の徒涉にケラスは非常に苦しめられたものゝ様である。殊にレンビアラはその中で一番つらいものの一つであつたらしい。

八月六日 この川を徒涉して右岸のシュビヤンに至つたけれども、ヒルプーラ Hirpura 附近の橋が落ちて居るとの報に接し再び徒涉してもどつてきた。彼は此の日のメモに Entire day lost. と書いてゐる程である。

八月七日 此の日ケラスはビル・パンジャールの高所キヤムブに一泊した。それはアリアバド・セライ Allahabad Sarai の東方二、三哩の地である。此の日の峠の眺望につき彼は、『東の間なれども北東方の

素晴らしき眺望』と記してゐる。又手紙中にては、このパンヂャブ・ヒマラヤ Punjab Himalaya 周邊の旅を如何にも不満に記してはゐるが、それにもかゝらず、峠頂上にキヤムプをし、更にカシミールの溪谷 Vale of Kashmir と、ヌン・クン Nun Kun 及ナンガ・バルバート Nanga Parbat 方面を偵察する爲に約一五、〇〇〇呎の高峰に登つたと記してゐるのは恐らく此の日のことであらう。

八月八日 一一、四〇〇呎のビル・パンジャール峠を越へてボシアナ Poshiana に至つた。此の峠の頂上は平坦で草地をなし、又霧と雨とに見舞はれた。この峠は六月か又は九月には非常に心地良き思ひを與へるであらうと彼は言つてゐる。此の日の徒渉にあたり、あぶなくボニイ一頭を失ひそうになつた。

八月九日 ボシアナを去つてバランガラ Baran-galla に至つた。此の間には数々の川があつて皆等し

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

く徒渉に苦痛をなめたらしい。ボシアナに於ては土民の反對にあつて、彼の案内者共は渡河が可能になる迄数日間滞在せねばならぬと云つたのであるが、ケラスが斷然前進を主張したので、案内者共は仕方なく七人の臨時雇を求めて、その力を借りて渡ることを得たのであつた。

八月十日 この日豪雨にも拘はらず、ラタン・ピル Patan Pir Pass (八、一〇〇呎) を越へてタンナ・マンディ Thanna Mandi に至つた。

八月十一日 ラジャオリ Rajauri に至つた。此の日も亦苦しい徒渉があり、それは又相當に深いものであつた。彼は good place for swim と皮肉を云つてゐる。此の徒渉に於て彼は危く溺れかゝつたのである。がこれでさへこの川としてはノーマルな状態の最も容易な徒渉であるらしい。而も此の前日三人の村人は徒渉に際し溺死してゐた。天候が悪く山や

川の探究をなす機會はなかつた。

八月十二日 この日午前五時に出發し大急行の前

進をなしてナオシエラ *Nashera* の休憩所 (*rest-house*) に達した。この日雷雨があつた。又案内者も調子を悪くしたので十三日は彼と共に此處に残つた。そして全快してから彼をスリナガールに歸へしてやつた。

八月十四日 この日もアデイタクの山 *Atitack Hills* を越へて、ビムバー *Bhimber* へ大速力の前進をした。

八月十五日 この日午前三時發、カリアン *Karian* への大速行をなしたが、カリアンに於ては汽車に間に合ふ事が出來ず泊つて了つた。

かくして八月十九日、ダージリン *Darjeeling* にやつてきたのである。

パンヂャブ・ヒマラヤの周邊山地への彼のはじめのヒマラヤ入りは以上の如く約二週間に亘り、又

彼が餘り満足して居らぬ如く單なる峠越への旅に終つた。而もグジェラートへ行かんとせし豫定も實現出來なくて、カリアンに出てしまつたのであつた。けれ共此の基礎的旅行は、おそらく彼にとつてかなり有益なものであつたのではあるまいか。アジアの山に不慣れな彼にとつて、かゝる比較的低い山地の跋涉こそヒマラヤへの第一歩としてむしろ着實なものと云へるであらう。

ダージリンに來た彼は、休息もとるやとらず再びシツキム・ヒマラヤを目ざして出發したのであつた。

同年八月二十二日 カンチエンジュンガ近傍を訪れる爲にダージリンを出發す。この時のメンバー及裝備等については何等詳細に述べられてないが、二人の歐人ガイドを伴つてゐたことは事實である。(彼等二人のガイドは八月十九日ダージリンに到着した

ものである。)

八月二十六日 ガントク Gangtok に至り、卅日チ
ュンタン Chungtang に、三十一日にラツチエン
Tachen に達した。九月二日ラツチエンを去つてゼ
ム Yemu 川を溯り、同月七日カンチエンヂユンガの
東北方八哩なるグリーン・レーク Green Lake に到
着した。

翌八日シムヅ Simvu (二二、三〇〇呎)に二人の
歐人ガイドと第一回の登攀を試みたけれ共、一九、
〇〇〇呎にて吹雪の爲退却を餘儀なくせられたのであ
る。尙ジエオグラファイカル・ジャール、一九一二
年九月號には『スイス・ガイドを伴ひしが、満足な
結果を得られず』と述べられて居る由。

同十日 ガイドを伴ひシムヅを再度攻撃す。約二
〇、七〇〇呎にて雪の状態危険なる故ひきかへした。
(註——最初その地點は二二、〇〇〇呎なりと思は

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

れたが、それは北峰が最高峰なりと云ふ假定に基く
ものなるが、實際は然らずして、最高峰は南方に位
置す。此の峰は此の行中見る事は出来なかつた。)

同十二日 ガイドを伴ひてネパール・ギャツプ
Nepal Gup (二二、〇〇〇呎)を試む。霧深く又雪
降りし爲、一八、〇〇〇呎から引返へした。

翌十三日 ローナク Lhonak として出發し、十四
日タンチャン・ラ Tangchang La を越へ、ツムラツ
チエン川 Tumrachenchu を渡り、十五日、テ・ラ
Tela La を越へ、ローナク地方に至つた。十六日よ
り廿日迄の五日間ローナクに於て跋涉をなしたが、
是も詳細は不明である。二十一日に再びテ・ラを越
へて戻り、二十二日は吹雪の爲、ツムラツチエン川
の近くにて一泊し、二十三日に古タンチャン・ラ
(新らしい方の西方二哩)を越へグリーン・レーク
に歸還した。

此の日山には新雪が見られたと云ふ。

九月二十五日 グリーン・レーク上方の高峰（一七、〇〇〇呎位）に登る。恐らくカンチエンデユンガ附近の偵察の爲であつたらう。

二十七日 再びネパール・ギャツプを試み一九、〇〇〇呎の地點に至つたが、クレバスの爲前進を阻まれて了つた。

三十日 ガイドを伴ひ三度シムヴを試みた。午前二時に出發、月光をあびてゼム氷河を横切り、此度こそはと張切つたものであらう。二〇、〇〇〇呎に至るや、雪は深く且軟かくて、而も天候は悪くなつて了ひ、登頂は許されなかつた。かくして十月九日ダーズリンに歸着し、彼の第一回のヒマラヤ行を終つたのである。

彼の此の行に於てはビル・パンチャールに於て器械のガラスを破損せしめた爲、殆ど科學的成果を收

める事が出来ず、又彼は歐人ガイドよりも、ネパールのクীরीの方が餘程高所に於てアト・ホームであることを發見してゐる。故に彼は後日歐人ガイドを絶対に用ひずネパールのクীরीのみを用ひたのであつた。又この行の詳細はフレツシユフィールドの書物（D. Freshfield: Round Kangchenjunga）に述べてゐる以上に出てゐない故何等附言する必要はないと前記の手紙を結んでゐる。

彼が其後屢々シツキム・ヒマラヤを訪れた處をみれば、此の地方を非常に好んだことであらうし、それは又第一回の印象が殊に良かったものであらう、と想像せらるゝのである。

（註一） The late Dr. Kelas's Early Expeditions to the Himalaya (A. J. XXXIV. pp. 408—414)

ケラスの第二回ヒマラヤ遠征は第一回を過ぐる二年後一九〇九年に行はれた。此の遠征に關しても亦のこれる記録は至つて僅少である。吾々は唯一九一九年四月十日附の手紙（前と同様キヤブテン・フアラール宛）によつてその概要を知り得るのみである。^(註一)

この手紙は前のものより、興味があるので左に全文を譯出してみよう。

親愛なるキヤブテン・フアラール殿

書面を以て、私が第一回のヒマラヤ遠征と名附くる處の——何故ならば一九〇七年の印度行は單なる旅行でありましたから——行程記録を御送附申し上げます。私は下記する概要に、それ程多く附言

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

する必要はないと存じます。私がダージリンに到着しました時、ホテルの支配人たるリギ^(註二)氏はその週の終りに、彼の月餘の休日を利用すべく出發せんとして居り、且彼は相當な登山をなさんことを望んで居つたのであります。それで私は彼と行を共にすべく二日間許り待期しました。乍然リギ氏は、たやすく高度に影響されて了ふことを知りました。勿論彼は愉快なる仲間であり又良き徒步家でありました。が、彼の一九〇五年のカンチンデユンガ行への参加は、高度に對しての適應性を進歩させてはをりませんでした。

貴殿は下記する行程記録中より、多くの失敗のあつた事を見らるゝと同時に、又幾何かの成功をも見らるゝと存じます。そして私はヒマラヤの積雪状態に關して、非常に多くの事を學びました。が容易なる時のみしか科學的實驗を行はなかつた

が故に、非常にハンディキャップのあることも注意されねばなりません。

此度の行で私を最も喜ばした出来事は、ランビユ・ピーク Langbi Peak (註三、八〇〇呎) の登

頂であり、これは私の最初の完全なるヒマラヤ登攀でありました。私と共にあつた二人のクーリーが二一、九〇〇呎の地點で前進をこばむした後、私

が此の登頂を完成したことは、今日でもいさゝか満足に思つて居るところであります。この登攀に於ては眞の困難さはなかつたのであります。何故ならば下部に於ては、雪深く且勞多きものでありましたが、ファイナル・ピークに於ては、雪は實に絶好なる状態であつたからであります。

先週の月曜日に、ヒンクス氏 Hinks は、私が貴殿にカメット Kamet (二五、四四七呎) への登山

(註四)

計畫を御報告するやう、申し居られました。是に

つてはフレツシユフィールド博士が今年末に貴殿に御通知することゝ存じますが、種々の理由から、御通知を來週迄に延期した方がいゝように存じます。

敬 具

A. M. ケラス

さて彼の第二回目のヒマラヤ行を、右の手紙のあとに、彼が書きつけたサムマリイに従つて述べてみよう。

一九〇九年八月二日彼はダージリンにあらはれた。そして同月七日に、リギ氏と共に、六十二名のクーリーを伴つてダージリンをあとにしたのである。勿論歐洲案内者は伴つて居ない。

十四日、チュンタンに至り、十九日にはカンチエンチャウ Kangchenju とパウハンリ Puhunri の中間鞍部なるドンキヤ・ラ Donkya La (一八、一

三一呎)を越へた。乍然彼のサムマリイによれば、何れの側より越へたものなりや明瞭ではないけれども、おそらくは、チュンタンよりラツチュン・チニ Lachungchu を溯行してモム・サムドン Mome Sandong 附近を經、南より北へ越へたものであらう。

八月二十日、パウハンリを試みる爲に、約一九、〇〇〇呎の高所に幕営を行つた。此の地點は矢張り明瞭ではないけれども西尾根か、もしくは西北面であつたであらう。翌二十一日、登頂を望みつゝあつたりギ氏は、二人のクーリーと共にパウハンリを攻撃した。彼等は二一、七〇〇呎に達したが、吹雪の爲追ひ歸へされて了つたのである。雪は非常に深く且粉雪であつたと云ふ。この日の舉には、彼ケラスは参加したとは書いてない。

八月二十二日には北へ下つて、ツオ・ラモ Tso

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

Lhamo (Cholamo Lakeのことであらう)のほとりにキヤムプをなし、それよりラツチエン・チュ Lachenchu の源流を下つて二十四日タング Tangu (二一、三〇〇呎)に達してゐる。その後寸時同所に滞在してゐたものゝ如く、それからルンナーク・ラ Lingnak La (一七、三〇〇呎)を越へてローナクのボキリ Pokiri に入つたのは二十七日のことであつた。此の時はリギ氏の他に十頭のヤクと十二人のクーリーのみしか伴つて居ない。

八月三十日にはローナク氷河の末端に天幕を張り、翌卅一日ジョンソン・ラ Tonsong La 下の高所キヤムプ (一八、五〇〇呎)に登つた、が如何なる理由にてか——おそらくリギ氏歸還の爲ならん——ジョンソン・ラには達せざるものゝ如く、九月一日にはローナク氷河右岸の低いキヤムプにもどつてきてゐる。二日リギ氏はダージリンへ歸つて行つ

た。是はおそらく同氏の休暇のきれた爲であらう。かくして彼は再び登つて、四日、ジョンソン・ラ(二〇、三〇〇呎)の頂に天幕を張り、五日には同峠を南に下つて南ジョンソン氷河と南ラムビュ氷河との合流點近く、約一九、〇〇〇呎の地點にキャンプをした。翌六日は直ちに南ラムビュ氷河を探險し七日には、カンチエンデユンガ氷河まで下り、八日にバンベルマ Pangpema 近くに天幕をはつて一泊、更に九日にはカンチエンデユンガ氷河を横斷してカンチエンデユンガの西面を隈なく偵察調査した。當時彼は既にフレツシュフイールドの書物を見てゐた筈であり、してみればフレツシュフイールドの指示せるカンチエンデユンガ登頂可能の唯一のルートたる西面に關しても讀み知つてゐたであらう。故にケラスはカンチエンデユンガ登頂を心に急がき遙々この西面の偵察に出かけてきたものと思はれるので

ある。乍然パーティーの不揃の爲か將又準備の不完全なる爲か、カンチエンデユンガには一指もそめずにその従者たる一峯を目指したのであつた。即ち、九月十一日には南ラムビュ氷河に戻り、十三日にはカンチエンデユンガの北に聳立するラムビュ・ピーク(二二、八〇〇呎)を試み、二一、〇〇〇呎の地點彼がラムビュ・サドルと呼べる一鞍部に達したのであるが、吹雪の爲退却を餘儀なくせられた。彼は是に屈せずして翌日には更にラムビュ・ピークとフリンクーン Hoongkoong (Pyramid) とを結ぶ稜上のギヤツブ二〇、〇〇〇呎——彼は之をラムビュ・ギヤツブと呼んだ——に登り、おそらく此處に一泊したものの如く翌九月十五日に遂に、ラムビュ・ピーク(二二、八〇〇呎)の頂上を踏むことが出来たのであつた。即ち南方より登つたものである。

而も彼は最後の九〇〇呎を只一人のクローリーと共に

に登つたのであつた。前述の手紙にても解る如くこの登頂を彼は非常に喜んだものであつた。(因に此後ラムビュ・ピークには誰も未だ登つては居ない。)、かくて意氣揚々十七日にジョンソン・ラを再び越へてローナク氷河に下り、その末端に幕營したのであつた。

九月十九日 ジョンソン・ピーク Jonsong Peak
を目標して彼の登攀欲は更に高揚せられた。乍然彼はその西尾根を目標して進むだを書いてゐる處をみると、或は東面の根據地から西方へ迂廻したものであらうか。而してローナク氷河の源頭に登り、又それをクロスしたと書いてゐる。或はローナク・ラを越へたものなるか。簡單なる筆跡は能く理解することが出来ない。

九月二十一日には約二二、五〇〇呎のカル附近に登つたと書いてゐるのみにて、その地點は不明なる

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

も西尾根附近であらう。翌二十二日には尾根を二二、〇〇〇呎以上に迄登つたと書いてゐる。之も矢張り西尾根かと思ふ。此の登攀で彼はジョンソン・ピーク下約二、四〇〇呎に迄達したのであつたが、深い濃霧と續いて起つた強風の爲に下つたのであつた。かくして二十三日、ローナク氷河の西側に下り、チオルテン・ニマ・ラ Chorlen Nima La 附近に至つた。此の日の徑路は全く判斷に苦しむものである。ローナク氷河の西側とは何れなりや、而もチオルテン・ニマ・ラはジョンソン・ピークの東北方にあつてゐる。二十四日にはチオルテン・ニマ・ラ附近迄登つたけれども、暴風雨の爲に峠には達せられなかつたものと如くである。

かくしてローナク地方の登攀踏査の結末を一應つけ、九月二十五日には南進して、彼が前々年越えたことのあるテ・ラの峠麓にキャムプを張つて一泊、

二十六日にはテ・ラ（一六、七五〇呎）を越し更にツムラツチエン・チュを渡つて、タンチャン・ラの登りにかゝり、一五、六〇〇呎の地點に幕營した。

翌日一六、三〇〇呎のタンチャン・ラを越へて、ゼム氷河に下り、更に同氷河を登進してほど對岸の小シニオルチュム Little Gini-Jehum の地點に至つたのである。

九月二十八日には、何等の休息もとらず、直ちにテント・ピーク Tent Peak 氷河（テント・ピークの東面、ネパール・ギャツプ氷河の一つ北側）を登りゆき、ネパールギャツプからの一支谷に幕營と記して居る。おそらくこの支谷はネパール・ギャツプ氷河のことであり、兩氷河合流點近くのことであらう。二十九日にはネパールギャツプをこゝろみ（ネパール・ギャツプ氷河より）約二〇、〇〇〇呎の地點に達したが、此度も吹雪の爲に追ひかへされて了

つた。彼のネパール・ギャツプの攻撃は之で三回目である。二回は一回にまさり、三回は二回にまさり、その到達した高度を上昇せしめてゐることは、たとへギャツプに迄達しなくとも、彼の不撓不屈な精神を物語るものであらう。又彼がかくもこのギャツプを試みた所以のものは、おそらくは、北方よりカンチエンデユンガの登路を偵察する爲であつたらう。此の日の吹雪はかなり烈しいものであつたらしく、彼は前日の泊地をすてゝ更にグリーン・レークの地點迄速やかに退却して了つた。この晩及び翌三十日は終日雪がふり續き、連日闘志にもえたケラスも、天幕に滞在したものゝ如くである。

十月一日、雪は二呎以上も降り積り、未だ止まずに、ひどく降つてゐた。尙昨日歸へてくるべき、ラツチエンへ食糧をとりに行つたクリーが此の日にかへつてきた。が、天候が悪いせいであらうか、

急速に、ゼム氷河の末端迄退却してしまつた。六哩はなれたこの地點に至ると、積雪は非常にへつてきていたと云ふ。二日ローナク・チュとゼム・チュとの合流點に幕營をなし、三日更にゼム川を下つて、ティスタ Tista の本流に出、是を溯つてタングに至つた。去る八月二十四日に北方より彼が至つた處である。既に二ヶ月餘の遠征に、おそらくは非凡の體力と精神力との持主たりし彼も、相當に疲勞してゐたであらう。乍然、今回の遠征の最初に、試みんとしたパウハンリのこととが彼の心に再び強く浮び上つたものゝ如く、再度シツキムの東北奥地へと進む計畫をなした。何人も驚異と尊敬とを覺えずして彼の尋常ならざる登高精神を讀みとることは出来ないであらう。

かくして十月六日ギイヤゴン Gingsong に至り更にラツチエン・チュの源頭を溯つて、七日には曾遊

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

のツオ・ラモに至つて一泊、翌八日、直にパウハンリ目指して登攀を開始し、約一九、三〇〇呎の地點に天幕を定めた。登路は不明なるも、前回（去る八月中旬）と同じく北西面よりであらう。九日にはパウハンリを登つて二三、〇〇〇呎迄達したが、時間不足にして日沒せまり、加ふるに深い雪と強風の爲に、下ることを餘儀なくせられ、而もこの日天幕に歸へつたのは全く暗闇となつてからであつた。

斯くてパウハンリを今回登頂することは一應斷念し、おそらく後髪をひかるゝ思ひもて十月十日、ドンキヤ・ラを再び越へ、南下してラツチエン・チュの源流モム・サムドンに至つた。この日の行程は大急行であつた。翌日同じく大急行にて更にラツチエンに下り、十二日にはチュンタンに出てティスタの本流に下り、かくて十月十八日にダージリンに無事歸還して、彼の八十日になん／＼とする第二回の遠

征を終つたのであつた。

(註一) 前章(註一)参照。

(註二) ダーヅリンのホテルの支配人にて、一九〇五年
ジャコ・ギヤルモ、レイモンド、パツシユ等のカンチ
エンデユンガ南西面(ヤルーン氷河面)攻撃に参加せ
しことあり。(A. J. XXIII. p. 51 参照)

(註三) フレツシユフィールドはランボ・ヨーク Langpo
Peak と書いてゐる。今日ではこの方が普通で、ケラ
スも此の後はランボ・ピークと書いてゐる。

(註四) ケラスは一九二〇年にカメットへ行つたのであ
るが、おそらくこの計畫のことを指すのであらう。

五

ケラスの第三回目のヒマラヤ遠征、即ちシツキム
及ガルワール行は前回に續く二年後一九一一年に行
はれた。是に關して彼は一九一二年二月六日アルパ
イン・クラブの會合に於て講演をなし、又この原稿

は The Mountains of Northern Sikkim and Gar-
hwal と題して A. J. 第二十六卷(一一三—一四二
頁)に收められて居る。おそらく彼のものした山に
關する文章中一番長く且詳細なものではないかと思
ふ。尙此の文章中には三枚のパノラマ寫眞と四枚の
寫眞及び相當詳細なる北部シツキムの地圖が挿入せ
られてゐる。

又 A. J. 二十六卷五二—五四頁には此の時のヒマ
ラヤ行のサムマリイが Mountaineering in Sikkim
and Garhwal と題されて掲載せられてゐる。是は多
分當時の編輯者イエルド氏 George Yeld の筆になる
ものであらう。

さて先づ右のサムマリイに基いてこの遠征の概要
を知つてをくことは便利であると思ふ。

その冒頭に曰く。ケラス氏は一九一〇年(註一)譯註・
事實は一九一一年)の彼の非常に成功的なるヒマ

ラヤ遠征に就いて、次の如き日記を送つてよこした。
これは彼にとつて三度目の行である。二〇、〇〇〇
呎以上の数々の登攀が土着の仲間以外には全く誰も
伴はずに敢行せられたことは、特記せらるべきであ
らう、と。

是に續くサムマリイは概略次の如きものである。

四月二十四日 ダージンから北へ八日の旅の後ラ
ツチエン發。ツムラツチエン及ローナク・チュの
橋は架せられねばならなかつた。

二十七日 グリーン・レークの近くに至る。猛烈な
る吹雪。

二十九日 グリーン・レーク・ブレイン（一五、四
〇〇呎）に至る。夜に入りて吹雪。

五月一日 グリーン・レークの北東方一八、〇〇〇
呎に登る。雪峰上のルートは可能なれど困難なり
き。

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

五月二日 グリーン・レークの北方一八、〇〇〇呎
に登る。容易なるパスを發見すること能はず。

四日 テント・ピーク氷瀑^{フィラギル}に登り、又グリーン・レ
ーク氷河を踏査す。

五日 ネパールギヤツブ（二一、〇〇〇呎）に登る。

乍然頂上にある小さな岩壁は登ること能はず。

七日 テント・ピーク氷瀑を登り且更に北東ローナ
ク地方に導くべき一峠（ローナク・ラ Phonk La
一九、五〇〇呎^{註二}）に登る。荷物を負へるクーリー
には極度に困難危険なりき。

八日 氷瀑の南東に到る可きパスを發見せんと試
む。一八、五〇〇呎迄登る。不成功に終るもこの
ルートは不可能ではない。

十日 ゼム・ギヤツブ（一九、三〇〇呎）に向ひ出
發。

十一日 途中一八、二〇〇呎に幕營。

十二日 ゼム・ギツプに登り氷河迄下る。

十三日 シムヴ・サドル（一七、七〇〇呎）に登り頂上に幕營。南面の氷瀑は多少の困難に堪ゆるならば、可能であらう。

十五日 テントピーク氷河に登り、テントピークとその東峰との間の、テントピーク・パスの峠頂上に幕營。

二十日 チョルテン・ニマ・ラ（一八、三〇〇呎）を越ゆ。

二十一日 峠東方のセンチネル・ピーク Sentinel Peak の頂に登る。（一地圖によればその高度二二、二四〇呎、他のものには二二、七〇〇呎）

二十二日 チョルテン・ニマ・ラを再び越ゆ。

二十四日 ジョンソン・ラを越ゆ。

二十五日 ランボ・サドル Langpo Saddle に登り、強風の爲追ひかへされた。二〇、七〇〇呎に幕營

す。

二十六日 ジョンソン・ピークの頂稜を偵察研究すべくランボ・ピークの頂近く迄（二二、五〇〇呎の地點）登る。然れども吹雪と濃霧の爲追ひ歸へさる。頂上（二二、八〇〇呎）に達した一九〇九年八月に於るよりも登攀は遙かに困難であつた。^(註三)

三十日 ジョンソン山群の孤立峰たる The Outlier（二二、五〇〇呎？）の南なるロングリツヂ・パス Long Ridge Pass 一九、五二〇呎に登る。

三十一日 チャブク・ラ Chabuk La をこゝろむ。ロングリツヂ・パスを越へアウトライヤー下に幕營をなす。

六月一日 深い峡谷に前進し再び天幕に歸る。

二日 再度ロングリツヂ・パスを越ゆ。

三日 再度ジョンソン・ラを越ゆ。

五日 ルンナク・ラを越へタンゴに至る。非常に濕

一度高く且霧多き天候、峠上にては深い雪なり。

十日 アルン川 Arun R. に接近する道を探索すべくサーダー Birdar^(註)を派遣す。

十一日 パウハンリに向ひギヤゴンに着。

十三日 パウハンリを試み一八、五〇〇呎に天幕を設置す。

十四日 パウハンリを攻撃し二〇、七〇〇呎にて烈風の爲追ひかへさる。

十五日 天幕を二〇、〇〇〇呎に移動す。

十六日 パウハンリ（二三、一八〇呎）に登頂す。

二十日 タンゴに歸還。ベル氏 B. B. (ガントクからの Resident) に遇ふ。

二十一日 セビト・ラ Sebu La にむけ出發し、

二十三日 に同峠（一七、六〇〇呎）を越ゆ。雪、雨、等々。

二十五日 再度セビユ・ラを越ゆ。天氣惡し。

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

二十六日 タンゴに到着す。

二十八日 チュミオモ Chumio-mo の北面及西面偵察の爲クリーを派遣す。成果を得られず。

二十九日より七月四日まで 六月二十五日迄に歸還すべき豫定のサーダーを待つ。

七月五日 ルンナク・ラを越ゆ。

七日 チュミオモの南西面に前進——霧と雪。ルートは可能なるも困難なり。屢岩石落ちをれり。

九日 チュミオモの北西面に迂回す。一八、五〇〇呎に天幕を設置す。

十日 一九、五〇〇呎に天幕を進む。

十二日 チュミオモ（二二、四三〇呎）の頂上に達す。

十三日 タンゴに歸還。

七月二十五日 ダージンに歸着す。

三十日 カトゴダム Katgodam に到着し、ビム・タ

ル Bhin Thal に突入す。

八月一日 アルモラ Almora に達す。

四日 グワルドム Gwaldam に至る。

十日 クワリ・ラ Kuari La を越ゆ。強烈なる雨。

十一日 ジョシマート Joshinath に至る。ガルワールの Deputy Commissioner から前進を禁止する旨の手紙至る。

十三日 バドリナート Badrinath に達す。

十六日 カメツトに向け發足す。

十九日 一六、五〇〇呎に登る。カーイアム Khiam 氷河に至る。

二十日 カーイアム・パス(一九、三〇〇呎)に登る。

廿一日 一八、五〇〇呎に天幕を移す。

廿二日 再度パスに登りてカメツトの西面を偵察す。又パスの頂近くの一雪峰(二〇、二〇〇呎)に登頂す。

廿四日 ドネラウ Donerau 氷河の脚下に天幕を張る。

廿五日 ドネラウ氷河の東北源頭に進む。

廿六日 ドネラウ・ピーク(一九、〇〇〇呎)に登り、カメツトの北面及北西面の偵察をなす。マナ Mana に歸着す。

廿七日 ジョシマートに来る。

廿九日 再度クワリ・ラを越ゆ。

九月九日 ボムベエイを去りロンドンに向ふ。

扱ていよくケラスの記した「北部シツキムとガルワールの山」なる一文を抄譯しつゝ、彼の第三回目のヒマラヤ入りを詳細に述べてみよう。

『一九一一年の四月半、私(ケラス)は四十四人のクリーと共にダージリンを去つて、八日目に、その北方約百十哩なるラツチエンの部落に到着した。

この行程中に見ることの出来た山麓の風景については、既にフレツシュフィールド氏や故ジョセフ・フツカー卿(Sir Joseph Hooker)によつて完璧に又興味深く敘述されてゐる故、私はラツチエンよりの行程を述べることにしたい。

此處より北十二哩なるタンゴ Thango に相當量の食糧を既に送つてをいたもので、私は三十一人のクーリーと共に四月二十四日ラツチエンを出發した。この中八人の者はシェルパ Sherpa Nepalese であつて、私と最後迄行動を共にするものであり、残る二十三人の者はラツチエン人で北西方へ四日間の行進後歸へす豫定であつた。

ラツチエンの北二哩の地點なるゼム・サムドン (Sandong = Zemu Bridge) にて、タンゴを経てチベットへ導くべきボニイ・ロードを離れ、ゼム川の岸に沿ふて森林帶中を溯行し、その源流をなす同名

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

の水河(一五哩西方)をさぐらんとした。此の短い距離は、そのルートが荒れ果てゐる故に、普通三日間かゝるものとされてゐる。

數多くの動物に、吾々はこの約一〇、〇〇〇呎の上部溪谷でお目にかゝつた。ゼム橋の近くでは猿の大群に會ひ、更にその奥二、三哩の地點では、ラツチエン人は實に美事な山狐を捕へた。彼等はその山狐の毛皮はカルカツタでは相當高價なものであることをのべたてゝ、私に賣りつけ様としたのであるが私が拒絶したので、その狐は釋放されることゝなつた。彼等が、その美しいこげ茶色をしたやはらかい長い毛にもかゝはらず、その動物を殺さなかつたことを私は非常に喜んだ。

午後吾々一行はゼムの一支流たるローナク・チュの橋がおちてゐた爲、そのほとりに足止めされた。四月廿六日にはゼム水河の末端に到着した。この日の

大部分のコースは雪崩れ落ちた雪の上であり、それ等はこの谷の低い部分を満たし、河水はその雪の下を流れてゐた。その故に吾々は十二以上の雪橋^{スノーブリッジ}を渡つた。南方にはラマ・アンデン Lama Anden（一九・二五〇呎）の峨々たる岩峰が塔の如く聳えてゐた。

ラツチエンより四日目、即ち四月廿七日、ゼム氷河を横切り、グリーン・レークに三哩の地點に達し、雷鳴をともなつた猛吹雪の中に幕營した。雷光のあるものは非常に光り輝き、雷鳴は南方の山波の端から端迄も鳴動する様に思はれた。何度も何度も何の反響もなく大きな音が聞え、それはあたかも氷原が裂ける音の様であつた。二十三名のラツチエン人は時既に眞暗であつたが（午後七時）相當下迄谷を下りたいと希望してゐたので、直ちに賃銀を拂つて解雇してやつた。

眞夜中に暴風雪はおさまつた。がその夜中、南方のスカイラインに沿ふて、不斷の搖光が見られた。これと同じ現象はこの後の一、二週間はみとめられそしてそれはあたかも山地の大氣の流れと、平原のそれとに連續的摩擦のあるごとく思はれてならなかつた。

グリーン・レークに進むに従ひ、雪の深い所が非常に多くあることを知つた。そしてグリーン・レーク自體はたゞその半分のみが夏季的狀態をなして居り、即ち東側の半分が泥沼的平原をなしてゐた。

吾々の最初の目的は約二〇、〇〇〇呎の北側の山脈上に、荷物を背負つたクীরीに好個な一峠を見出すことであつた。吾々はこの爲五度舉を起したが、たつた二つのパスしか見出せず、しかもクীরीに好個なものは一つしかない。吾々は二度正面攻撃をやつてみた。その最初の舉はキャムプの東北方

の小雪峰に連なる尾根を登路とし、一八、〇〇〇呎に達したが、それはクーリー達には不向きであり、たゞロープを結んだパーティーにのみ實用的なることを知つた。

次いで更に西方グリーン・レーク・マウンテンに接近して試登したけれ共、困難なるクレバスのあいだにゐる氷河に出つくはし、偵察し得た範囲内では重荷を負えるクーリーには餘程危険を伴はなければ通過出来相もなかつた。

その後キヤムプはテント・ピーク氷河（ガウツド Garwood 教授の地圖にはグリーン・レーク氷河と記さるもの）に近き小平原地に移された。翌日この氷河の水瀑を登つたが、此は大したこともない。けれ共同時に注意をせねばならぬ。クーリー達はえて、最も危険なセラツクスの直下に坐り煙草をふかしたがるものであるが、そのセラツクスからは何時

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

幾十噸もの氷塊が落下するかも知らない。この危険を屢々教へてやると、彼等は全く注意深くなつた。ソナ・ dona タニ Trudy と呼ばるゝ二人のクーリーはアイス・ウワークに秀でゝゐることを知つた。殊に後者タニは、私が知つてゐる此の地方のクーリーの中で、飛び抜けて秀でたものである。彼の刻んだ氷の足場は實に美事であつた。この水瀑の頂點に於て、東テント・ピーク氷河はクレバスによつて錯綜してゐるけれ共、その最も左のものを辿れば、テント・ピークのバツトレスの直下なる一峠（Tent Peak Pass）の頂稜に達することが出来ると云ふ事を發見した。ガウツド教授の地圖は此の點明らかに修正せられねばならない。即ちそれによれば、東テント・ピーク氷河は三哩北西方のピラミッドに連結してゐるが如く記されてゐるからである。

107

扱て爰に、本文に用ひられたる命名法につき數言を要せねばなるまい。山の命名方法は「ラウンド・カンチエンデユンガ」の中でフレッツシュフィールド氏が用ひたと同様、山の形狀からか、もしくはその位置から、その山の敘述上の名稱を與へると云ふ流儀である。氷河はそれ等を養ふ主峰から、又はそれ等の源頭をなせる峠から、若しくはそれ等の氷河より流れ出づる河川から、その名稱が求められる。一つの峰から數個の氷河が育まれる様な場合は、その峰の名稱に、その氷河の流れる方向を指示する接頭語をともなつて命名される。

テント・ピーク氷河のルートよりも、容易なるルートは、東北方の明らかにローナクと連續して居る臺地から垂れ下つてゐる一支氷河を辿るものであらう。西方のネパール・ギヤツプは非常に近づき易く見ゆる爲、その頂上が吾々のキヤムプより約五、〇〇

〇呎も高いとは信ずることが出来ない程であつた。

五月五日午前六時發、前述のパスに至ることを止めてネパール・ギヤツプに向つた。と云ふのは私は三日前のアクシデントによる怪我（スリッパによる足首の怪我）が全快してをらず、前日も氷瀑の登攀に綱の援助を必要としたが爲であつた。吾々はテント・ピーク氷河の主流を横切り、その西の支谷なるネパール・ギヤツプ氷河を登つていつた。約二哩にして、驚異すべき氷瀑にぶつかり、二時間近くもその爲に躊躇して了つた。それは私が以前二回（一九〇七年及一九〇九年）訪れた時よりも遙かに困難であり、そのセラツクスの状態は全く變化してゐた。吾々はその中央部をよぎつて右手を登り、或る時は全く機械體操を要求せられた。氷に覆はれ、小さな湖をもつた深い急谷ゴリツは全く困難そのものであつた。氷瀑の上部に於ては出来るだけ早く前進すべき

だと思つたが、意想外にクレバスが多く、前進はまことに遅々たるものであつた。先頭のタニはクレバスの狭い處をさがすに随分と時間を費した。そして午後二時と云ふに吾々はまだパスからかなり下方にしか達せられなかつた。この時迄は太陽の輝きはまぶしく、暑さもひどかつたが、約二〇、〇〇〇呎に達するや、突然にひえ／＼する風が西方からギヤツプを越えて注ぎこみ、太陽は朦朧となり、霧は周りを包みはじめ、クーリー達は退却を欲した。一九〇九年の時と同様私は之を拒絶した。ギヤツプを越えてくる風は烈風となり、膚身をさす冷さであつた。雪はその表面が氷結してきたが、内部はやはらかで殆ど膝近く迄もぐつた。クーリー達は凍傷をうつたへ出し、爲に彼等が足を摩擦し、携行せる乾草を靴の中に入れるまで止まつてやらねばならなかつた。三時十五分頃頂上(二二、〇〇〇呎)を型作つてゐ

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

る高度二〇、八五〇呎にある小さな岩壁の基部に到達した。この尾根の右手はそれ困難ではなかつた。がおそらくはこの一週間來の過勞の爲であらうか、吾々は總て極度に疲勞して居た。けれ共之を登らずして引きかへすことを強く私は反對した。がソナは彼の足指の幾つかゞ白色に變じ而も感覺のないことをうつたへてきた。そして又この壁を登ることは、この疲勞しきつた状態では少なくとも半時間是要するであらう。この故に退却を決意し出来るだけ早く下つた。がかの氷瀑下のセラツクスに出ツこはした爲、四十五分ほどぐずつき、キヤムプに歸着したのは六時半を過ぎてゐた。私はネパール・ギヤツプを越える試みを誰方にもお奨めしたい。反對側はおそらく不可能ではなからう。上部に充分時間をのこしてをく様に、ネパール・ギヤツプ氷河の氷瀑の上でキヤムプすることである。地圖はシュガーローフ

Magarhoi とトウインス Twinz との間の結合點について間違つてゐる。是等は別個のものであつて、低いコルによつて結ばれてゐるのである。

ネパールギヤツプを攻撃した翌々日五月七日のこ
とキヤムプを五百呎上方に移し、ローナクに至るべ
きかのパスへと前進した。此處にも巨大な氷瀑があ
つてこれをのりこへて、氷河の中央を東よりにのぼ
つて行つた。最初に數個の深く且廣いクレパスがあ
つたが、吾々は渡りうべき地點を見出しては速かに
前進した。次いで狭い稜に達し、それは約五十碼の
長さがあり、全行程中の最も困難なるものであつた。
兩側は急峻なる雪と氷でクレパスに續き、タニは既
に優秀なるステツプカッターとなつてゐて先頭を進
んだ。第一流のスイス・ガイドにしても彼タニの如
く着實なる、又彼のステツプの如き見事なるそれを
刻み得べき者はほんの二、三しかないであらう。こ

のナイフ・エツチは荷を負へるクーリーにはとても
困難であつたが、それから先は比較的容易にパスに
達した。ローナク側は急峻であつた。このパスはロ
ーナク・ラと呼ばれてをり一九、五〇〇呎を算する。
(註三)
時に午後一時であつたが、ローナクへ下りて、さき
のナイフ・エツチをさげんと欲したが、クーリー達
に食糧なく、又シエルターなきことを理由として反
對された爲往路をもどつた。さきのナイフ・エツチ
の個所は極度に慎重に下つた。タニのリーディング
は全く完璧であつた。

翌日(五月八日)の偵察によつてテント・ピーク・
パスの北側は雪の容易な斜面なることを見極めた。
かくして四人のクーリーはタンデユック Tandook
(サーダー)の指揮の下に荷物をもつてテント・ピ
ーク・パスを越へること(彼等はおそろしいローナ
ク・ラの道をとらないですむことを喜んだ)そして

他の三人（その中にはソナとタニとを含む）は私と共にゼム氷河南方のゼム・ギヤツプとシムヴ・サドルを試みることにまつた。

吾々の計畫はまづゼム・ギヤツプにのほり南方に下りて、更にパツサンラム Pissuram 氷河を登つてシムヴ・サドルを越えグリーン・レークに歸還すると云ふのであつた。

先づ吾々はゼム氷河を横切り、十日の夜は北シムヴ氷河の西二哩なる、灌木のある恰好の地にキヤムブした。

翌日はゼム・ギヤツプへの途上約一八、二〇〇呎の地點に達した。ルートは最初ゼム・ギヤツプ氷河の東側を行つたが、この附近に於てクレバスの爲少し困難を感じた。爰にキヤムブした所、夜分は寒氣きびしく、風をともしなひあまつさへ雪が吹きつけてきた。

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

五月十二日、午前五時私はクーリー達を起したが、寒氣がひどい爲すぐ自分達のテントに逃げかかり、縮こまつてしまつた。それで少し文句を云つてやると、こんなひどい寒さでは何も出来ないから、陽光がテントを訪れる迄待たうと、頻りに云ふのであつた。太陽がシムヴの雄大なバツトレスの上に昇るのは、少なくとも九時か十時のことであらう。彼等呼びつけてやる度に、再三テントへ退却し、遂に私は忍耐力を破つて了つた。と云ふ譯は、前夜彼等の身を思つて、私と同じ様な二枚の大きなひき蒲團をあてがつてやつた。而も私でさへ寢袋は用ひては居らず、又彼等にしても着物は充分にきてゐる筈である。遂に午前八時半近く、時正に朝霧がゼム氷河の上を拭ふ様に立ち上つてゆく時に出發した。かくして速度を出して進み、途中只一回而もほんの數分間の休息のみにて、九時三十分ゼム・ギ

ヤツブの頂上（一九、三〇〇呎）に達することが出来た。従つて吾々の速度は一時間約一、〇〇〇呎強と云ふことになる。行程は比較的容易であり、唯前夜降り積つた六時程の新雪の爲幾分苦しくはあつた。稜線に達する半時間位前から、灰色の霧が頂をつゝみはじめ、僅か數碼の乗越にしかすぎないこの頂からの眺望は、霧の爲に駄目になつて了つた。氷の如き風はギヤツブを越えて吹きつけ、而も斷續的に雪さへ舞つた。南方への斜面は急激に落ちこみ、數碼下方には、ガリーを眞一文字に横切つてクレバスが割れてゐた。

一時間近く霧の晴れるのを待つてゐたが、雲間を通してちらつと、巨大な雪峰を見たのみであつた。おそらくそれはバンデイム Pandim であらうか。この濃い霧に重荷を負つたクーリーを連れて下降を敢てすることの危険を慮かり、元の道を引きかへして

シムヴ氷河のなつかしいキャムプにかへることゝしたのである。道々霧が少しはれて、カンチエンチュンガの峻嶺は恐ろしき迄に威大に、そしてその東北パツトレス（譯註・東北稜のことか）^{ノルドオスト・ブーガルン}は殆ど不可能に見え、かりに試みるなれば、その終末部は小峰を聳立せる狭い岩稜に惡化してゐる故に、困難そのものゝ如き登攀を要求せらるゝであらう。

次の日（五月十三日）吾々はシムヴ・サドル（一七、七〇〇呎）の頂上に登つた。この登攀はシムヴ氷河の西側に沿ふたものでまるで徒歩も同様であり、全行程網は使用しなかつた。前のキャムプ地から約一時間半位の氷河の基部に於て、クーリー達は翌朝は必ず午前四時には出發いたしますからと云つて、此處に一泊せんことを欲した。ゼム・ギヤツブに於る前日の彼等の態度から推して、お前達の午前四時と云ふのは午前十時のことだらうと、からかつ

てやつたらば、彼等も善良な笑ひ聲を發して了つた。かくして吾々はこの日に頂上に達したのであつた。このほんの小さな出来事は、朝出發後約一時間位にしてキヤムプしようと欲するクリー達を、如何に操縦すべきものなるかの、秘訣を示してゐると思ふ。吾々が午後三時頂上に達した時は霧は又南方よりはひ上つてきた。南方への下りは北方に比して、遙かに急峻であり、その約二五〇碼下方には氷瀑がかゝつてゐた。吾々はその氷瀑から百碼上方の處にキヤムプした。夕方になるに従ひ南西を除いて霧はすつかり晴れ上り、シムヴとシニオルチュム山巔上の落日は全くゑも云はれぬ程崇嚴であつた。シニオルチュムの西面は物凄ひ絶壁をなしてゐるが、全然不可能ではないであらう。大氣は濕度高く、取り出してをいたカメラには水の結晶がくつ附いてゐた。

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

次の朝（五月十四日）かの氷瀑を綿密に偵察した結果、それは荷を負へるクリーなれば、綱を結んでゐてはじめて可能であり、而も殊に下降に際しては特別の注意を必要とすることが解つた。この頂上からは北方、南方共に素晴らしき眺望が得られたけれど共、南方は程なく霧にぼかされて了つた。不幸にして吾々は、氷瀑を下つて南方に至り、南面よりゼム・ギヤツブを攻撃するに充分なる食糧を携行して居らなかつた。その上天候はまた荒模様を示しはじめてので、遂に右の計畫を放棄して、テント・ピーク・パスを越へ、ローナクに於る吾々の別隊と合流することに決した。

翌十五日の午後には吾々はテント・ピーク・パスの頂にキヤムプしてをつた。このルートは非常に簡單なものであり、只パスへの最後の登攀は、數個の大きなクレパスがあつて、クリー達には綱を結ばせ

た。その日の中にタンデュックと一緒にならうと思つたが、天氣悪き爲頂上（一九、〇〇〇呎）にキヤムプし又翌朝寫眞を撮らうとも思つてゐた。雪はその夜間歇的に降り又翌朝（十六日）も續いた。霧の晴れるのを辛抱強く待つてゐる間に、タンデュックの三人のクローリーが、パスに残した荷物をほこぶので登つてきて、タンデュック等は此處より北方二哩にキヤムプしてゐると告げて呉れた。

南風の影響で雪は降り續き、午後迄待機した後、北方に日輪が見えはじめたので、樂な雪面を下り、氷河と尾根とを越へ、小さな湖のほとりに居たタンデュックと一緒にたつた。途中氷河を渡らねばならず、この氷河の融解せる急流の渡り場を見出さんとして、岸のくすれた爲に私はつめたい急流の中に落ちて了つた。幸運にも人手をからずに上ることは出来たが、一時は深さ十呎に近いその急流の中につか

つて了つた。この爲に他の流れを渡るにはいとも慎重をきはめ、續く二日間と云ふものは、私の濡れた衣類をかはかすことや何かで、山巔攻撃の氣勢はすつかり殺がれて了つた。たしかに、この時は勞多き大登攀には氣のり薄すとなり、高度一七、七〇〇呎許りのキヤムプの邊に聳ゆる小峰に登つて心を慰めてゐたのであつた。又一方にはネパールに導く可きギヤツプをも偵察した。その譯はランボ・ピークの南方なるランボ・ギヤツプを横斷し、更にジョンソン・ピークの南面を偵察することは、吾々の最初の目的であつたからである。この結果ランボ・ギヤツプは綱を結んだパーテイには可能なるも、クローリー達には適當でないことがわかつた。少なくともこれは當時の結論であつた。けれ共後に詳述する如く、その後の經驗によつては、少しの困難に堪へうるならクローリー達にも決して不可能ではないと、私は信ず

るものである。

五月十八日の午後キャンプを北東ランボ氷河の末端に移動した。この附近も地圖上では正確でない。

翌日、一つの尾根を越へ、小さな湖を過ぎて、その日の午後は丁度チョルテン・ニマ・ラの直下なるランボ・チュのほとりに、キャンプした。陽は未だ高かつたので、クーリー達を、残した荷物をとりにテント・ピーク・パス近く迄派遣した、一方私は三名のクーリーと共に大氷河を登つて、パス（チョルテン・ニマ・ラ）南面の登りなる臺地に達したのであつた。

翌日（五月二十日）チョルテン・ニマ・ラを越えた。その時は頂上から實に崇高そのものゝ眺望に恵まれた。吾々の計畫はこのパスの東方に衛兵の如く聳立する雄渾なる一ピークに登ることであつた。このピークを吾々は『センチネル・ピーク Sentinel

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

Peak』と假稱したのである。

五月廿一日午前七時三十分頃發足して、その登攀にかゝつた。ルートは主として苦勞多き磊岩の斜面を約一、五〇〇呎許り登り、次いでクレバスの多い雪斜面に移るのであつた。それは單なる萬年雪（ネヴェ）であつたにも拘らず、ステツプを切ることを強いられた。次いで幅の廣いクレバスにはぐまれ、二百碼許り平行に横切つて狭いブリツチを見出して渡つた。これ以後は餘り困難はなかつた。最初吾々は絶巔の如く見えた峰に向つて南進したが、この近く左方にそれよりも高い頂が見えた。而してそれに到達するや、吾々はそれが東側の大氷河にそぎ落ちてゐる絶壁の、雪庇をなせる單なる先端であることを知つた。そして眞の絶巔は前方右手に當り、鋭き雪峰をなして見られた。その時、時刻は午後一時半であり、クーリー達は既に元氣が無かつた。殊に全

行程に亘つてステツプを切つて呉れたタニは疲勞極度に達したと言ひ出し、ソナは例によつて悲觀的であつたが、一休みの後彼等は頂上にゆくことを承諾してくれた。不運にもこの山稜の極小部分は青氷^{グリンアイス}であつて、注意深きステツプカッティングを要求せられ、爲に吾々が絶巔（約二二、〇〇〇呎）に到達した時は既に三時を大分過ぎてをつた。山頂は恐らくは未だ三角測量せられざるもので、地圖に二二、〇六〇呎と記されたる峰であり、且その位置も誤つてゐるものであらう。最後の部分は軟らかき新雪であり、兩側の傾斜は恐ろしく急であつた。吾々が頂上に達した時は霧深く且雪さへちらついた。僅か數分の休憩後下山の途についたが、その時丁度霧がふきはらはれて、美しき眺望を得たのであつた。そしてその時、吾々は細長いせまい頂點の一端に居ることを知つた。が、その今一方の端が、吾々の居る處

より數呎程高いか或は低いか、はつきり見當をつけることが出来なかつた。その東西兩面とも、地圖に記されてゐる様な川はなくて、氷河によつて縦列の如く刻みつけられてゐた。フレツシユフィールド氏は既に、地圖^{サグニエツ}の中に於るヒマラヤの氷河が今日迄如何に不適當に取扱はれてきたかを指摘してゐる。吾々が此の地方や或はチベット南境の他の地域で觀察した處から考へても、ネパール及チベットの隣接地域を含むシツキムの最近刊の地圖（一九〇六年）に示されてゐる氷河地帯は、實際の狀態に對してはほとんど二倍近くも増加されねばならないだらう。

急速なる下降の後午後五時三十分吾々はキヤムプに歸つたのであつた。

五月二十二日は、パス（チョルテン・ニマ）を再び越へて主キヤムプ^{ソイン}に辿りついた。

次の日、一九〇〇年フレッツシュフィールド氏の一行が通過せしかのジョンソン・ラ（二〇、三〇〇呎）への途上にあつた。

翌日その峠を越へて、南ランボ氷河近く一九、〇〇〇呎の地點にキヤムプを設置した。この場所から一九〇九年に吾々はランボ・ギヤツプとランボ・ピークとに登つたのであつた。次の計畫は、一九〇九年時には例外的に容易であつたランボ・ピークの登攀を、再度繰返へし、その頂上からジョンソン・ピーク（二四、四〇〇呎）へのルートを判断し、特にその頂稜を偵察究明することであつた。

一九〇九年八月の登攀は ^(註三) Leichenbreiter Hut から
ブライトホーン Breithorn への登攀とその困難の程度に於てほど同様なものであつた。たゞランボの最後の六〇〇呎はブライトホーンの如何なる所よりも急峻であつたゞだけだ。ジョンソン・ラから見らるゝ

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

如きこの山の形相から判断するに、最後の二、〇〇〇呎は氷で非常に困難そうに思はれた。——九月に比べると五月に於ては一九、〇〇〇呎以下には雪多く、それ以上には雪が少ないのである。この心配は後事實となつて表はれた。五月と云ふやうな早いシーズンに於るこの山は、Hugi Sattel よりのフィンステルアールホーン Finsteraarhorn よりもはるかに困難であつたのだ。

五月廿五日、吾々はランボ・ピークとランボ・チユン・ピーク Langpo Chung との間にキヤムプする目的で出發した。ネパール・ギヤツプ氷河に於ても、又ジョンソン・ラ頂附近に於ても、一人のクリーが、彼が携帶せる大束の焚木の御蔭でクレバスにのまれる災難からまぬがれる事の出来た経験からして、私は南ランボ氷河上にては綱を結ぶことを主張し、又たしかにその御蔭を蒙るだけの理由はあつ

た。先頭にゐたソナは突然視界から去り、二番目にゐたタニは驚愕の叫びをあげた。タニの前方で、綱は巨大な紺青のクレバスの中へ消えてゐた。先づ、半分出かゝつてゐるソナの焚木の束が後方にしつかりと引張られ、それから彼は取亂した恰好でひつぱり上げられたが、氷斧と帽子とを失つてゐた。だが彼はその驚怖からすぐに恢復し、直ちに前進の準備をなした。暫らくたつて、タニはソナの帽子と氷斧を約三十呎下方のクラツク中に見出した。其處はクレバスの幅が約五呎にせばまつてをり、このクラツクの下方は又クレバスが底無しに深さまで續いてゐるのである。タニを下におろして、幸運にも帽子と氷斧とをとりもどすことが出来た。常に想像される如く經驗こそ吾々にとつて最も有効なもののである。この後彼等は二人共遙に進歩してきた。一九〇九年に於ては私が殆どすべての登攀に際しリードし

てゐたのであるが、クーリー達にとつては、大部分彼等がリードする方が良いと云ふ事を、經驗によつて次第に知つてきた。

南ランボ氷河の源頭近くで、右手に折れそのコルに續く氷壁下の幅廣い急峻な雪面を登りだした。この雪面は、一九〇九年の時は、クレバスの無いむしろ容易な登高であつたが、今では二、三のクレバスがそれを正一文字に過ぎつて走り、この爲にかなり延引して、吾々がそのコルに達した時は落日の直後であつた。吾々のキャムプから正に七時間かゝつた譯である。一九〇九年時には二度程此處迄來てゐるが、何れも二時間十五分許りしか費してをらない。而も苦しみは未だ終らなかつた。氷のごとき疾風の眞唯中にテントを設置しようとして、三十分近くも空しき努力を續けた後、遂に退却を餘儀なくされてその鞍部の下方三百呎の深雪中、約二〇、七〇〇呎

の地點に、キヤムプしたのである。

その夜中雪は降り、翌朝の天氣も悪るかつた。吾吾が出發した午前八時に於てさへ、霧はまだ強く吹きつけてゐた。鞍部を離れるか離れないに、再び雪は降り出し、風は鋭くなつた。クーリー達は悪天候の爲明らかに元氣が出なかつた。二二、〇〇〇呎の地點では、彼等は下山を欲し、カメラを除いたすべての荷物をあとに残してしまつた。と云ふのは、空氣中の二酸化炭素 carbon dioxide の測定に必要な數々の壤を携行したが爲、登攀を多分に妨げたからであつた。あます九〇〇呎はきはだつて悪場には思はれ、しかも前方に見ゆる瘠せ細つた尖峰が、一九〇九年に登つた鈍い三角形の峰と同じであるとはどうしても信じられなかつた。又山の全表面は青光に震え、それは正しく堅氷を意味してゐる。たしかに、この山は今や例外的の困難な状態にあつたので

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

ある。續く六〇〇呎への道を切るに氷ではなく單なる萬年雪^{ネグエ}であつたのに三時間を費した。しかも私がかゝる悪天候に何故に前進を固執するか、クーリー達は全く解しかねてゐるやうであつた。そして霰の烈しく降る中に屢々立ち止らねばならず、あまつさえ雪は降り出して、クーリー達は我慢出來ずに下降を要求した。吾々の偵察の目的たるジョンソン・ピークは長いこと、霧の中にかくれてゐた爲これ以上前進して得らるゝものは明らかに皆無であつた。それで暴風雪の小やみに寫眞を一葉とつて、下降についた。吾々はたしかに頂上下二五〇乃至三〇〇呎の地點迄達してゐた筈である。かゝる状態の下で退却せねばならないことは残念至極ではあつたが、私は既にヒマラヤに於て、かゝる失望にはなれつこになつてゐたのである。若し全員がグラムボンをつけてゐたならば、吾々が費した時間の半分以内

で必ずその絶巔に到達し得たであらう。

ファイナル・ピークの六〇〇呎を下るには一時間十五分を費した。或る場所に於ては、一時に只一人の者しか動くことが出来なかつたからだ。タニが先頭をゆき、次でアンダーキョウ Andarkow 三番目にはソナ、最後に自分の順序であつた。下降に際し、クーリーの穿いた布靴は氷の場所では不適當であることが充分に立證された。相變らず霧は深く雪は降り、往路のステツプには雪が多量に詰まつてゐた。ソナは二度程ステツプからおちた。二度目には私がほとんど引張り込まれる處であつた。午後四時、全行程を濃霧にさらされた経験をなめて、吾々はキヤムプに戻つたのである。

ランボの頂上から寫眞をとる爲に、翌日今一度それに登らうとソナに告げたところ、彼は冷やかにこう答へた。——『旦那 (Sahib)、クーリー共は食

糧 (Khana = dinner) をもつてをらないので御座居ます。私共は明朝下山せねばなりませんまい。』それで調べてみると、彼等が申し立てた通りで、明朝には彼等の食糧を食べ終つてしまふかもしれないことを知つた。それで下山すること以外には何もなし得られなかつた。が直ちに下山することは、悪天候の爲クーリー共が反對したのであるが、霧と雪にもかゝらずその晩中に下山することを私は主張したのであつた。吾々が南ランボ氷河脚下のキヤムプに歸着したのは全く暗闇となつてからであつた。續く二日間共悪天候が續き、一日の大部分は、キヤムプを霧が包んでゐたのであつた。三日目 (五月二十九日) に吾々は南ジョンソン氷河に下り、更に西北に方向をむけて、ロング・リツヂ Long Ridge 氷河と假稱せる、西側の山から走下せる一つの氷河を登つて行つた。此の山の北端なる一峠^{パス}は容易と思はれたが、

翌日（三十日）の偵察によつて、それは文机形^{ライティングデスク}をなして、東面は長い容易な傾斜を、西面は實に鋭い絶壁をなしてゐることが判つた。吾々がこのパスの頂に居つた時、クーリー達は下降の不可能さを述べ立てたが、次の日（三十一日）には、私の説得が効を奏して、三人のクーリーが私と同行して下降を敢行することを承知した。

吾々の目的はロング・リツヂ・パス（一九、五二〇呎）を越え、西進を續けて、チャブク・ラ Chabuk La 若しくはそれと同じく北西に至る他のパスへの道を見出し、然る後（チベットを通つて）チオルテン・ニマ・ラからローナクに歸つて來ることであつた。かくすることによつてジョンソン山塊の正しい觀察をなすことが出來、ジョンソン・ピークへの攻撃は南西面からが最も可能性ある事を、證據立てることが出來るであらうと思つたのである。乍然、

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

更に吾々の主たる目的は、此の山脈の一地點から當然明瞭に見られると思つてゐたマウント・エヴェレスト、チヨモカンカル Chomokankar、若しくはチヨモ・ランモ Chomo Langmo の山群をかくしてゐる處の、かの巨大なる山脈はそも／＼何處から派出し何處に連るかを見極めることであつた。

數個のおそろしいクレパスがあつたけれ共、そのパスへの登りは困難ではなかつた。然し下降は非常に急峻で、恐らく六〇乃至七十度もあり、しかもクーリー達が好むまゝに綱は結ばなかつた。もし綱を結べば鋭い岩角ですた／＼になつて了つたであらう。めら／＼な氷の詰まつた小さなガリーが苦痛の種であり、注意深きステツプ・カツティングを要求せられた。下降の後、更に吾々は一氷河を越へて西方約一哩の地點、とある岩上にキャムプした。そこはジョンソン山群中の鋭き孤立峰であり、吾々が假

りに『アウトライアー The Outlier』と名附けてをいた一峰の絶壁下であつた。地點は約二二、五〇〇呎である。そのキヤムプからは、雙塔のある巨大な伽藍を思はせる様なジャンヌ Tannu の北西面が言語に絶した大らかな姿を以て、吾々の視界に入つてきたのであつた。

六月一日前記せる氷河について前進したが、遂にその下方一、五〇〇呎にある他の氷河に臨んだ絶壁の突端に衝き當つて足止めされて了つた。下方の氷河こそ本來の捷路であり、議論をなし延引が続いた。吾々は今迄かくなことを全く豫想だにしなかつた。前方のルートは荷を負へるクリーーには通過不可能であり、しかも下方の氷河の源頭も斷崖によつて閉されてゐた。前方の大きな峽谷^{シュンダ}の彼方には無數の峰々、無數のパスが列をなして構へてゐる。目指すチャブク・ラは一體何處にあるのか全く見當も

つかなかつた。その上吾々は僅に二日間の食糧しかもつてをらず、一方豫定のルートでは、此處からチオルテン・ニマ・ラ迄はおそらく少なくとも四日間ばかりりそうであつた。更に地圖は絶望的なまでに間違つてゐる。重荷を負へるクリーーと共に更に前進することは、彼等にとつて決して只事ではなく、さればと云つて、下降の他のルートを見出し得ず又その試みさへしないことは、たまたまなく残念であつた。前進か退却かの時に、例の如く天候がその決定を與へて了つた。午前中ジャンヌの周邊に屯してゐた雲はおそろしい早さで空にみち／＼てき、ついで雪がふり出した。かくして不承不承ながら、退却の命令が與へられ、吾々は懐かしいキヤムプに戻つてきた。午後に、美しい程の雪崩がアウトライヤーから落下し、幸運にも私はそれを寫眞にとることを得た。

翌朝（二日）吾々はロング・リツヂ・パスを越へ

ランボ氷河畔の古いキャンブに歸還した。

次の日(三日)ジョンソン・ラを越へて、チヨルテン・ニマ・ラへの斜面の脚下なるタンデユツクのキャンブに辿りついた。二日後(六月五日)には、二人の新らしいクリーリを得て、ルンナク・ラを越へタンゴに出たのであつた。

タンゴにて吾々のパーティーは分割せられた。クリーリ共は食糧其他の供給の爲にダージリンに、或は又チベット界限迄送られた。そして私は四人のクリーリと、焚木を運ぶ爲に二頭のヤクとを伴ひ、シツキム東北境の一峰たるパウハンリを試みる事となつた。

ギヤゴン、ツオ・ラモ(Lake of the Goddess)へ進み、次いで吾々は三日目(六月十三日)に一八、〇〇〇呎の高度で雪線に達した。

翌十四日、パウハンリの頂を試みて二〇、七〇〇

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

呎迄登攀したのであるが、又しても烈風によつて退却を餘儀なくされた。美事な雪面は烈風の齧らした濃い雲霧の中に捲き閉ざされて了つたのである。

次の日キャンブは二〇、〇〇〇呎の高度にうつされた。

六月十六日遂に吾々はパウハンリの絶巔二三、一八〇呎に登ることが出来たのである。眺望は不運にも脚下の雲群に邪魔されてゐたが、それにも拘らず興味盡きざるものがあつた。西南方に當つて、あらゆるものは、移動絶間なき雲海の爲に朦朧としてをり、その上には數個の巨峰、カンチエンデユンガ、チユミオモ、カンチエンデヤウ等が岩の島の如くに、頂冠を表はしてゐた。東方約四哩の地點には高度約二三、〇〇〇呎の雪嶺が在り、その峰とパウハンリとの間には地圖に示されてゐるやうな河川はなくし

て、一つの秀麗な氷河が北走してゐた。登攀の途次吾々は「チヨモラアライ山脈」(Chomolhari Range)の北端を瞥見することが出来たが、あらゆるものゝ中最も興味深きものは、東北東方約百哩の彼方に當り聳立する莊嚴なる二つの雪嶺であつた。それ等は地平線上に、傲慢不羈たる容姿を以て毅然と聳えてゐた。それ等の山々の高度はおそらく二五、〇〇〇呎以上のもので、明らかにヒマラヤの主脈とは分離して北方に在るものゝ如くである。吾々が頂上に達する前に早くもそれ等は霧に包まれてしまつた。登攀には六時間を要したのであるが、それは決して急いだものではなかつた。頂上直下約一、〇〇〇呎迄は西方の壁^{ツツ}の端に沿ふて進み、かくして深き課程の積雪を蹴つて頂上へ向つたのであつた。

パウハンリの絶巔は東方に雪庇狀をなし、西方の壁^{ツツ}の頭^{トツ}からは相當の距離があり、又それよりも遙

に高かつた。頂上には三十五分許り居たが、寒冷なる風以外には、いたく居心地が良かった。又其處に於てはかなり複雑な實驗、例へば、血液中の赤血球と白赤球との數を調べる事等を実行するに、何等困難はなかつた。之は特記してをかねばならない。その譯は多くの權威者達は、過去に於て一六、〇〇〇呎以上に於てはかかる實驗を遂行することはおそらく不可能であると、言明してゐるからである。又空氣中の二酸化炭素^{カーボニアイクサイド}の測定も着手された。

若し吾々が、シャベル様のものを携行してゐたならば、頂上に大きな穴を掘り、翌日テントをこゝに移して、若干の實驗をなし、或は寫眞をとることが出来たかもしれない。風に對して何等の防禦物がなければ、こゝにテントを設置することは殆ど不可能である。吾々にはまだランボ・サドル上に於て烈風と死闘した記憶が、眞新らしかつたのである。下降

には二時間半を要した。一九〇九年の如く急いで下りなかつた。その時は二三、〇〇〇呎と一八、五〇〇呎のキヤムプとの間を約二時間で下りたのであつた。

登攀の途次に、私は注意して、同行した二人のクリー——ソナ及タニ兄弟——の登攀能力と私自身のそれとを比較してみた。そして彼等は、殊に二二、五〇〇呎以上に於て遙に秀れてゐることを知つた。

この高度以上では彼等は、一、〇〇〇呎ゆくに私を三〇〇呎もひきはなすことが出来た。換言すれば彼等は軽い荷しか脊負つてゐないとは云へ、少なくとも私より三〇％程優秀である。一九〇九年に同伴せる二人のクリーは、私と殆ど同程度のものであつたが、それはソナ及タニ兄弟よりはずつと虚弱なものであつた。

白人と土着人との此の比較はかなりの興味があ

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

る。そして私は爰に、之等の山岳地帯に三度訪れた経験の結果を簡潔に述べてみよう。

一五、〇〇〇呎乃至一七、〇〇〇呎に於ては、白人は荷を背負はざるクリーと比敵することが出来、荷を負える者をば容易に追ひ抜くことが出来る。乍然一七、〇〇〇呎以上に於ては、彼等クリーの卓越性は顯著となり、荷を負はざるクリーは私よりも遙かに早く登行する事が出来、普通に荷を持つたクリーでさえ二一、〇〇〇呎から二二、〇〇〇呎にかけては、私が出せる最も早い速度以上に登行し得るのである。その高度以上になると、普通に荷を持つたクリーは私を遙かに離して先に前進し、又荷をもたぬクリーとは全然競争にはならない程である。

何故に、白人と印度山人との間に、かゝる高度馴致の大きいなる差異があるのであらうか？ 而もかゝ

る差異は普遍的なものであらうか？ フレツシュフ
イールド氏、コリー教授、ロングスタフ博士、マム氏
等は、その経験に關する限りは私と同意見のやうで
ある。只乍然この法則の例外として擧げらる可きも
のは、グルラ・マンダアタ Gurla Mandhata、トリ
ズル Tsun 遠征に關するロングスタフ博士の記述に
見らるゝプロシユレル兄弟 Brochens のことであら
う。

私には、スイスのニガイドを、ヒマラヤで用ひた
経験は只一回しかない。彼等は私よりも遙かに高度
に影響されて了つたのである。

幼少の折から 3-4 アトモスフィアの氣壓に、若
しくはそれ以下の氣壓になれてゐる人々は、それ以
外の人々よりは、酸素を必要としないであらうし、
若しくはより大きい肺臓の容積をもつてゐることは
想像し得らる。この興味ある題目——高度の影響

については後にもう少し述べたいと思ふ。

さてパウハンリの基部なる Pawhuni Waaghs と
稱せらるゝ荒涼たる平地に降りたつた時、人は筆舌
につくし難い様な種類の動植物をみて驚愕するであ
らう。

シツキムの北部地方は大部分チベット人の手中に
あることを知つた。其處には四つの黒い大天幕、及
び多數の小天幕があり、チベット人の數は約五十人
であつた。彼等は情に厚く、男も女も子供も喜んで
寫眞に收まつて呉れた。彼等チベット人は比較的豐
かであり、少くも二千頭の羊と百五十乃至二百のヤ
クとを所有してゐた。之等の人々がシツキムに入る
自由を與へられてゐるに反し、白人はチベットへ足
を踏み入れることを許されてゐないのは、少し不都
合の感を懷かせる。

タンゴへの歸途、ガントクからきた英國の駐劄官
レザグント

たるベル氏 Charles Bell に遇つたが、彼は非常に親切丁寧であつた。東北東方面のかの豪宕なる雪嶺の存在についての報告に、彼は非常に興味をもつて、それはおそらくクラ・カンリイ山群 Kulu Kangri Mountains ではないかと云つた。彼は曾つてブウタンからクラ・カンリイの南面を見たことがある相だが、彼の説明は、吾々の見た二つの峰とは附合せず、又その形相に於ても異つてゐた。ブウタンからこの峰を偵察研究することの可否を、ベル氏に尋ねてみた處、その國は現在白人には全く鎖されてゐると云ふ答しか得られなかつた。

時正に六月の下旬に當り、天候が非常に不順な爲ジョンソン・ピーク攻撃の目的を斷念して、カンチエンヂヤウ(二二、七〇〇呎)及チュミオモ(二二、四三〇呎)へ矛先を向けたのであつた。パウハンリよりの歸途、吾々はカンチエンヂヤウの北面を霧の

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

許す限り偵察したのであつたが、頂上へ導かるべき良いルートを見出すことは出来なかつた。然も早朝に於てさへ、この山はすっかり晴れ上つては居らなかつた。そこで此度はその南面を偵察する爲に、セビユ・ラ Sibu La (一七、六〇〇呎)に登らうとして六月二十二日に出發した。カンチエンヂヤウの全容は一時にはとても見極めることは出来なかつたけれ共、この山群の主峰の東方から發し南西方に迂回してゐる長大な氷瀑こそ可能的ルートとなることを知ることが出来た。乍然現在の狀態ではこの山に登ることは不可能であらう。何故なれば、クレバスの狀態は非常に錯雜してをり、又可能的ルートも朝の中ほんの數分間しか見ることが出来なかつたからである。そこでセビユ・ラを越え、ツエン・ギイ・カン Tsen-Gui-Kang (二一、〇〇〇呎)の秀麗なる峰——譯註セビユ・ラの南方)を試みる計畫をたて

た。その峰は曾て一九〇九年、モメイ・サモン Momay Samong (譯註モム・サムドン Mome Sam dongのことか) から仰ぎ見たことがあつたものだ。

六月廿三日に吾々は同峠^ツを越え、氷に覆はれた小さな湖から餘り遠くない一七、〇〇〇呎の地點にキヤムプを張つた。峠の登りで無數の山大黄(mountain rhubarb)を見た。クーリー共は山大黄を珍重し澤山に採集した。私も又そうしたが、この山大黄は人工的に栽培されたものに見らるゝ様な酸味は少ないが、只何處か風味のない感じを與へた。乍然新鮮なる野菜は極く少量しか得られぬので、晚餐には山大黄を調理して、タピオーカ(葛粉)と一緒に供へてくれろとソナに云つてをいた。こうして食べるとかなり味も良くなつた。がこれを食べると幾分不眠症に誘はれる傾向がある様に思はれた。

さて峠の雪に達したのは二時頃であつたが、クー

リー達は峠越へを肯へんじない。雪が餘りにも敷くてぬかると云ひ、爲に私は彼等が躊躇してゐる中に、頂迄の四分の三を一人で登らねばならなかつた。正常のルートがむしろ良くないと思つて、小さな數々のクレバスに接近して前進したが、綱を結ばないパーティーにとつてはごく危険なものであつた。

尙之等の小クレバスについてはクロード・ホワイト氏 Claude White がその著たる『シツキムとブウタイン』中に特記してゐるものなることを後日に至つて知つた。セプエ湖近くで過した二夜と云ふものは全く雪と雨の連續であつた。そしてツエン・ギイ・カン及びンカチエンヂヤウの頂稜は全く雲霧の中に執拗に鎖されてゐたので、仕方なくタンゴに戻つてきた。此處で吾々のパーティーの一部(別動隊)^(註四)が戻つて來ない爲馬鹿らしい遅延をしてつた。が是は、サーダ1を餘りに買ひかぶり過ぎて、高度地へ派遣した誤

算に原因したのであつた。この故に、ソナとアンダ

ーキヨウとをチユミオモの西面偵察の爲派遣してを
いた。その面は曾て私がジョンソン・ラ近くから、

テレスコープで觀察し、且可能性を認めたものであ
つたのだ。彼等は三日後に歸還したが、私が教へた
如くチユミオモの北方へ尾根を越すことが出来な
かつたと報告した。調べてみるに彼等は確かにチユミ

オモとラツチエン・カン (註五) Iachen Kung (一、六〇

〇呎) とを間違ひ、その困難なる北稜越へをしたも
のらしかつた。かくして此の舉も、私がクローリー達
の知識を高く評價し過ぎた事を示すよい例となつて
了つた。而も彼等にはパウハンリの登降に際しチユ

ミオモの位置恰好等を何度も何度も指し示して教へ
てやつたのであつた。クローリーを御するに當つて
は、彼等が要求することは彼等が納得いく迄くりか
へし教へてやるのが大切である。此の度の失敗は

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

正しく私の側に在つたのである。

一方吾々の怠慢者共(サーダー達)は未だ歸へら
ず、又天候も悪かつたが、チユミオモに攻撃を加へ
ることに決めた。それはチユミオモのみがこの悪天
候の下に於ても、屢々濃霧から解放されるものであ
つたからである。チユミオモは登攀不可能である
と、ラツチエン人に話された爲、クローリー共は出發
に際しても餘り元氣がなかつたが、吾々はその東南
面の絶壁を攀じ登るのではなく、遠方から偵察して
をいたその西面こそ餘り困難はないものであること
を知つて、すつかり晴れやかな気分になつたらし
かつた。

七月五日ルンナク・ラを豪雨中に越え、ナク・チ
ヒ Hi Naku Chin に沿ひて進み、道々チベット人の古
い塔(Dzong)の跡を過ぎた。此の谷にはヤクの美し
い群がゐた。四日目の夕方に吾々は塔の如く聳立す

るチュミオモの、南西急斜面上にキヤムプを張つた。チュミオモは南西面からもたしかに可能であるが、北西稜の方が遙かに容易である。霧は相變らず多く、時々雪も舞つた。この不斷の濕氣は岩石に與ふる影響大で、岩崩れは未だ曾つて經驗しない程頻繁に續いた。南面の絶崖からは非常におそろしい岩雪崩が落ちたのであつた。

岩上のテントは、落石の危險に曝されてをり、北方二哩の地點の方が天候もよく思はれたので、北西面に迂廻して吾々のテントを移動した。そしてチュミオモの西北の小氷河より流れ出る美しい溪流の近く、一八、五〇〇呎の地點にキヤムプした。

翌日（七月十日）一九、五〇〇呎にキヤムプを移した。その場所は、南西稜下端の過日のキヤムプ地から直線距離僅かに二哩足らずの地點で、且それと似た様な——謂はゞ絶壁近くの岩上——場所ではあ

つたが、天候は前とは全く變化してきた。岩雪崩は少くなり、霧は吾々の處迄下つては來なかつた。

山の南端には、まだ山霧が執拗にからまつてゐたが、北端は全く明朗に晴れて、廣大なチベット高原を見渡すことが出來た。タニは、七月十一日の夕刻に、タンゴからやつてきた。又食糧補給の爲下つてゐたアンダーキヨウも共に歸還した。彼の報告によればタンデユツクも既に食糧をもつてタンゴに戻つてゐる由であつた。

七月十二日、午前六時半にキヤムプを後にした。朝の天気は曖昧であつた。氷河の源頭近く迄登つて、それを横切り、北西岩稜に殆ど接してゐる幾つかのセラツクスの右手を登つて行つた。二〇、〇〇〇呎を少し越した地點、即ち其處は最後の登攀^{フアイナル・アップセント}の基部近くであるが、物凄いクレパスが二、三口を開けてゐた。これを通過すると、この山は驚く程容

易になつてきた。タニとソナは北西岩稜を試み様と云つたが、私は非常に急ではあつたが、雪の方を選ぶ事を固執した。そしておそらく岩稜に要する時間の三分の一でそれを登つた。クーリー共は急峻な雪は危険だと云ふ印象をもつてゐて、何時もそれに氣を挫かれるのである。吾々は霧に覆はれた頂稜に達した。そして北峯の頭が二〇〇碼の彼方にすつかり浮び上る迄暫らく待たねばならなかつた。此の頭に登り、その僅か二碼許りの廣さしかない、且峻險な雪頂に霧の上る迄待つてから、更に約三〇〇呎高い南方の絶嶺としてアレートを進んだ。このルートは所々非常に瘦せてをり又身の毛もよだつ様な東方の絶崖の縁に極く接近してゐるにも拘はらず、極く僅かの困難を除いては、氣持よき前進であつた。雪も踝よりは決して潜らなかつた。南の絶嶺の南東側は絶崖によつてめぐらされ、頂は數碼の廣さしかな

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

い。吾々は約三十分程頂上（二二、四三〇呎）に滞在し、次いで登りのルート通り下降した。霧は相變らず頂上での眺望を邪魔したが、幸運にも數葉の寫眞をとることが出来た。歸路に於ても急斜面の雪は絶好な状態であり、たゞ低い方のクレバス近くでは雪が非常に軟くなつてゐて、何度も何度も腰の深さまで沒した。かくして四時頃キヤムプに歸着したのであつた。

登高時に於けるソナとタニとの高度の影響は更に少くなり、又私も相當高所迄餘り影響をうけずに登り得ることが出来る自信を感じた。是は一體一昨日（十一日）の休憩に原因せるものなりや、或は又高地に對する馴致が次第に顯著になつてきたものなりや、決定を與へることは難かしい。恐らくはこの兩要因が交互に作用してをり、就中後者によるものであらう。

翌日（七月十三日）吾々はタンゴに進んだ。がそれは相當に長い行程であつた。吾々は北チユミオモ氷河を横切り、東方に尾根を登り、ラツチエンよりカムバ・ゾン Kamba Dzong に北進する道路に下つた。この尾根上（約二〇、〇〇〇呎）からは、西方に展開する山々の、雄大莊嚴なる眺望を得ることが出来た。そして以前より私が想像してゐた次の事が明瞭に觀察せられた。即ち、アルン川 Arun の東側には數個の誇大なる峯が在り、その峯々は、北部シツキムの旅行者がかりに二一、〇〇〇呎以上から望見しない限りはその旅行者の視界より、マウント・エヴエレストを完全にかくしてゐると云ふことであつた。是等の山脈の最高地點はカンリンゲン Kangdingen と稱せらるゝものであり、群がれる雪峯に見えて、高度は二三、〇〇〇呎を下らないものに違ひない。その近くには、トクトク・ラ Tok Tok La と

呼ばれてゐる容易なる峠を越えて、サアル Saru よりアルン川に至るルートが導びかれてゐる。その故に、クロード・ホワイト氏等が、北部シツキムの山々から、マウント・エヴエレストの雄渾なる眺望を得たと言明してゐることは、おそらく彼等の考へ違ひであつたらう。天氣晴朗な日には、カンリンゲンの上方にそれ以上の誇大な山々が見らるゝかも知れないが、その容姿は殆んど明瞭とは云ひ難いであらう。そして現在迄の觀察者は此の二つの山群を混同してゐたものであらう。

ジョンソン・ピークの頂上から、満足なる眺望を得る様なよい天候は、タンゴに於て少なくとも二週間ばかりは待期せねばならなかつたので、吾々はネパールの向ふ側に迂回してゆき、カメット Kameet を試みることにした。だがこの計畫は吾々の時日が既に残り少なくなつてゐたので、餘り賢明なものとは云へ

なかつた。かくして七月廿五日にダージリンに歸着し、約三ヶ月共に暮らした信賴すべきクリー達と別れた。別れる時に際しても之等の人々はその健康状態に於て又精神状態に於て最善であつたと附言してをきたい。彼等は、食物、給料、彼等の期待してをつた仕事を與へられてすつかり満足した。そしてタンゴに於て、もし私がジョンソン・ピーク及びカシエンデヤウを試みるならば、もう一ト月共に行動するかと聞いた處、彼等の全部が全部、何の躊躇もなく共に行動すると申し出たのであつた。彼等シエルパ人達は實際喜んで仕事をやり通し、又親切にあつかつてやるならば、どんなことでもやり通すであらう。

扱て七月廿七日、私はタニとソナとを伴ひダージリンをあとにして、三日後には鐵道の終點たるカト

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

ゴダム Kadam に着いた。此處からの吾々のルートは一九〇五年(譯註、之はケラスの思ひ違ひであらう。一九〇七年のことである。)のママ、ロングスタッフ、ブルウス諸氏のそれとほど一致するものである。人若しクマオン及ガルワールに關して知らんと欲するならば、先づママの書物(譯註、Five months in the Himalaya)を読むのが一番宜しいと思ふ。カトゴダムより更に三日目にはクマオンの首府たるアルモラ Almora に到着した。その Deputy Commissioner は不在なるも Assistant Deputy Commissioner は非常に親切であり、且タシルダル Tushildar: 宛の傳文を與へて呉れた。その人は稱讃に價する精力^{エネルギー}を以てクリー獲得の仕事に身を投じてくれたのであつた。半時間の後には夫々七人よりなる二組のクリーの群が檢閲をうけにやつてきた。私は各々の組から二、三人宛選ばんと思つたが、第一組の者は、印

度古來の陋固たる階級的偏見の故に、決して第二組の者と共に旅行しないことを注意された。選拔された者は、その肉體的條件はシエルパのクーリーとは非常に異り、丈は高く痩せてゐて、持久力はたしかに劣つてゐるかに見えた。彼等はおそらくシエルパの持てる荷物の三分の二位しか持ち得ないかも知れぬ。がクアリ・ラ Kuari La を越えてバドリナートに至る十日間の徒歩旅行に隨行することを承諾した。携帶品の整理分類がとり行はれたのは此度が初めてであり、又それは手際よくなされた。新しいクーリー共はシエルパのクーリーよりも更に心附けを要求し、且ヒンズー教徒達 Hindoos は食物の代りに現金を貰ふ事の方を喜んだのである。白人乃至ソナやタニの如き佛教徒の誰か彼等の食物に觸れたらば、それがけがれて了つたと思ふのである。それで私は食事の時は彼等だけ別個にしてをいてやる

ことにした。

アルモラからグワルダム Gwalam に至る三日間の前進は何のことはなかつたが、唯暑さが烈しかった。ソナとタニとは軽い荷しか擔いでゐなかつたがダイジリンを去つて以來の暑さをこぼしてをり、又彼等がシツキムに居た時程幸福でないと思ふのを聞いて、私は些か失望もした。

グワルダムに於て、連續的な雨降りの土地とも見らるべき地方に這入つて行つた。續く六日間、吾々は篠つく雨の中、濕つばい且雨だれの繁く降る森の中をジョンマートとして突進した。そして大部分路上にキヤムブし、天幕は全く浸水して了つた。

ジョンマートで甚だ面倒臭い事に出つこはして了つた。アルモラではその Assistant Deputy Commissioner が吾々に云ふには、自分は何等ガルワールに於る行政司法權を有して居らず、と云つて Deputy

Commissioner は一〇〇哩も離れたパウリ Pauri に滞在在中なる故、バドリナート Badrinath に至るべき許可状をしたゝめて申請してをくが宜しいと。吾々はその通りにした。又吾々のシツキムに於ける経験からしてそれは疑ひもなく許可せらるゝものと思つてゐた。處がジョシマートではバトワリ batwari 即ちその地方のマギストレイト magistrate は、前進を禁止する旨したゝめたるストウエル氏 Stowell よりの手紙を呈示し、若し吾々が前進するならば法律によつて罰し様と云ふのであつた。二度迄も電報で聯絡をとり、丸一日を無駄にした後やつと前進を許可せられたのであつた。

バドリナートに於ては、その寺院を訪れ Chief Worshipper たる Rawal Sahib やその助手たる Pandit Bidya Dutt 等に好遇せられた(八月十三日)。八月十六日十五名のクーリーと共に、北進して二

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

日目の午後にはカイアム谷の末端にキャンプをした。こゝのクーリーは全く吾々を誤導した。即ち彼等は此の谷がカメツトへの最も良きルートをなすものと強く主張してゐてその方へ導いたが、事實はその南方のカティ Kati (若しくはガストリ Gatholi) 谷をとるべきであつたのだ。又山々の説明についてはマナ Mana のクーリー共は全然信頼を置くに足らざることを知り、爾後決して彼等を信用せぬことにきめた。二十日カイアム・パス Khamu Pass (一九、三〇〇呎) に登つた時は、巨峯の頂は霧の中に在つたが、彼等クーリーはマナ・ピークをカメツトだと信じてをつた。此の者共が、比較的最近(譯註一九一〇年ミード Mead がカメツトの西面を試みた時か、一九一一年スリングスビー A. M. Slingsby がカメツトを試みた時に隨行したことを指すものであらう。)カメツトへ來たことがあるのに、かゝる間違ひ

をしてゐるのは、まことに奇異な感を抱せるが、多くのクリーリーの地理的常識は極度に曖昧であることを留意しなくてはならない。次いで吾々は一八、五〇〇呎にキヤムプを進め（二十一日）、更に早朝再度バスに登つて（二十二日）カメット及びその屬峯の豪岩なる光景を撞いまくにした。

此の山は西面からは恰かも不可能の如く思はれたが、南方の雪の急斜面に登り、更に登頂の可能性を最も與へてゐる北東面に迂回することは可能に思はれる。吾々は又バスの北に位置する高度約二〇、二〇〇呎の一小雪峯に登つた（二十二日）が、頂上に達せざる中に霧がカメットを蔽つて了ひ、新たに偵察し得たものは殆ど何もなかつた。ロングスタフ博士の地圖に二四、一七〇呎（譯註、東イビ・ガミンのことか？）と記されてゐるピークの外に、ほぼ同高度の美麗な岩峯が北西に當つてみられた。（譯

註、西イビ・ガミン二四、二〇〇呎のことか？）

結局結果は正に失望であつた。バスの東側には無數のクレバスがあき、充分の時間をかければ、そのルートは二ヶ所に於て強引に進むことは出来相であつたが、轉じて吾々はカメットの北西面の可能性を知る爲に、更に北進することに決した。歸路につくアルモラの者共をタニに連れさせてかへし、吾々はマナ・パスに向つて進み、ダナラウ Dhanarau 氷河の末端にキヤムプした。（二十四日）。この氷河は大支流をもつ。翌日はその東北支流の岸に沿ふて苦しい歩みを続け、遂にその源頭近くに達して、約一七、〇〇〇呎にキヤムプしたのであつた。八月二十六日ソナと二人の他のクリーリーとをアラクナンダ Alaknanda 谷のダナラウに遺はし、一方私はアルム・シン Alm Singh と共にこの氷河の北に位する約一九、〇〇〇呎の高度を有する長き且容易な山たるダ

ナラウ・ピークに登頂した。頂からはカメツト北西面の美しき光景が手にとる如く眺められた。此の面は若しその基部に接近することが出来るならば、可能性があらう。だがカメツト北西面の峽谷について、

地圖に示されてゐるところは、おそらく誤りであらうし又更に踏査究明を必要とするであらう。若し吾々にもう二週間の休暇が與へられてゐたならば！

だが吾々はボンベイに向け出發せねばならなかつた。アルモラの者共は吾々に先行して既に三日前出發してをつた。そこで、そのマナに行く決心をなし、クーリー達もそれに賛成した。吾々がマナ峽谷を通過した時は眞暗であり、霧が一杯であつた。幸ひクーリー共は徑路の詳細を知つてをり、互にごく接近してゆつくり且細心の注意をして行進した。マナに着いたのは午後九時過であつた。翌日（二十七日）吾々は二十二哩の彼方からジョシマトへ長い行進を

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

續けた。途中バドリナートで三時間程休息をとつた爲、アラクナンダ谷の少し危険な道を、眞暗闇に歩かねばならなくなつて眞夜中過ぎやうやくバンガロウに到着した。

翌朝二十九日の朝一同新鮮そのものゝ氣分になつてクワリ・ラ Kuarī Ra の頂近く登つて行つた。だがそこからグワルダム迄は往路よりも遙かに豪雨に叩かれて了つた。

將來の旅行者の爲に特記すべき一事件^{インシデント}を記してをく。ラムニ Rhanni に泊つた一夜のこと、ソナは私の天幕のまはりに溝を堀るのを忘れたが、午前二時頃目覺めてみると、一方の肩は完全に水溜りの中に浸つてゐた。寢具も衣類も大分濡れて了ひ、まぐら代りにしてゐた地圖や書物類も亦水をすつて臺無しになつてしまつた、之は屢々 'wash out' として引用される處のものである。

ラムニでは私は宣教師（キリスト教）に會つて、彼の話をきくと、クリスチャンに改宗したインドの者は煙草を禁じられる由であるが、何等慰みなき單調な此の地方の者には、それは餘りにも過酷な要求の様に思はれた。

ラムニとアルモラ間の行進は、永久に感謝するであらう。ガート・グレートの年寄れるパトワリの助力と Messrs. Nash of Gwalhara の親切とによつて、うまく處理することが出来た。

クーリーの先頭をせかしつゝ、私は、タニ達が到着したと同じ日にアルモラについた。翌日の午前中にソナ達が到着した。吾々は直ちに發足して鐵道終點たるカトゴダムに至り、充分汽車に間に合ふことが出来た。

X X X

以上を以てケラスの一九一一年に於る第三回ヒマ

マラヤ遠征を終ることとする。彼は此の行にてシツキムに、又ガルワールに活躍し、廣範圍に亘つてその足跡を印した。そして又此の行は彼の七回に垂とするヒマラヤ遠征の中でも最も成功を収めたものであつた。彼の良き友たりしノーマン・コリーは記してゐる。

『一九一〇年（譯註、事實は一九一一年）^{（註一）}に於るシツキム・ヒマラヤへのケラスの第三回の遠征はおそらく彼のなせる最も成功多き遠征であつたらう。其時彼は二〇、〇〇〇呎以上の二峰に初登頂をなし、その最高なるはパウハンリ（二三、一八〇呎）であり、次のものはチヌミオモ（二二、四三〇呎）であつた。加ふるに一八、〇〇〇呎以上の峠や鞍部を十二以上も越えてゐる。その後彼はガルワール及びナシガ・バルバートを訪れたのであつた。』^{（註六）}

(註一) ケラスの第三回目のヒマラヤ行が一九一一年にな

されたるや、一九一〇年になされたるやは常に問題と

なる。即ち彼自身の記せる The Mountains of Northern

Sikkim and Garhwal (A. J. 26 pp. 113—142) に於て

は明らかに一九一一年となつてをり、又イェルド氏の

記せるとおぼしき Mountaineering in Sikkim and

Garhwal (A. J. 26 pp. 52—54) の方には一九一〇年

となつてゐる。N. コリーの追悼文(第一章、註一參

照) 及び H. W. Tobin の Exploration and

Climbing in the Sikkim Himalaya (H. J. Vol. 2

p. 1) に於ては共に一九一〇年となつてゐるけれど共

彼自身の筆、明らかに一九一一年と記し、又其後彼が

此の時の遠征を必ず一九一一年の遠征と記してゐる點

から考へ、更に又彼自身スリリングスビー A. M. Slingsby

の遠征——之は明らかに一九一一年に行はれた——と

同年の如く記してゐることから考へて (A. J. 26 P. 142)

一九一一年を探りたい。因に舊稿『シツキム・ヒマラヤ

主要登攀踏査年表』(針葉樹第九號所收) に於ては、主

としてトビンの文章に従つた故一九一〇年を採用した

が、爰に改めて訂正する次第である。

(註二) 今日ローナク・ラと呼ばれるものはジョンソン

ピーク北方に在つて東方ローナクから西方チベットへ

越ゆる峠を云ふが、此の場合ケラスの云ふローナク・

ラはテントピークの東方尾根上、南方ゼム流域より北

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就いて

方ローナクに越へるものである。

(註三) 彼がラムボ・ピーク(ラムビュ・ピーク)に登

頂したのは一九〇九年九月十五日であり、之は彼の誤

記である。(前章參照)

(註四) 後述する如くサーダーは六月廿五日に歸還する

豫定なるも遙かにおくれて七月上旬歸へてきた。だ

が彼はコリーの記する處によると、エヴェレスト及マ

カルーから垂れ下つてゐる氷河の寫眞を撮つてかへ

り、これは G. J. (一九一九年五月號) に掲載されてゐ

る由である。(A. J. Vol. 34 p. 146)

(註五) チニモオモ附近の山々の説明は Choniomo

and Iachsi の一文 (H. J. Vol. 9 pp. 149—151) に依

られた。

(註六) A. J. Vol. 34 p. 145

只此處に次のことを注意しなくてはならない。既述の

如くケラスはカメットへ行つた後、休暇のなくなつた

爲急ぎボンベイにかへつてゐるのであつて此の年に

ナンガ・バルバートを訪れたのではない。ケラス自身

はナンガ・バルバートの事を少しも述べてないのであ

る。黒田孝雄氏もこの年にケラスがナンガへ行つた如

く記して居らるゝが、(山岳三十二年二號一三七頁)

之は既述のコリーの文章をそのまゝとられたものであ

らう。コリーの文章の中のその後、Later... はむしろ廣

二五

マッターホルンの山名に就て

吉澤 一郎

本編は W. A. B. Coolidge の "Alpine Studies" (1912) を基とし、それに Guide Rey の "The Matterhorn" (1912) 中の關係個所を適宜挿入せるものである。

前 書

如何なる山も國境の兩側で各々異つた名稱を持つといふ事は有勝ちであり、而もそれが當然の事なのではあるが、茲に今日のマッターホルンには第三の名稱として "Monte Silvio" なるものが存在し、今日尙少く其文書の上で使用せられて居るといふ事は

マッターホルンの山名に就て

此の山の持つ山名の歴史にあつて最も著しい特徴の一つである。而して後述の如き三つの名稱が順次に行ひられて行つたものでは無く、其等が同事に行はれて居るといふ事も興味ある事柄の一つであらう。

次に尙一つ奇妙な事は、此の第三の名稱は、今日こそマッターホルンの専有となつてゐるが、元來 *St. Theodule* 峠に附與されたものであつて、後述の如くモンテ・ローザにも適用された事があるといふ不思議な歴史を持つて居る。

記録の上から觀ると三つのものはその現はれた年

代に於て、次の様な順序になつて居る。

1. "Cervin" -1,581
2. "Monte Silvio", -1,644
3. "Matterhorn" -1,682

(1) "Cervin" の系統

此の名稱は他の二つのものと異り初めからマッターホルンだけに用ひられたといふ點が特徴である。

一五八一年に Philbert de Pingon と云ふ人がサヴォア家の系圖に關する書物を出したが其れには山名の歴史の上からして二つの重大な記述を含んで居る。

其の一はモンブランの一群又は峰頂に附與されたと考へられるもの、即ち "*Gleives montes*" の最初の記載、及び第二が問題のマッターホルンであるが、之も亦明確に其れを指して居るものではなく、歸納的に後人が想像して居るものである。然し乍ら恐ら

くマッターホルン以外のものを指して居るのではないと確信する。

"*Cervinus, maximus mons*" (セルヴァン、非常に高い峰の意) が其れであつて、此處に "*c*" となつて居るのは "*f*" の誤りで、"*f*" は濁音 "*v*" からの轉化とする。而して Valournaiche から、「非常に高い峰」といふ言葉に價する山は、確にマッターホルンを除いては無いのである。そして Pingon 以後の約百年間といふもの地圖上には殆ど此の名稱が記載されて居るのであつた。

次に出現した形は *Tommaso Borgonis* の書いたサヴォア侯領地々圖にある "*M. Servino*" である。此の地圖の實際發行されたのは一六八三年であつて、ロンドン版は一七六五年、チューリン版は一七七二年といふ順序になつて居る。

此の "*ss*" を以て始まる形は一七〇〇年代の終り

に至るまで、或時は後出の他の名稱と共に殆ど何の地圖にも採用されて居る。

尙右のものと多少異つてゐる形、即ち“M. Servin”となつて居るのが三種類許り、“M. Servina”と最後に“a.”を附けてゐるのが一つある。

而して一八〇〇年以前に發行された地圖で書き出しを“C.”にして居るのは、Weiss (1.798) の“Mont Cervin”と Bucler d'Albe (1.799) の“M. Cervino”との二つしか無い様である。

爾後此の佛蘭西式及伊太利式の二つの形は總ての他の綴りを凌駕して使用されて居た。

然し文書の方から云ふと“Cervin”なる綴りは早くも一七三八年に現はれて居るのである。

Aosta 公國の高官 J. B. de Tillier (1678-1745) は一七三八年にアオスタ流域史を完成し、後一八八〇年及び一八八八年の兩度、アオスタに於て出版され

てゐるが、其の第二版に於いて St. Théodule を述ぶるに當り次の様に云つて居る。

「此の峠は“Mont Cervin”と云はれて居るが、其れは此の峠の横に同名のピラミッドが在るからである。而して考證家の言に依れば、此の山は全アルプス連峰中に於ても最高の山の一つである」と。

従つて、此の書出し“C.”の形はアオスタ谷に於ては古くから使用せられて居たものと觀てゐる。

次に Nicolis de Robilant の“Essai géographique, suivi d'une Topographie souterraine, minérologique et d'une Doctrina des Etats de Sa Majesté en terre ferme”と云ふ恐ろしい長い名前の本、之は Academy of Sciences at Turin の(一七八四—五年)までの記念論文として印刷されたので、一七八六年に其の第一部をチューリンで發行して居るが、其の中には、“le pic granitieux du Mont Servin”(花崗岩の峰、

モン・セルヴァン）となつて居る。

然るに Abraham Thomas は一七九五年七月十五日と日附のある書翰の中に “le Mitterhorn (ou Mont Cervin des Val d’Ossuins)” と書いてゐる。

爰に登山の鼻祖とも謂はれてゐる有名な H. B. de Saussure は二度 St. Théodule を越へて居るが、最初（一七八九年）の見聞を記述する際には “Mont Cervin” の形を採つて居るにも不拘、二回目（一七九二年）に此の標高を測定する爲に來た時の事を叙するに當つては、其の文頭に於て “La cime du Mont-Cervin” と記し、文中には “Mitter-Horn ou Corne-du-Matt” 後には “l’aiguille du Mont Cervin” といふ文字を使用して居る。

又 Bourcet は完成後五十年を経て、一八〇一年に發行された “Mém.ires Milit.ires” の中で、“Mont-Servin” の形を採り、其の地圖上には、“N. Servin”

として居る。

然るに P. A. Arnod は一六九四年に St. Théodule 峠に “Monservin ou Mont Servin” といふ名稱を與へて居り、前出シュニールは此の峠名を “Col du Mont-Cervin” として居る。

此の名稱に就いての詮議は此の位に留めて置かふと思ふが、兎に角、現在では誰も知る如く “Cervin” なるものはラテン語系の人々に使用されて居り、“Matterhorn” の方はチユートン系の名稱であるといふ事を附言して次に移らう。

(11) “Monte Silvio” の系統

此の名稱は序言にも述べた様に、初めは St. Théodule 峠に與へられて居たものであるが、或る時（一六九一年）はモンテローザの一群に冠せられ、又時には（一六四四年）マッターホルンに適用せられた

經歷を持つて居る。クーリツジのアルバインスタデイスの二三頁にこれがどんな風に古文書古地圖に於て使用せられたかに就ての一覽表があるが非常に變遷の劇しい事が良く解る。が少く共一八〇〇年頃の文書に於ては *St. Théodule* に用ひたものが多い様である。

P. du Val の *Valais* 圖（之は *Jansson* の地圖帖——一六五八年及び一六四四年の *Blaeuw* の其れにも含まれてゐる）には此の名稱を二つ使つて居るが二つ共に峠の西側に記入してあるのである。従つて此の場合にはその東側に在るモンテローザの事は考へる必要が無くなり、“*Mons Silvio*”と“*M. Silvio*”の何れか一つがマッターホルンを意味し、他が此の峠を指して居ると想像しても差支へない事になる。其の孰れを採るも此の地圖は“*Silvio*”の形で此の峰を呼んだ最初の記録である。

マッターホルンの山名に就て

Gruner が一七六〇年及び一七七八年の兩度發表した文章中に本峰の名稱が出て來るが、最初は“*Mattenberg*”といふのを使用して居り、二度目には“*Mattenhorn*”として居る。此の事は“*Matter*”いふ名稱が峠より峰へと移行せられた事實を示す點では面白い文獻であらう。而して彼の一七七八年の記述に於ける“*the Silvius, which otherwise is also called Mattenhorn or Angsterberg*”は、假令彼が *Walsen* が *Valais* 圖に“*Matter Horn* alias *Mons Silvius*”となし（一七六八年）*Mallet* が瑞西圖に“*Matter Horn* ou *Mont Silvio*”として居る（一七九八年）と同様に“*Mattenhorn*”及び“*Silvio*”を附與して居るとしても、彼の既知の峠の上にある巨峰の存在を確然と知つて居なかつた事を物語るものである。

之を要するに十八世紀の終り頃には斯くの如く、

此の雄峰に“Monte Silvio”といふ名稱を用ふる傾向があつたのである。但し之には二つの例外があつて、其の一は令名高き植物學者 Abrecht von Haller が St. Theodule を意味する所に“Mont Silvio”を使つて居るのと、第二は前出アブラハム、トーマスの書翰である。

從て此處で暫定的の結論をせば、「一六四四年以前の總ての地圖に於ては“Mont Silvio”を St. Theodule 峠に與へ、一六九一年以後のものはそれが Monte Rosa を意味し、一六四七年及び一六九〇年の間の四、五の地圖はマッターホルン又は St. Theodule に適用されて居た」といふ事になる。

× × ×

扱て茲で私は、讀者の中に、それでは此の“Silvio”といふのは一體何を意味する言葉であるのか、といふ疑問を持たれる方があると思ふので、レイの「マ

ッターホルン」の附録にある面白い假説を述べて見よう。

尙之は有名な Josias Simler 著“De Alpibus Commentarius”(一五七四年)中にある假説を F. G. Karineti が伊太利山岳會々報(一八六七年)に自説を加へて發表したものである。

× × ×

Silvius と謂ふのは恐らく當時 Salas i と Seduni の地方に軍隊と共に駐屯して居たローマ軍の指揮官の名前であつて、彼等は多分此の兩地の間にある St. Theodule 峠を越した事があるのであらう。此の Silvio とは彼の Caesar が Alps の峠路の開発を命じた Servius Galba と同じものではないだらうか。其の當時から此等の峠は交易者達に依つて、非常な危険と困難の許に横斷せられて居たものである。Servius Galba は Caesar の命を實行する爲に其軍勢

を引連れ Allobrogi (Savoy) から Valais の Octodunum (Martigny) に來、其處へ天幕を張つた。彼が開發の命を受けたといふ峠路は其の地點より考へると、St. Bernard, Simplon, Théodule 及び Moro 以外のものでは無かつたに相違ない。従つて Servius の名前(轉化して Silvius 後に Gravin 又は Cervin, Cervino 等)が彼の名譽の表象としてかの名峰に附與されたものではないだらうか。尙マッターホルンの山麓にある樹木の名稱から來たのかも知れぬといふ説がある事を附記して置く。

(III) “Matterhorn” の系統

此の名稱が此のピークの北麓にある “Zermatt” に關係あるものではないかと謂ふ事は誰の頭にも浮んで來る。其の想像は事實であるが、此の Zermatt といふのは、多少異つた形では、一四九五年以來の

事であつて、其れ以前は此の古き羊飼ひの樂園は Praborgne と呼ばれて居た。Praborgne といふのは又伊太利語の Praborno の佛蘭西化したものであつて、此の伊太利語は Prato 及び Borno の合成語である。前者は耕地を、後者は牧夫が家畜の飼養に缺くべからざる自然の湧泉を意味するものである。

“Zermatt” の方はどうかと云ふと、之は獨逸語の “Zur Matt” (牧場の近く) から “Zer” と轉化して來たものである。前出 J. Simler は其の著 “Vallée des Descriptio” に於て “Matt” をラテン化し “Pagus Matta” “Matia vallis” として居り、ソシユールは “Zer-Matt” と書して居る。

而して “Matter” なる語の最初の出現は St. Theodule に關係ある事は確かである。それは Sebastian Münster “Cosmographia Universalis” (Basel, 1550) 及び、續いて J. B. Plantin の一六五六年に出版し

た“*Helvetia Antiqua et Nova*” (Berne) に依つても明らかに解る事である。

本峰が、今日最も著名になつて居る此の名稱で最初に記載されたのは、一六八二年の事であるが、勿論一つの地圖に斯く記された以上は、今日其の年月を明示し得ないからとて、當時已に其の名が使用せられて居た事を意味するものであるのは云ふ迄もなす。此の一六八二年と云ふのはValaisの高官Antoine Lambert がその地方の地圖を作成した年である。此の地圖は後に一七六八年 Walsch のものが出る迄は同地方に關する限り最良のものであつて、ツエルマツト以外の谷の研究にも利する所多大であつた。

然し其れには“*Matter Diolain h.*”となつて居る。此の不思議な“*Diolain*”なるものが誤りである事には疑ひがない。之は恐らく佛人印刷師による誤りで、“*Gorvin*”或は“*Théodule*”を意味するものであら

うが、當時後者がその峠に使用せられた記録の存在せぬ點より觀て、前者の誤記なりとする方が可能性が多い譯である。

Jaillet の四つの地圖（一六九〇—一七〇七）は總て“*Matten M.*”となし、内二つのサヴォア圖には尙“*M. Gorvin*”を附記して居る。

Gruner に就いては前述の通りである。一七六八年の Walsch の Valais 圖には“*Matter Horn*”となつて居り、Ab. Thomas 及び H. B. de Saussure の“*Mattenhorn*”“*Matter-Horn*”を使用して居る事も前掲の如くである。

斯くの如くして、尙他に例を挙げれば限りがないが、“*Mattenhorn*”なる形は、少く共ラテン系以外の人々の間には廣く用ひられる様になつて來たのである。

而して十九世紀に這入つてからは三つの名稱即ち

Carvin, Monte Silvio, Matterhorn が非常に一般的となつて來たが、此の事は其の頃より盛んに世の中に現はれて來たガイドブック等に原因するのである。

案内書の一例として Ebel のものを示せば、

「Matterhorn, Carvin or Silvio とは Valais と Piedmont の國境上 Vispach の岩の底部より直立するアルプス連山に於て最も狹長銳利な針峰の名稱である。高さ海拔一三、八五〇呎なり。」と説明して居る。

今日でも比較的容易に手に入る C. M. Engelhardt 著 “*Naturschilderungen aus den höchsten Schweizer-Alpen*” (1840) に於ても同様に取扱つて居るのを見る。

尙一八三五年 Worn の地圖帖には個人的印象まで加つてゐる。即ち “*Matterhorn or great Mt. Cervin, 13850ft, inaccessible*” (unreistiglich) 云。

マッターホルンの山名に就て

× × ×

茲に最も奇妙な名稱が與へられて居たといふ事がチューリヒの Conrad Zeller によつて一八三二年に報ぜられて居る。此の話は J. Fröbel の “*Reise in die weniger bekannten Thäler auf Nordseite der Penninischen Alpen*” (1840) の中に再録されて居るから悉しい事は其れに就いて見られたい。

其れは、ツェラーがツイナルから Allée Alp に登つて行つた時に一人のチーズメーカーが或る岩壁を指さし乍ら「あいつを登つて行くと東の方にでかい山が聳えてゐるが、そいつは “*Grande Couronne*” と云つてチューリンの近所から見える山だ」と教へた。

此の話に胸をときめかせ乍ら次の日に Pigne de l'Alée (三四〇四米突) に向つて一時間許り登つて行つた所、之が單にマッターホルンにしか過ぎぬ事を

発見したのであつた。

アルプスの古典“Über Eis und Schnee”の著者 Gotlieb Studer の地圖（一八四九年）には是が地方的名稱として載せてあるが明らかに誤謬である。

尚ツエラーは此のチーズ製造人は事實“Cervin”（方言として“Carving”）の名稱を Allée 或は Moiry 氷河の上端に聳ゆる峰、ツエラーが後に“Pointe de Zinal”（三八〇六米突）と命名したものに與へて居た事を附け加へて居るが、實際は Allée の人達の“Mont Chavring”なるものは Allée 或は Moiry 氷河の頭部にあり、而も眞のマッターホルンの方向に一致する“Grand Cornier”（三九六九米突）を指して居たものである様だ。エンゲルハルトも此の事を一八三七年八月四日に Torrent Alp の牧夫から聞いて前出“Naturschilderungen”に掲記して居る。

最後にもう一言加へて本稿を終へる事にする。

それは古い古い昔の形“M. Cervin”（即ち“S”を頭文字にしたもの）が再びサルヂニヤ政府發行の地圖（一八四一年及一八四六年）に現はれた事と、一八四五年チューリンで發行された“Le Alpi che cingono le Alpi”といふ標題のある地圖の方には“Cervin”となつて居るにも不拘、主文には“Matterhorn”といふ誤つた綴りとなつてゐる文書が出版された事であるが、これは當時伊太利が自國の北境に聳ゆる此の山に就いての明確な知識を持つて居なかつたといふ有力な證據となるものである。

會務報告

九月定例理事會

九月八日午後六時半於虎ノ門事務所開催

出席 武田、藤島、黒田、吉澤、茨木、津田、西堀、野口

高橋、角田、中司

一、早川理事轉任に付き殘存期間補缺理事選任の件

一、山岳バックナンバー整理の件

一、會費滞納者の件

八月 休 會

十月定例理事會

十月十三日午後六時半虎ノ門本會事務所に於て開催

出席者 武田、島山、藤島、冠、茨木、黒田、吉澤、加藤

石原、高橋、野口、角田、島田、中司

一、「山岳」第二號編輯報告の件

一、事務分擔の件 野口理事に圖書係依頼決定

一、會費滞納者督促入金狀態報告の件

一、「山岳」バックナンバー頒賣の件

會務報告

一、厚生協曾大會準備委員選任の件 冠評議員に依頼する事に決定す

一、新任理事詮衡の件 本年にて角田、茨木、島田、中屋今西の五氏任期満了、並に早川義郎氏一身上の都合により辭任申出でありたるに付新任及補充理事（二年間）の詮衡を爲す

一、社團法人設立の件
一新入會員詮衡の件

「山岳」投稿規定

- 一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるを問はず。
 - 一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
 - 一、原稿は返却せざるものとす。
 - 一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
 - 一、原稿にはその梗概を附せられたし。
 - 一、紀行には概念圖を添付せられたし。
 - 一、寫眞は光澤印畫紙に焼付けられ度、裏面或は別紙に説明記入を乞ふ。
 - 一、校正は編輯者に一任せられたし。
 - 一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。
- 原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所
- 原稿用紙所用の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

著作權有所

發行所日本山岳會

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル内

昭和十三年十二月十日印刷

昭和十三年十二月十五日發行

〔定價金參閱〕



編輯兼發行者

黑田孝雄

印刷者

植田庄助

東京市芝區濱松町一ノ十三

電話芝一六四九番

振替口座東京四八二九番

「山岳」第三十三年

「山岳」第三十二年總目次

黒部奥山と奥山廻り役 (二)
山岳語彙蒐集報告 (一)

多の小長白山

登山に於ける山と人間

——あそびを通じての登山の解釋

伊奈川と中御所谷

鳥 甲 山

アレキサンダー・ミツチエル・ケラスに就て

マッターホルンの山名に就て

會務報告

理事更迭

定例理事會

新入會員

退 會 者

會員計報

圖 版

下奥山日記 (安政三年) 竹内民平記

奥山御境目等略繪圖 (文化年中) 其一

同

佐伯記錄

中 島 正文 一
高橋文太郎編 三
早大山岳部 三二

井 上 幸 治 三三

吉 澤 一 郎 三二

中 村 謙 二五

望 月 達 夫 三〇

吉 澤 一 郎 三一

挿 圖

上奥山廻り路程表

下奥山廻り路程表

斜面より見たるカクラ

地 圖

冠帽峰附近の圖

伊奈川廻行圖

伊奈川源頭見取圖

中御所谷濁澤概念圖

對 頁

山岳第三十二年總目次

卷頭 二六
對頁 二七
三

新川郡奥山繪圖 (天保七年) 脇坂長右衛門製
甫上洞より冠帽峯
机山峯の第二キャンプ
朱乙の町端れ
伊奈川源頭、上ノ千疊敷俯瞰
伊奈川棧道
伊奈川源頭、水無シ平
三澤岳頂上より木曾駒主脈
中御所谷

三三
三三
三三
三三
三三
三三
三三
三三
三三
三三
三三

二〇
六〇
四

二四
二六
二六
二六
二六
二六

第二號添付

The Journal of the Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. XXXIII

1938

No. 2.